
銀色の真実と【六花】

冬華 蜜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀色の真実と【六花】

【Nコード】

N1018R

【作者名】

冬華 蜜

【あらすじ】

注意：捏造設定

攘夷戦争時の銀時の部隊【六花】が江戸中に散らばり、未だに活動を続けていた。

それは、ただ1人の“心”を守るためだった。

攘夷は仲良し設定

銀さん至上主義

オリキャラ注意

攘夷戦争時の銀時の部隊【六花】は捏造

登場人物 攘夷・真選組・万事屋・鬼兵隊・吉原など、ほぼオール
キャラ

序・内緒話はコソコソと（前書き）

初投降です。

銀魂第2期決定を聞いて、ついつい書きたくなくなってしまいました。

【読みたいものを書く】という自己満足型な作品ですので、苦手な方は逃げてくださませ。。。

見てやるか、という心の広い方はどうぞご覧ください。

序・内緒話はコソコソと

暗い室内に向き合う青年が2人。

表立って会うこともできる彼等が、密会まが紛いのことをしているのに理由はあある。

上座かみぎに座る彼は監視を受ける身であり、そして彼等がこれからする話は、彼を監視する者達に聞かれると非常にマズイ話であったのだ。

「……して、どうであった？」

自分たち以外の気配がないことを確認させ、彼は訊ねた。

目の前に座る青年は柔和な表情をつかべたまま答える。

「そろそろ動き出すのではないかと」

「……そうか、ではあやつに知らせてやるとよい」

「かしこまりましたございます」

深々と頭を下げた青年は口元を綻ほころばせた。

(あの方に会うのも久しぶりだ)

序・内緒話はコソコソと（後書き）

まずは序文から・・・

1・合縁奇縁【あいえんきえん】（前書き）

銀魂キャラの口調はいまいち・・・

シッコ/ビビる満載で続きます（苦笑）

1・合縁奇縁【あいえんきえん】

不思議なめぐり合わせによって出会った仲間達。戦場という環境の中にあつてどれ程心の支えになったことが。

その関係は終戦後バラバラとなつてしまつた今でも、腐れ縁という形で残つていた。

しかし、それを知る者は少ない。

「あー・・・ヒマだー・・・」

「・・・だったら、仕事しろよ」

「そうネ、ヒマヒマ言つなら仕事するアルヨ、だからマダオつて言われるネ!」

ソファーに寝転がり読みかけのジャンプを顔にのせてボソリと呟いた銀時に、すかさず子ども達のツッコミが入る。

「そうは言つても・・・依頼がないんじゃ、しょうがないでしょーが」

「・・・っ!アンタ仕事する気あんのか!!宣伝も何もしてないんじゃ依頼が来るわけないだろうがああああっ!!!」

叫んだ新八が銀時の顔からジャンプを取りあげると、死んだ魚のよ
うな紅目はその顔を捉えた。

「あゝ・・・新八君？牛乳飲んでる？カルシウム足りてる？あんま
り怒ると血管切れちゃうよ？・・・あ、でもいちご牛乳はあげな
いよ？俺んだからね？」

「銀さんッ！アンタって人はッ・・・！」

ピンポーン・・・

のんびりと言われた言葉に新八がフルフルと震え、怒りを爆発させ
ようとしたその瞬間、それを遮るかのようにチャイムが鳴った。

「・・・新八君、ほらほら、お客さんかもよ？」

ヒラヒラと手を振る銀時を軽く睨み、新八は溜息をつきながら玄関
に向かい、戸を開けた。

「はい、どちら様ですか？」

そこにいたのは、薬売りのような格好をした男性だった。

「あ・・・えーと、ご依頼ですか？」

訊ねる新八に、男性はニコリと笑った。

「春霞しゅんかと申します。坂田銀時さんは御在宅でしょうか？」

「は、はい・・・えと・・・じゃあ、あがってください」

「ありがとうございます。失礼いたします」

深々と頭を下げた男性・春霞を連れ、新八は事務所兼リビングに向かった。

「銀さんにお客さんですよ」

「あ？」

のんびりとテレビを眺めていちご牛乳をすすっていた銀時は、クルリと振り返り男の姿を視界に収めるとわずかに目を細めた。

「・・・ご無沙汰しております」

微笑んだ春霞に、銀時は溜息をついた。

「春霞？・・・おまえが万事屋まで来るってことは・・・マズイ事態でも起こってるのか？」

「夏霧なつぎりの使いですよ・・・彼はあそこから出るにも色々大変ですから」

言葉を濁して春霞は懐から書状を出し、それを銀時に渡した。

「夏霧、ねえ……十二、お前らまだつるんでんの？」

のんびりと問うた銀時に、春霞は苦笑した。

「ええ、まあ……それなりに」

「ふーん……」

無感動に相槌をうつた銀時の脇で、神楽が首を傾げた。

「銀ちゃん、コイツ、ヅラの部下アルか？」

昔の知り合い(?) 〓攘夷志士〓桂〓桂の部下という式が神楽の頭の中で構成されたらしい。

銀時は神楽に向けて苦笑してみせ首を振った。

「いやいや神楽ちゃん、違うからね? ……春霞はヅラじゃなくて、俺の……」

そこまで言いかけて銀時は口を閉ざす。

「俺の、何ネ？」

気になった神楽が詰め寄り、新八もじつと銀時を見つめてくる。

「あ……なんつったら良いかな……」

「……私達は攘夷戦争時、銀時様の部隊【六花^{りっか}】に所属していたんですよ」

ガシガシと頭を搔いて言い難そうにしている銀時をフォローするかのようには、春霞が答える。

「銀さんの部隊？」

首を傾げる新八に、銀時が慌てたように口を開く。

「つつつてもよ、5人しかいなかったっつーか・・・って、春霞！余計なことしゃべんたって！！」

「良いじゃありませんか、桂さんとの関係を知っているくらいです。それなりに事情は話してあるのでしょうか？」

おっとりと返されて、銀時はぐう、と呻く。

「ねエねエ、昔の銀ちゃんってどんなだったアルか!？」

興味津々といった神楽に訊ねられて、春霞はクスクスと笑う。

「元気なお嬢さん、攘夷戦争時の話は楽しいものじゃありませんよ・・・ですが、そうですね・・・天人からは白夜叉と恐れられていましたが、銀時様は味方にはとても優しく、桂さんや高杉さん、それに坂本さんと一緒にいる時はよく笑顔を見せていましたね」

「そうなんですか・・・」

「紅桜」の事件の際に高杉と決別した銀時。だが、高杉もまた大切な仲間だったのだと春霞の言葉から感じ取ってしまい、新八は困ったように眉根を寄せた。

「コラコラ、そんな深刻そうな表情すんじゃないの」

べし、と新八の眉間の辺りを軽く叩き、銀時は肩を竦める。

「す、すみません」

「で、銀ちゃんの部隊の5人って？どんな奴らネ？」

謝る新八の脇で、神楽は尚も【六花】について春霞にねだるように訊ねる。

「銀時様と私と夏霧、水澄^{みずみ}、そして紅一点の氷柱^{こりゅう}の5人が【六花】と呼ばれていました。皆戦争孤児でしてね・・・銀時様が拾ってくださってその強さに憧れて勝手にひっついていたのが始まりなんですよ」

「そうアルか・・・」

「なんか、僕らと似てますね」

新八や神楽と銀時との出会いも似たようなもので、なんだかんだ言いながら銀時の傍にいる。

「そうですか、フフ・・・君らとは話が合いそうだ」

笑みをうかべたままの春霞に、新八と神楽は嬉しそうに頷く。

「春霞・・・あんまり余計なことこいつらに教えんなよ？」

「わかっていきますよ、銀時様・・・あ、そういえばこの間、水澄を見かけましたよ?」

「江戸でか?」

「ええ、桂さんトコの攘夷党の連中と一緒にいましたよ」

「・・・・・・・・水澄・・・まったく、余計なことしてんじゃねえだろ
うなあ?」

「あ・・・・・・・・そうですね・・・」

(例えば、桂を煽ってるとか、煽ってるとか、煽って・・・)

「つて、まさか俺の居場所、ヅラに教えたのは水澄じゃねえだろう
な!!!」

桂との再会の時を思い出し、銀時はハツとして叫ぶ。

「ありえますね・・・水澄は口が軽いから・・・」

頭を押さえた春霞が答えれば、銀時はガツクリと肩を落とした。

「か・・・・・・・・だから水澄にや潜入を任せられねーんだ・・・」

「ああ、潜入させていたのですか」

思わず銀時が漏らした言葉に、春霞はおっとりと納得した。

「・・・・・・・・!!!」

ギョツとして立ち上がった銀時に、新八と神楽の視線が突き刺さった。

「銀さん……どういことですか？」

「銀ちゃん、何かワタシ達に隠してるアルか!？」

「あー……謀はかったな、春霞……」

「フフフ……良いじゃありませんか、万事屋として一緒に過ごしている彼らにだって知る権利はありますよ」

常に笑顔の彼が実は一番の激情家げきじょうかであり、こうと決めたらテコでも動かない頑固者がんこものだということを思い出した銀時は深い溜息をついた。

「そっぴや、お前が一番しつこかったな……」

「私がしつこかったおかげで【六花】が結成されたわけですしね」

「……ったく。わかったよ……こいつらにも話してやればいいんだろ?夏霧の使いだなんてほんのついでで、こっちが本題かよ」

「いえ、夏霧の使いも緊急でと言われていたのですが……」

「おいしい!?!緊急って早く言ええええ!?!」

慌てて書状を開いた銀時は、そこに書かれている内容に眉間のしわを深めた。

「……春霞……水澄と氷柱に至急連絡取れるか？」

「ええ、できますよ」

「例の場所に午後7時って伝えとけ……俺は調べることがある……
・新八、神楽」

「……はい」

「何ネ、銀ちゃん」

「……一緒に行くぞ」

また仲間外れにされるのかと身構えた子ども達に、銀時は困ったよ
うな、だが嬉しそうな笑顔をうかべてそう告げる。

「ハイ！」

「うん!!」

そんな3人の様子を見つめ、春霞は微笑んだ。

(昔を……思い出しますね)

1・台縁奇縁【あいえんきえん】（後書き）

キャラ紹介的な話はもう少し続きます・・・

2・頭が動けば尾も動く(前書き)

銀ちゃん動く。

2・頭が動けば尾も動く

とある場所のとある門の前で、銀時はすう、と息を吸った。

「たのもーうツ！！！！つてか多串くーん！税金ドロボー！！・・・
金返せやコラア！」

目一杯に叫んだ声はビンビンと空気を震わせた。

「ウルセエーんだよオおおツ！！借金取りかテメエはあああああ
つ！！！！」

半ギレ状態で門から出てきた土方と、

「あー、旦那。お久しぶりでさア」

のんびりと手をあげた沖田に出迎えられて、銀時はニヤリと笑った。

「よお、ちよつとアンタらに聞きたいことがあって来たんだけどー」

銀時が真選組に来ること自体珍しいのだが、それ以上に聞きたいこと
とがあると言われて土方と沖田は互いに顔を見合わせた。

近藤の部屋に通された万事屋3人は、近藤と土方、沖田と向かい合

って座っていた。

「……茂茂公のお気に入り？」

長い沈黙の後、口を開いたのは近藤だった。

「そ。將軍様がお気に召してるっていう幕臣がいるって噂、聞いたことナイ？」

薄く口元に笑みをうかべ訊ねる銀時に、近藤達は首を傾げた。

「トシ、聞いたことあるか？」

「いや……そんな話は一度だって……ってか、なんでテメエがそんなこと知ってたんだ!？」

ギロつと睨まれて、銀時は肩を竦める。

「いやいや、多串君、万事屋なんて家業をしてるとねエ、色々と情報網つてのができるんだな、これが」

そう答えながらも、どうやらその存在を知らないらしい3人に銀時はホツとするのと同時に、それも後わずかで知られることとなるのかと思うとむず痒い気持ちになる。

「……で、なんで旦那はいきなりそんな事を聞きに来たんですか
イ？」

沖田の問いにそれもそうだと近藤と土方は銀時に視線を向けた。

「さすが総一郎君、良いトコ気付くね」

「……総悟でさア、旦那」

「いや、ちよつと調べて欲しくてな……ほら一応、アンタらも幕臣じゃん？」

「一応つてなんだ!!!一応つて!!!」

がなる土方を抑えながら、近藤は首を傾げた。

「お、落ち着け、トシ……な、なあ、万事屋？なんで、調べる必要がある？なんか、関係でもあんのか？」

普段はおバカさん丸出しの局長だが、たまに鋭いことを言ってくる。そんな感想を抱いて銀時はクツリと笑った。

「一番最初に関係してくるのはアンタらだろうなーと思ってさ……教えとけば貸しになるかな　なんて？」

後でその貸しに利子をたくさんつけて返して貰う気満々の銀時である。

「……万事屋……テメエ、何企んでやる？」

「違う違う、何か企んでんのは俺じゃなくて、將軍様とそのお気に入りだつて……ホントだよ、確かな筋からの情報だし」

鬼の副長に睨まれても飄々とした態度を崩さない銀時に、土方のイライラはMAXに到達しようとしていた。

「旦那、その確かな筋つてのは？」

「んゝ……まだ、内緒」

ニヤリ、と笑う銀時から視線を外し、沖田は新八と神楽の表情を窺うかがった。

2人はどこか戸惑ったような表情をつかべて銀時を見つめている。

(……この様子じゃ、こいつらも知らねーってコトですかイ)

「……まだ、と言ったな？」

銀時を真っ直ぐに見つめ、土方が呻うめくように問う。

「あゝ、言ったかな？」

「とぼけんじゃねエ!!」

バァン!と畳を叩き、土方が身を乗り出した。

「テメエは何かを知ってるが、今は話す気はねエってこつたるうが!!……一体、何を隠してやがる!!」

「……オメーらに関係あることだ。オメーらで調べな……そこまで親切にしてやる義理はねえし」

銀時の死んだ魚のような目が、剣呑さを帯びる。

(・・・この気迫・・・！)

その目に気圧された土方はごくりと喉を鳴らし、それから指示を仰ぐように近藤へと視線を向けた。

「・・・わかった」

「近藤さん!？」

「万事屋の言う通りだ。自分達に関係してくることなら自分達で調べべきだ。・・・だが、それならばなんでそんな事を教えに来た?」

真つ直ぐに視線を向けられて、銀時は目を細めた。

「さてな。それも調べたらわかるかもしれねえよ?・・・それに、多串君がコソコソとジミー君に調べさせてることも・・・もうすぐわかる、かもな?」

「!?!」

ギョツと目を見開く土方を見て、銀時は肩を揺らして笑う。

「正直すぎんだよ、土方君?・・・まあ、とりあえず知りたいこともわかったし?これで万事屋は退散しまーす」

よっこらせ、と年配者のような掛け声をかけて立ち上がると、銀時はここに来てからずっと黙って己を見ていた子ども達に笑いかけた。

「ほら、行くぞ。新八、神楽」

そこでようやくあの騒がしい子ども達が一言も話していなかったことに、近藤と土方は気付く。

「……ッ待て、万事屋！」

「まだ話は終わってねェ!!」

「やめときなせイ……たぶん、聞いても無駄ですぜイ」

立ち去る銀時達を留めようと立ち上がった2人を引きとめたのは沖田だった。

「総悟？」

「……なんでだ？」

「旦那のあの目……近藤さんも土方さんも、俺と同じ印象を感じたんじゃないですかイ？」

そう問われて、土方は眉間にしわを寄せた。

「……一瞬、刃を首に突き付けられたような気がした……」

「トシ、お前もか……」

「!……近藤さんも？」

「そう……アレは“殺気”でさア……何だかわからねエですが、旦那は俺達にその事を調べさせたいんでさア」

「調べさせたい？・・・万事屋の野郎、俺達を何に巻き込もうとしてやがるんだ？」

銀時の背を見送りながらのんびりと呟いた沖田の言葉に、土方は不機嫌そうにぼやいた。

一方、真選組を後にした3人はしばし黙って道を歩いていた。

「・・・ねえ、銀ちゃん・・・一体、真選組で何を調べたかったアルヨ」

沈黙に耐えかねて神楽が口にすれば、銀時は肩を竦めた。

「ん〜・・・多串君がどのくらい本気なのかなあ〜ってのをさあ」

「本気・・・ですか？」

「あのマヨの本気って、どういうことネ？」

尚も首を傾げる2人を振り返り、銀時はクツリと笑った。

「最後に、ちよーつとカマかけたでしょ？」

その言葉に新八があ、と声をあげた。

「もしかして、ザキさんに調べさせてるっていう……」

「おー、新八君せいかい……そう、土方は山？に俺のことを調べさせてる」

いつものような通称ではなく彼らを呼ぶ銀時の表情が真剣なものになる。

「もしかして……白夜叉のこと……」

「そこまではいってないだろーな……でも、攘夷志士に関係あるとは思ってるってところか？」

「桂さんや高杉さんとの関係に気付かれてるってことですか？」

新八が問えば、銀時は口元に手を当てる。

「どうだろうなー。ツラや高杉もそうだが、辰馬との関係も調べられると困るネタがあるからなあ……というわけで、どのくらい本気で調べてんのかを確認したかったわけよ」

「……どうしてですか？」

「んー？……そりゃ、これからアイツらと連絡を取り合うのに周囲を嗅ぎ回られるのは困るしな。わざわざ將軍のお気に入りのお話をしたのだから監察の目をこっちから逸らす意味もあるってわけだ」

銀時は新八にあっさりと答え、肩を竦めた。

「……そういことですか」

「で、アイツらってことは、ツラやあのグラサン天パと連絡取るアルか？」

「ん？まあ直接は取らねーよ？・・・だから、春霞しゅんかを動かしてるってワケ」

「はー・・・今までそうやって情報収集してたんですか？」

呆れたように訊ねる新八に、銀時は苦笑した。

「まあ・・・全部ってわけじゃないけどなー・・・っつーかよ、何にも言わなくても勝手に情報集めてくるからなあ、アイツら」

そうばやく銀時に、新八も神楽もクスクスと笑う。

「好かれてますね」

「さすが銀ちゃんアル！」

「あゝ、まあ・・・過保護だよなあ・・・いつの間に立場逆転したんだかなあ・・・」

攘夷戦争時は確かに己が幼い彼らを守っていた。だが、今は彼らが己を守るうとしている。

今もまた、己のために駆けずり回っている【六花】のメンバーを思い浮かべ、銀時は何とも言えない表情をうかべたのだった。

3・壁に耳あり障子に目あり

「……そう。わかったわ……じゃあ、午後7時に」

通話を終わると、氷柱は携帯を閉じ、口の端に笑みをうかべた。

「とつとつ動くのね……フフ」

忌まわしい終戦の日より10年。その間ずっと氷柱達にとって恩人である銀時が、いつか奴らに見つかり肅清されるのではないかとハラハラしどろしどろだった。

それだけ、彼は奴らから恐れられているのだ。恐らく、現在攘夷志士達の2大筆頭となっている桂や高杉以上に。

だが、それももうすぐ終わる。少しずつ時いていた種が芽吹き始めたのだ。それを知ったら、きっと彼は過保護だと困ったように笑うのだろう。

「……氷柱」

そんな事を考えていたら突然名を呼ばれ、氷柱はピクリと肩を揺らした。

「……晋助様？何か御用ですか？」

振り返ると今現在の雇い主が目の前にいた。先程の話を聞かれたかと思っただが氷柱は敢えて素知らぬふりをした。

「……地上したに使いを頼む」

そんな氷柱に気付いているだろうに、高杉は淡々と告げた。

現在、春雨との会合の帰り途中である。高杉が地上したと称したのはおそらく本拠地の京ではなくターミナルに近い江戸だ。

「はい、構いませんが……何をご入り用でしょうか？」

問う氷柱に、高杉はニヤリと笑った。

「甘味」

「……え!？」

「任せたぞ」

「ちよつ……晋助様!？」

スタスタと行ってしまう背中を見送り、氷柱はガツクリと肩を落とした。

「あ……バツチリ最初から最後までさっきの話聞かれてるじゃない」

高杉は甘味を口にしない。そんな高杉が甘味を所望することなど有り得ない。つまり、甘味＝銀時の情報だ。

銀時が得意としたのは先陣を切って乱戦に持ち込み敵を薙ぎ倒す戦い方だ。だが、未だ力の弱い子どもだった他の「六花」の面子が得意としたのは情報戦。持てる限りの情報を駆使し、時には子どもということまで利用して天人達を恐怖の渦に叩き落とした。

【六花】は攘夷志士達の中でも情報戦に特化した部隊と捉えられており、銀時の部隊であると知る者は少ない。が、それを知る高杉が先程の話を聞いていて、未だに氷柱が銀時と繋がりを持っていることに気付いたのは間違いない。

「絶対、春霞に怒られる・・・！」

多分、銀時にも怒られる。春霞とは別の意味でだが。

頭を抱えた氷柱は、その姿を他の鬼兵隊の幹部の1人に目撃されたことすらも気付かず、どう言い訳をしようかと悩んでいたのだった。

万事屋の3人が帰った後、土方は山崎を呼び出した。

「・・・以前、万事屋について調べさせたな」

「あー、はい。・・・でも、旦那は違いますよ、副長」

「・・・そうじゃねエ。山崎テメエ、奴に探っていたことを気付かれてんぞ」

「え！？嘘でしょう！？・・・だって、旦那は何にも気付いてないようなそぶりでしたよ！？」

己の偵察に自信があるのではなく、あくまでも銀時の様子が変わらなかつたと主張する部下に土方は頭を抱えた。

「つたく、誰がこんなことで嘘を言う？奴がハッキリと言ったんだ。俺がお前に調べさせていることもじきにわかるかも、とな」

「で、でも、それは旦那のことじゃなくて、他に調べていることも・・・」

わずかな希望に絶るように山崎が言えば、土方は唸る。

「それも可能性としてはある。確かな筋からの情報だって幕府内部のネタを持って来やがったんだしな・・・だが、俺はどうしても“自分を探っているんだろう？”と聞かれているように思えたんだ・・・」

「副長・・・俺は信じたくないですよ・・・だって、旦那には色々世話になってんじゃないですか」

「・・・私情は捨てる・・・とりあえずテメエは幕府の下っ端共に茂茂公のお気に入りの噂がないか聞いてまわれ」

「・・・わかりました」

未だに納得していない様子の山崎だったが、仕事を与えられて渋々と部屋から出ていく。

「……土方さん、アンタは旦那が攘夷に関係してると思ってるんですかイ？」

ス、と隣の部屋の襖が開き、沖田が顔をのぞかせる。

「……あれだけバカ強エ奴が、フツ一の侍やってたように見えるか？」

ジロリ、と沖田を睨んだ土方だったが、盗み聞きをしたことについては何も言わずにその質問に質問で返した。

「そりや旦那は強エですが、それだけで攘夷志士の連中と関係すると断定するには、乱暴過ぎですぜイ？」

沖田自身銀時を信じたいという思いから弁護するような言葉が口を突いて出る。

「……ここで論議しても始まらねエ……とりあえず、松平のとつつあんトコに例の噂について聞きに行く」

銀時の件についてはこのまま平行線になると判断した土方は、話を切り替え立ち上がる。

「俺も行きますぜイ……近藤さんも行くって言ってましたしねイ」

沖田も立ち上がり、2人揃って近藤の部屋へと向かった。

城内某所

「……松平殿」

廊下で呼びとめられた松平は、振り返って首を傾げた。

「保科様？」

保科は若手ではあるが幕府官僚として天導衆とも繋がりのある雲の上の人物である。あまりにも珍しい人物が己を呼び止めたので、何の用なのかと松平は緊張する。

「ああ、そう硬くならず……少し、お話をしたいだけです」

ニコリと笑う保科に松平は戸惑いながらも頷いた。

松平に与えられた部屋に來ると、保科は懐から包みを取り出しそれを広げる。

「……落雁、ですか」

「ええ、一緒に食べましょう。上様から頂いたのです」

どうぞ、と勧められて松平はそれを口にする。

「甘い・・・」

「疲れがとれるだろうから、との御好意ですよ。・・・松平殿も随分と大変そうでしたからね」

それは真選組動乱事件のことを指しているのだろうと理解すると、松平はこっそりと溜息をついた。

（テメーらのせいで、高官から目え付けられちゃったじゃないの）

「ああ、他意はありませんよ。ただ、彼らにお願いがありましたねえ。松平殿に取り次いでもらいたいと思ひまして」

松平の溜息の意味を正確に捉えた保科は、クツクツと笑いながらそう告げる。

「お願い、ですか」

「ええ。上様とも交流の深い松平殿の配下である真選組ならば間違いないと思いますので」

「・・・ということは、将ちゃん関係で？」

「近いですが、厳密に言うとな私のお使いという感じでしょうか・・・ああ、一つ聞きますが、彼らは天導衆の支配に関して全面的に肯定しているということはありませんよねえ？」

「！?」

突然の言葉にギョツとする松平に、保科は声を潜めた。

「実のところ、私もあまり奴らは好きじゃありません」

「っ……そんなことを言つては、お立場が」

「別に、自分の心を殺してまでもしがみつかなければならない立場じゃありませんし。ただ、便利だったので養父の後を継いだだけです」

「！……ご養子でしたか」

「ええ、実は私は戦争孤児なのですよ。亡き養父は実父の又従兄にあたります。戦後、子のいない保科家に引き取られたんです」

「は、はあ」

なぜいきなり明け透けにこんな事を己の前で語るのか、松平は保科の真意を計りかねていた。

「まあ、年も近いですし上様とは話が合いましたね。貴方と江戸の町を歩いて経験したことなどをよく聞くんですよ。キャバクラに行つた話はとくに楽しそうでした」

ニコニコと保科が話す内容は、將軍本人と松平しか知りえないものだ。（万事屋なども関わつたりしていたが今は関係ないだろうと思考からはじき出した。）

「本当に将ちゃんから」

「お聞きしたんですよ。それでね、ちょっとお願い事がありまして」
「お願い事……?」

「それは、彼らも交えて話しましょうか」

保科はそう言っつて静かに戸に近づくと、スツと引いた。

「うおわっ!?!」

ドタドタと室内に倒れ込んだ己の配下を見て松平は頭を抱え込んだ。

「テメーら、何してんだ!」

「す、すまねえ……とつつぁん」

ガバツと起きあがった近藤が頭を下げると、

「ワリイ」

土方も頭を下げる。

「俺は止めたんでさア」

そんな2人とは違い、反省の態度を見せない沖田の頭を土方がむん
ずと掴んで床に叩きつけた。

「ほんツツとにすみませんでしたぁあああ!?!」

目の前にいるのが松平だけなら良い。だが、幕府官僚の保科がいる

のだ。下手な真似はできない。

「……うわぁ……痛そう」

が、そんな保料の口から漏れた言葉は、随分とのんびりしたものだ
った。

「ねえ、君……大丈夫？」

「はあ、大丈夫ですぜい……（土方コノヤロー、後でクロス（ぼ
そ））」

「（ブチッ）あゝ！？なんか言ったかゴルア！！」

頷いた沖田は土方をギロリと睨んだ。負けじと土方も睨みかえす。

「……トシ！総悟！いい加減にしないか！！」

そんな2人の間に入り近藤が仲裁すると、土方と沖田はフィツと互
いに顔を背けた。

「……チッ」

「……あー、すみません……こういう奴らなんですよ」

さすがにフローしきれなかった松平が恐る恐る保料を見ると、彼
は腹を抱えてケタケタと笑っていた。

「くくく……あー、本当に噂通りの面白い人達ですね」

目につかんだ涙を拭くと、保科は姿勢を正した。

「実はある人をここに、とうか上様と私の所に連れてきて欲しいのですよ」

「ある人……ですか？」

「ええ。銀色の侍を」

「「「!」」」

「おや、その様子だと探すまでも無くご存知のようだ」

銀と聞いて思い当たるのは彼しかない。息を呑んだ真選組の3人に保科はニツコリと笑って告げた。

「ついでに、“酢昆布好きなかぶき町の女王”と“メガネの人”も一緒に連れてきて頂きたいんです」

それらの特徴は万事屋の3人を示していた。

「あ、あの……どうして彼らを？」

近藤が訊ねると、保科はあっさりと答える。

「そよ姫がとても楽しそうに話されているのを聞いて、上様がその者達を呼びたいとまで仰るのでね」

「ああ、ナルホド……」

自分達が連れ戻しに行った時に共にいたのは、確かに万事屋の紅一点・神楽だった。その事を思い出した土方は納得したように頷いた。

「しかし将ちゃんも人が悪い。保科様を通さずに俺に直接言ってくれれば良いものを」

「先程のは建前でしてね、話はそれだけじゃないですよねえ……そもそも、そよ姫のお気に入りというだけでそんな得体の知れない人物を呼ぶと思いますか？」

保科の言葉に、松平と真選組の3人は首を横に振る。

「でしょう？……私達はね、彼らに動いてもらいたい事があるから呼ぶんですよ」

そう言った保科は笑顔のまま懐から短刀を取り出し、天井に向けて投げ放つ。

突き刺さった短刀を見てギョツとする4人を余所に、保科は天井に向けて声をかけた。

「春霞降りてくると良い」

すると、カタリと天井の板が外されてひらりと若い男が降って来た。

「もう少し手加減してください、刺さるかと思いました」

降り立った瞬間ムツとした様子で言った春霞は保科に冷めた視線を向けた。

「すまん。だが、お前なら避けられると思ったのに」

「冗談は止してください。いくら私だっていきなりじゃ避けられませんが」

「あー・・・保科様？」

「ああ、驚かせて申し訳ない。彼は私の友人で春霞といいます」

「どうも」

ぺこりと頭を下げたその男は保科に対して敬意を払っている様子も見えないため、紹介された通り友人なのだろうと納得できた。

「普段なら彼に頼むのですが、今回は人の出し入れなので、松平殿と真選組にご協力いただけたらと思っています」

「それは構いませんが・・・一体彼らに何をさせようというんです？」

松平が問うと保科は表情を消した。

「それはまだ言えません」

その目が一瞬・・・銀時のソレと被った。

4・網無くて淵を覗くな

城からの帰り、真選組の面々は何とも言えない表情をうかべていた。

「・・・なあ、トシ、総悟・・・万事屋はこうなることをわかっていたんだろうか？」

「・・・わかってたから、俺達に調べさせようとしたんじゃないかねエのか？」

「旦那は・・・どっからこの情報を得たんですかねイ？」

銀時が殺気を放ってまでも調べさせようとした“將軍のお気に入りは、間違いなく保科だ。その保科から万事屋の3人を自分達の前に連れて来いと命じられた。

銀時はどこまで知っていたのか。保科の考えまでも知っているとしたら、それはどこからの情報なのか。

「・・・奴は、おそらく桂と繋がりがあある。よく行動を共にしているようだしな。・・・万が一にも攘夷浪士からの情報だったら・・・本当に奴を茂茂公の元にあけても良いのか？」

土方がボソと呟けば、近藤は首を振る。

「連れていかないわけにはいくまい・・・保科様からのお願いという形をとってはいいたが、これは勅命だろう」

「そうですね、土方さん。とにかく旦那達を城に連れていかなければなんねえんです。素直に付いて来てくれりゃあ良いですが、万が一にも雲隠れされた日にゃ、俺らの首が飛びかねえってことです。……何寝ぼけたこと言ってるんですか？」

沖田が呆れたように言えば、土方は肩を落とした。

「……だよな。俺達に拒否権はねえってことだ」

「あ」

近藤が突如声をあげた。

「どうした？近藤さん」

「いや、あれ……万事屋、だよな？」

近藤の指差す方向を見れば銀色が通路の脇に消えていくのが見えた。

自然、その後を追った3人はその背が立ち止まったのを視界に入れて慌てて柱の影に隠れた。

「……久しぶりだな」

銀時の声が聞こえる。

「はい。銀時様」

柔らかな女の声がそれに応え、3人から見える位置にその姿を現す。

現れたのは絶世の美女。濡羽色の艶やかな髪がその美貌をより一層引き立てていた。

「……最後に会ったのはいつだったか……随分と綺麗になったなあ」

「銀時様に褒めて頂けるなんて、嬉しい」

はにかんだように笑うと、美しいというより可愛らしい雰囲気になる。

「おい、氷柱ヒコばかり銀時様と話すなよ」

彼女を押しつけるようにムツとした表情の青年が現れる。

「あら、水澄みすみは同じ町中にいたんじゃない、私なんて宇宙よ宇宙」

「それは氷柱が選んだんだろ？」

「だってエ……」

「コラコラ、ケンカすんじゃないやねエよ、オメエら」

言い合う2人の間に割って入り、銀時が呆れたような声を出した。

「ごめんなさい」

「……すみません」

「……まあ、元気そうで良かった」

「「はい！」」

頷く2人に、銀時は苦笑をうかべる。

「・・・まったく、いい加減大人になりなさい、2人とモ」

そんな銀時の脇から現れたのは、真選組の3人にとってはつい先程あつたばかりの人物だった。

思わず声をあげそうになった近藤の口を手で塞いだ土方と沖田は一言も聞き漏らすまいと耳をすませた。

「春霞しゅんかか、夏霧なつきりの様子を見て来たんだろ？どうだった？」

「松平様と真選組の3人に会ってまして、私も紹介されました」

「へえ・・・真選組は早速動いてくれたわけだ」

「そのようですね。・・・それで、予定通りに夏霧が真選組にお願いしてましたよ」

「ふーん・・・じゃあ、近いうちに城にあがることになりそうだな」
そう呟く銀時に、春霞は眉を顰めた。

「大丈夫ですか？・・・時期尚早では」

「まあ、夏霧が大丈夫だったつってんだから、大丈夫だろ」

銀時がそう言えば、3人は頷く。【六花】の頭脳と呼ばれた夏霧の判断だからこそ、春霞も水澄も氷柱も動いているのだ。

「で、氷柱はあつちで大切にしてもらってんのか？もし虐められてんなら俺に言え？アイツをブン殴りに行くから」

「だ、大丈夫です、銀時様・・・あの方はたぶん、私が銀時様の手駒と気付いているんだと思いますけど、普通に接してくれていますから」

「ふうん、アイツがねエ・・・まあ、元々は優しい奴だからなあ。今のアレはその反動なんだよなア」

「銀時様・・・あの、それで・・・あの方から甘味を所望されたんですけど・・・」

言い難そうにしながらも氷柱が告げると、銀時は目を丸くし、春霞がまなじりが眦をつりあげた。

「氷柱、まさか今日のこと、あの方にバレたんですか!？」

「う、ごめんなさい・・・」

「へ、それでも大人しく出してくれたわけだ・・・」

「銀時様！感心している場合じゃありません！・・・氷柱、もう戻るのは止めなさい！」

珍しく声を荒げる春霞に、氷柱は身を竦めながらも反論した。

「そ、そういうわけにはいかないわ・・・だって、私が逃げたら銀時様とあの方の繋がりは一切無くなってしまう・・・」

「しかし・・・」

「なあ、春霞・・・大丈夫だよ、あの方は俺達にだって優しくかったる？」

渋る春霞を水澄が宥める。

「それは・・・そうだが・・・」

春霞は銀時に視線を送る。こういう時は銀時の判断に従うべきと学習しているのだ。

「まあ、大丈夫だろ・・・氷柱、アイツは甘味を寄越せと言ったんだな？」

「・・・はい」

「じゃあ、これでも持っていけ」

銀時が渡したのは常に腰にぶら下げていた木刀・洞爺湖だった。

「！・・・でも、銀時様・・・」

「ま、夏霧から代わりを貰うよ。元々あっちもそのつもりっばいし」

「夏霧が、持っていたんでしたっけ・・・アレ」

水澄が問えば、銀時は耳をほじりながら答える。

「ああ、夏霧は武家の子で、身内が幕府の高官だったしな〜持たせるにはもってこいだろ」

「……良いんですか？」

春霞が銀時の表情を窺えば、死んだ魚のような瞳を向けられる。

「いーんだよ。ポリシーがあつて木刀持ってたわけじゃねえしな」

「そう、ですか」

「……じゃあ、あの方にはこれをお届けします」

納得する春霞と、洞爺湖を大事そうに抱える氷柱。その2人の頭を撫でて銀時は笑った。

「まあ、心配すんな……大丈夫だから」

「……いいなあ」

ボソ、と水澄が呟く。

「ん？……ああ」

銀時は一瞬首を傾げ、それから破顔すると水澄の頭も撫でた。目を細めた水澄に、銀時は慈愛に満ちた笑みをつかべる。

「……仲が良いでござるな」

その時、奥の方から声が聞こえ、銀時達が身構える。

「河上・・・万斉」

銀時の声が緊張している。

そして、その名は真選組にとっても忌まわしい名だった。思わず刀に手をかけた沖田を抑え、土方はその男を見つめる。

「万斉、様」

氷柱の声はその名を呼ぶ。

「帰るでござるよ、氷柱。間もなく出立だ」

「・・・あ」

万斉の言葉に、氷柱は銀時を振り返る。

「・・・行け、氷柱。・・・それと、アイツにマジで次はねエって伝えとけ」

「はい・・・」

頷いた氷柱は、万斉の傍に走り寄る。

「・・・おい、氷柱に万が一にでも危害を加えるようなことをしてみろ、完膚なきまでに叩きつぶしてやるからな」

銀時の鋭い殺気が万斉に向けられる。

「わかっている・・・晋助にも伝えておくでござる」

そう言うと、万斉は氷柱を連れてその場を去る。

その背を見送りながら、春霞は銀時を見上げる。

「本当に氷柱を行かせても良かったんですか？」

「・・・氷柱に手を出すようなら、アイツも墮ちるところまで墮ちた
ってことだ」

銀時は万斉の背を睨み据えてそう答える。

「・・・俺、桂さんに言っておきます」

水澄が堪らず言えば、銀時は溜息を漏らした。

「はあ、余計な火種を蒔くなって言っても、聞かねエんだろ？」

「絶対、桂さんに言います」

「あー、はいはい。わーったよ・・・言っとけ言っとけ」

ヒラヒラと手を振る銀時に頭を下げて水澄は万斉達とは別の方向へと走り去る。

「・・・銀時様」

「なんだ、春霞」

「あちらに情報は？」

「……んぐ、まあ、回しとけ。自分だけ仲間外れかと大騒ぎしそ
うだしな」

「わかりました。……我等【六花】……貴方の“心”を必ずお
守り致します」

深々と頭を下げた春霞は、そのまま姿を消した。

「……ったく、どいつもこいつも。俺は……まだ大丈夫だっつ
のに」

呟いた言葉はどこか頼りなさに響き、息を殺して聞いていた真選
組の3人は思わず顔を見合わせた。

だから、気付かなかった。

銀色が、苦笑をつかべて自分達を見ていたことを。

5・得手(えて)に帆(ほ)を揚(あ)げる

銀時がその場を去ると、真選組の3人は大きく息を吐いた。

「……もう、わけわからん」

近藤がぼやくと、土方は眉間にしわを寄せた。

「野郎、桂どころか高杉とまで絡んでやがったか……」

「でも、仲良さそうには見えませんでしたぜイ、むしろ、手下を入れて探らせてるって感じに見えましたがねイ」

沖田が言えば、土方は頷く。

「の、ようだな。……気付かれてるのがわかってて潜入させてるって時点で、以前の関係がうかがえるようなもんだが、今現在は深い付き合いではないってトコか」

「しかし……春霞殿しゆんかまでいるとはなあ……」

「あー、あの人らの話を聞いた限りじゃ、保科様ほしなも一枚噛んでそう
でスア」

近藤が更にぼやくと、沖田は城を見上げた。

「夏霧なつぎりって言うってたな……それが保科様ってことかよ」

「ありゃ、実名じゃなく便宜上の呼び名ってトコですかねイ？」

「だろうな。桂や高杉と違って“坂田銀時”の名前はどこの歴史録にも載ってねエ。実名を明かさぬように気をつけてたってことだ」

土方が言えば、沖田は首を傾げた。

「……そうですかねイ？……何だか俺は逆なような気がしてますぜイ？」

「「逆？」」

近藤と土方が異口同音に言葉を発する。

「手下の4人はともかく、旦那については……二つ名が先立ち過ぎて実名が広まらなかった。なんて、思ったりしてるんですがねイ」

「ん？……そんな有名な奴っていたか？」

近藤が首を傾げれば、土方がハッと目を見開いた。

「“白夜叉”？……以前山崎から報告があつたな。本当の名は誰も知らねエ、白き英雄」

「……詳しく知りたいですア」

「確か、資料は残っているはずだ。……屯所に戻るぞ」

そうして急いで屯所に戻って行った3人を見つめる影があった。

「……ん〜、ジミー君は意外と優秀らしいよ？ツラ」

「ツラじゃない桂だ！……というか、大丈夫なのか？銀時」

一度は本気でそのまま帰ろうとした銀時だったが、こっそりと水澄みすみの後を尾行つひしていたらしい桂と鉢合わせして、逆に真選組の様子を窺う羽目になったのだ。

「まあ、夏霧がいるからな」

「持つべき者は優秀な部下か」

「……とはいえ、アイツらが“白夜叉”にまで辿り着くとは思わなかったなア……かなり情報は制限されてたはずなのによオ」

「幕府側にしても攘夷志士側にしても“白夜叉”の名は簡単に口に出来ぬものだからな」

「特に幕府にしてみたら、天導衆に仇のように憎まれてる俺の存在はマズインだろうな。……多分、オメエや高杉以上に」

呟く銀時に、桂は心配そうな視線を向けた。

「銀時……」

「俺は、壊れた人間だ。見た目にゃフツーに見えるが、高杉以上に」

壊れてる。いつか、俺ん中に残ってる獣の部分が牙を剥く……
・なーんてな？冗談だよ、本気にしたア？」

「銀時！お前ツ……」

「とにかく、俺ア大丈夫だ。……今はまだ、黙って見てろ」

有無を言わせないような真剣な声音に、桂はゴクリ、と喉を鳴らした。

万事屋銀ちゃん

「と、言うわけでエ、たぶん近いうちにお迎え来るから心の準備だけはしておけよー」

「と、言うわけでエ……ってわかるかああああッ！……！」

「イテツ、イテツ……イテエよ、新八君」

バシバシと叩かれる銀時は、のんびりとした調子で抗議した。

「一体何なんですか！！ふらつと出て行ったかと思ったら、帰って来るなりお迎え来るとか、縁起でもない事言わないでくださいよ！！」

「……ん？あ、俺、お迎え来るとかしか言ってるねエか。そうかそうか。頭ん中で完結してたわ説明」

「余計悪いわああああッ！！！！」

ヒートアップする新八に、銀時は困ったように笑う。

「いやー、すまんすまん」

「いきなりすぎてびっくりしたでしょうが！！！！」

「落ち着くネ、新八。銀ちゃんがいきなりすぎるのは今に始まったことじゃないヨ」

神楽が呆れた様子でそう言うと、新八も大きな溜息をついてソファに座った。

「まあ、そうだけどき。・・・なんか、今回は僕達完全に置いてきぼりじゃないですか」

「ん、だから、わるかったって。・・・これからは仲間外れも無いから。な？」

銀時が笑みをうかべれば、新八も神楽もウツと呻いて互いに顔を見合わせる。

「（銀ちゃん悪いモノ喰ったアルか？あんな笑顔見たことないヨ）」

「（わかんないけど、とりあえず銀さんから目を離しちゃいけないってことはわかった。絶対危険なこと考えてるよ、あの人！）」

「・・・あの一、もしもし？聞こえてるからね！？内緒話になって

ないからね!!」

変わらないノリの子ども達にホツとしつつ、銀時は思わずツッコミを入れたのだった。

真選組屯所

「……銀色の髪に血を浴び戦場を駆る姿はまさしく“白夜叉”」

山崎に持つてこさせた資料を眺めながら、土方はその部分を読み上げた。

「銀色の髪……ですかイ」

「……これ、攘夷戦争に参加していたっていう爺さんから聞いたんですけどね……この“白夜叉”の素性だけは、覚えてないとか言って、頑として口を割らなかつたんですよ。桂や高杉のことはベラベラと喋ってたんですから、覚えてないわけないのにですよ?」

「聞く限りじゃあ“白夜叉”ってのは、攘夷浪士ん中でも特別な存在って感じですねィ」

「“白夜叉”の周りには常に天人共の死体の山ができてたって話でした……それが、旦那だなんて……」

想像も出来ないし、したくもない。というのが山崎の本音なのだろ

う。だがそれを言葉にすることはなかった。

「だが、今は奴が“白夜叉”だったってことはあまり重要ではないだろう。・・・上様や保科様が“白夜叉”を巻き込んで何をするつもりなのか問題だ」

近藤が言えば、土方も同意する。

「そういうことだ。・・・本来ならしよっぴいて事情でも聞きてエトコだが、勅命がある以上はそれもできねエ」

「・・・旦那が保科様を調べるなんて言って脅してきたのは、これを想定してのことなんですかねイ？」

「かもしねエな・・・だが、保科様が俺達に命じるよりも早く野郎の正体に気付いて拘束していたとしても、勅命により城に連れて行くのは変わりはない」

「旦那にとつちや、どちらに転んでも大丈夫な状況だからこそ、動いたって事ですかね・・・」

山崎の問いに頷き、土方は溜息をついた。

「まさか野郎がここまで頭が回るとは思わなかったな・・・」

「むしろ、保科様が裏で糸を引いてるような気がしますぜイ」

「それも全て野郎のためってか？・・・保科様達にとって野郎はそれだけの存在って事か」

「……俺達にとっての、近藤さんってどこですかねィ」

沖田の言葉に、土方は思わず納得してしまった。

そうだとしたら頷ける。もし近藤が危機的状況にあったのなら。それを救うことのできる術を己が持っていたら。

きつと、己は迷わずその術を使うだろう。そのせいでどんな不利益が生じようとも。

「まあ、とりあえず……野郎を城に連れていけば、なんかわかんだろ」

トーンを落としてそう呟くと、土方は空を見上げて紫煙を吐きだした。

6・一葉(いちよう)落ちて天下の秋を知る

ピンポーン

翌朝、チャイムの音で銀時は目を覚ました。

「・・・何だア?こんな朝早くに・・・」

まだ新八は来ておらず、神楽は寝汚いためこの程度の音では起きない。

仕方なく起きあがった銀時は寝巻のまま玄関の戸を開ける。

「・・・あー・・・ねえ?多串君に総一郎君にゴリラさん・・・とジミー君?」

「誰が多串だ!ゴルア!」

「総悟でさア、旦那」

「・・・酷い・・・」

「・・・山崎ですってば、旦那」

それぞれから返ってきた反応を見ながら、銀時は首を傾げた。

「何?こんな朝早くからさア?・・・まだ、寝てたんですけどオ?」

「話がある。あがらせてもらっぞ」

土方がそう言い、真選組の4人はズカズカと部屋の中に入って行った。

「……あー……アイツらが聞いていない間に済ませたい話、ね」

その背を見送り、銀時はボソリと呟いた。

「……で？話ってなんですかア？」

いつもの装いに着替えた銀時は、ソファアの向かい側に座る真選組の面々を静かに見つめる。

「……テメエは、攘夷浪士か？」

ストレートに訊ねてきた土方に銀時は目を丸くした。

「あらら、真選組の頭脳たる副長さんらしくないねエ、ちょっとストレートすぎじゃない？」

そんな銀時の軽口に、土方はテーブルを強く叩いた。

「正直に、答えやがれ……！」

「……落ち着けて、あんま煩くすると神樂が起きるだろ？」

笑顔を消し、銀時が声のトーンを抑えて告げる。

「……誰のせいだよッ」

「あー、はいはい。俺のせいね？……まあ、その質問に答えるとすると、今はノーかな？というか、攘夷志士に攘夷浪士かって聞いたら速攻で斬られんぞ？」

志を持ち戦う侍という意味を持つ志士と主を持たず野に放たれた浪人という意味の浪士。たった一文字ではあるがそこには大きな違いがある。

のんびりとした調子で答える銀時に、土方は苦虫を噛み潰したような表情になって質問を続ける。

「……今は、と言っ たな」

「あー、若気の至りってヤツかねエ？まあ、喧嘩っ早いお年頃だったわけよ。俺もさ」

「それで、伝説になるほど天人共を大量に斬り伏せてきたってのか？……喧嘩っ早いの一言で済むような話じゃねエだろうが」

「……真選組の監察は優秀だねエ……“白夜叉”の名を嗅ぎつけるとは思わなかった」

クツリと笑った銀時に、真選組の4人はぞくり、と悪寒を感じた。

「……み、とめるのか？自分が“白夜叉”だって……」

「だって、オメーらは確信してんだろ？否定するだけ損じゃねーか。めんどくせエ」

耳をほじくっていた銀時はその指をフツと吹いて、ソファアールから立ち上がる。

「ガキ共も知ってるよ、俺が元攘夷志士で“白夜叉”と呼ばれたことはな。ツラの奴がベラベラと喋りやがったし・・・それに、鬼兵隊との一件もあつたしな」

それは、真選組が介入する前に事が済んでいた、あの桂一派と高杉率いる鬼兵隊との衝突の事を示しているのだと4人は気付いた。

「旦那・・・」

「あの一件はツラと俺を狙ったもんだ。内輪の問題だったからな、オメーらに介入されずに済んで心底良かったと思ってるよ」

戸惑ったように見上げてくる山崎に笑みを向け、銀時は事務机に寄りかかる。

「で？他に聞きたいことはねエの？」

「旦那は、何を企んでるんですかい？」

銀時は今なら全てを答えてくれる雰囲気だ。それならばと沖田が問う。

「ん、企む・・・企む、ねエ・・・俺も実際のところはわからね

「のよ。アイツらが勝手に動いてる部分が大きいでね。……言
つたる？俺は今は攘夷なんて考えを持つちやいねエ。だが、過保護
な連中が俺の為に動いてくれているのを止める程、達観してもいね
エ」

「アイツらつてのは……？」

土方がじつと銀時の表情を窺いながら訊ねる。

「ヤダねエ、知らないフリ？……お宅ら、俺の後を尾行^{つげ}て、一部
始終聞いてたでしょうが」

「「「！！！！」」」

気付かれていたのかと驚く真選組の3人を見て、銀時は意地の悪い
笑みをうかべる。

「もうちょっと気配なり何なりを消す訓練しないとねエ……俺等
みたいに死線を潜り抜けて来た人間にや、わずかな衣擦れの音です
ら敏感に感じ取ることが出来るんだよ」

一瞬の気の緩みが命取りの戦場。飛び交う怒号、舞い散る赤、敵も
味方も入り乱れて感覚が狂ってしまいそうになるくらいに溢れる殺
気。

それらを思い返す度に、口に苦いモノが広がる。

「と、言っても。第一線を退^ひいて10年も経てば感覚は鈍^ちってるけ
どな」

そうやって軽口をたたいてないとドロドロとした感情が溢れてきそうで、銀時は赤い瞳を瞼の下に隠した。

「……で、夏霧なつきりつてのが、テメエの言う茂茂公のお気に入りの幕臣まゝぢんってことは間違いねエか？」

「……ん？ああ、そうだよ。夏霧は今幕府の中で保科ほしなつて名乗ってるはずだ。アイツは戦争中に俺が拾ったんだ……まだ元服前のガキだったからな。戦争で両親共に亡くして、拾った時には手負いの獣みてエで手がつけらんなかったんだぜ？」

懐かしむように答える銀時に、保科の今の様子しか知らない近藤達は戸惑った様子を見せた。

「今は、随分違うだろ？……アイツはどっちかってーと戦略タイプだ。春霞しゅんかもそうだな。残りの2人は戦術タイプ。あの激戦を生き抜いたっていう事実からもわかる通り、あの4人はそこらにいる連中よりかはずっと強い」

「……今日は、良く喋るな」

土方がボソリと呟く。

「オメーらもわかってるだろうが、夏霧がいる以上俺は捕まらねエし捕まっても無罪放免だ。だから、余裕ぶっこいてまーす。なーんてな？」

クツクツと笑い、銀時はそう言って玄関の方へ歩いて行く。

「あ、おい！万事屋……！」

近藤が腰を浮かせた時、ガラガラと銀時が玄関の戸を開ける音がした。

「……どーしたのオ、新八君。こんなトコで固まってないで入ればア？」

苦笑をうかべている銀時に、新八は眉根を寄せた。

「……えつと、良いんですか？」

「いーよ。大丈夫だから……入れって」

半ば強引に連れて来られた新八は、異様な雰囲気の仕事所兼リビングの様子に身を竦ませる。

「あ、あのー、僕お茶を入れてきます……」

「イイって。税金泥棒にんなもん出す必要ないから」

本人達の前であっさりと言ってくれる銀時は、きつと心臓に毛が生えていると思う新八だったりする。

「……ぎ、銀さん……あの……えつと……」

「だから、タベ言っただろうが。お迎え来るから心構えだけはしとけって」

「それは、そうですね……って、神楽ちゃんは？」

「あー、まだ寝てんよ。起きてくるまでほっとけ。起こすのは手間がかかるからな」

「それは、わかってます・・・てか、空気が重いんですよ！何なんですかこの空気！何か話してないと気分が滅入っちゃいますよ！！」

「うんうん、そーだねエ。それもこれもぜ んぶ、あの税金泥棒のせいだからねエ？俺のせいじゃないからねエ？」

「そこで責任転嫁！？ってか、アンタ本当に心臓に毛が生えてんだろ！！！」

「あつはつは。何言ってるのオ、新八くん。心臓に毛が生えるわけないじゃん」

「モノの例えだ例え！！！わかってて茶化すんじゃないやええええ！この天パがああああ！！！」

新八のツッコミが炸裂する。ようやくいつもの調子が出て来たたと銀時は笑みをつかべる。

「ッ・・・何がおかしいんですか！」

「いやー、やっぱ、新八はこうでないとなア？」

「・・・何なんですか、その何でもわかってます的な顔」

ムツとした様子で見つめてくる新八の頭を撫で、銀時は静かに答え

「・・・わかってんよ。オメエらが不安がってんのはな」

「わかってないですよ・・・どんどん僕達の知らない銀さんになつてっちゃんじゃないですか・・・」

「ん。・・・大丈夫だって、置いてったりしねーから」

あやすように頭を撫で続ける銀時の袖をしっかりと掴み、新八は口を一文字に結んだ。

7・雨垂(あまだ)れ石を穿(うが)っ

それから神樂が起きると朝食も取らず、銀時達は真選組に連れられて城へと向かっていた。

「銀ちゃん、腹減ったアル・・・飯食わせるアル」

「あー、ホント横暴だよねエ、朝飯も食わせないで連行だよ？拷問かっつーの」

「・・・神樂ちゃんにごはん食べさせないなんて絶対問題起こしますよ。城で。間違いなく。僕ら責任なんて取りませんからね」

「ウルセエ！！元々はテメーのせいだろうがア！万事屋あ！！」

グダグダと後ろで文句を言う万事屋3人に、土方がキレる。

「えー、銀さんなんにも知らされてないヨー、マジで。夏霧なつきりが呼んでるってのは聞いてたけどオ、そこら辺何も知らされてないからア」

「そうネ！それに朝ごはん食べさせなかったのはお前達アル！」

「そうですよ・・・せめて卵TかけK飯Gくらいは食べさせてから来た方が良かったですって、絶対」

「ウルセエツつってんだろつがああああああ！！」

「ウルセエのはアンタでさア。……………土方コノヤロー死ぬ」

ボソ、と脇で呟いた沖田に、土方はこめかみに血管を浮き立たせる。

「総悟、テメエ……………」

「ちよつとー！トシイ！総悟オー！また城内でケンカしないでねえええ？」

一触即発の部下2人にハラハラしどうしの近藤の肩を、銀時はポンと叩いた。

「大変だな、局長さん」

「……………万事屋ア」

ハチャメチャなお子様達を抱える銀時だからこそ近藤の気持ちは痛いほどわかる。そんな銀時の言葉に近藤は感動したように見つめてくる。

「まあ、夏霧相手だし大丈夫だって。上様も結構おあらかっつーかのんきっつーか……………よっほどじゃなけりゃ怒らねエと思うよー」

銀時自身、故意ではないが將軍を酷い目に遭わせた自覚のある事象は何度かある。だが、そのせいで処分されたことは一度も無い。

もしかしたら、夏霧が何かしたのかもしれないが。

「……………なんでテメエが上様の性格を知ってやがる」

お決まりで土方が絡んでくると、銀時は鬱陶しそうに眉間にしわを寄せた。

「あー、キャバクラで会ったりイ？床屋で会ったりイ・・・つか、お宅らの上司が連れ回してんでしょうが」

それを言われるとさすがに反論のしようもなく、真選組は黙り込む。

「で、ジミー君、まだ着かねーの？結構走った気がするんだけど？」

運転をしていた山崎に銀時は訊ねる。

「・・・あー、もうちょつと我慢してください旦那。真正面から入るわけにはいかないんです」

「あ、そう。そういうことね」

納得した銀時は座席にもたれかかった。

「銀ちゃん、美味しいもん出るアルか？」

「さあなア・・・あー、でも、夏霧におねだりしてみな？アイツ、ああ見えて子ども好きだから、お菓子くらいはくれるかもよー」

「わかったアル。銀ちゃんにねだれって言われたって言うネ」

「おー、言え言え。ついでに俺らの分もねだつとけ」

銀時が言えば、真選組の4人はギョツとする。

「お、おい、万事屋」

「んー？」

気のない返事に、近藤は困ったように首を傾げる。

「だ、大丈夫なのか？いくら昔の部下と言っても……今は幕府の中枢にくいこんでいるお偉方だぞ？」

「あー、ナイナイ。それはナイ。もしアイツが必要な場所以外で偉そうにしてたとしたら、春霞しゅんかがバツサリぶった斬ってるわ」

そんな銀時の自信たっぷりの言葉に、真選組の4人や新八、神楽までもが首を捻る。

銀時は夏霧の性格も春霞の性格もよく知っている。それに、【六花】を名乗るあの4人の関係性は簡単に言葉では言い表せない。他人には友人と紹介しているものの、それ以上の絆がああ4人にはある。

だから、銀時の自信の根拠を皆に伝えることは難しい。

「……まあ、会ってみりゃわかるよ。俺の前じゃ人変わるからなあ、アイツ」

外面が完璧にはがれた夏霧を“保科ほしな”としての顔しか知らない連中が見たら、さぞや驚くだろうと低く笑う。

そんな銀時を不思議そうに見やりながら、一行は城の裏に車を停めて避難路から將軍と夏霧の待つ部屋へと向かった。

「・・・そろそろ来る頃だな、保科」

「はい、上様」

「楽しみか？」

「それは、もちろん」

わずかに頬を紅潮させている夏霧に、將軍は微笑む。

「そなたがそうも嬉しそうにしていると、余も嬉しくなってくるぞ」

將軍に見抜かれた夏霧は、困ったように笑う。

「いけませんね、あの方が来ると思うと気が緩んでしまいます」

「良いではないか。そなたがそれだけ信を置く相手なのであろう？
余も何度か会ったが、気の良い男だと思っただぞ」

將軍の人を見る目は確かだ。だてに幼い頃からタヌキ共に囲まれて暮らしてきたわけではないということだろう。

夏霧は頷き、それから視線を落とした。

「それもあの方の素の表情なのでしょう。でも、あの方は・・・心の奥底に様々な想いを封じ込めている。それが漏れ出してしまった

ら、きつとこの世界は壊れてしまします。それで悲しむのは他でもないあの方です。だから我等【六花】はあの方の“心”をお守りすると誓ったのです」

「なるほどな・・・あやつの抱えているものはそれ程深く暗いということか」

「・・・そう、聞いています」

「聞いている？」

首を傾げる将軍に、夏霧は悲しそうに笑った。

「はい、我等は直接あの方から聞いてはいないので。教えてください。さったのはあの方の幼馴染の方々です」

「・・・幼馴染？」

「ええ、かつーー」

「ナルホドなア・・・どーりでよく知ってると思ったら。やっぱりアイツらが教えやがったのか」

銀時の幼馴染の名を告げようとした夏霧の言葉をさえぎり、部屋の戸が勢いよく開けられて呆れたような声が頭上から降って来た。

「よ、よよよ・・・万事屋あー!!」

「な、なんつー無礼な真似を・・・!!」

ワタワタとしている真選組の面子をまるっと無視して、銀時は目を真ん丸く見開いてこちらを見ている夏霧に笑いかけた。

「よオ、元気そうじゃねエか」

「ぎ、んとき、様……！」

ぶわっと涙をあふれさせ、夏霧は銀時に駆け寄って抱きつくとその胸に顔をうずめた。

「銀、時様……銀時様ツ……」

「やれやれ……泣き虫夏霧は治ってねエなア……」

緩く夏霧の背中を叩きながら銀時は苦笑する。

「ツ……だっ、て……俺ツ……悔しくてツ……！」

くぐもった涙声。夏霧が何に悔しがっているのかわかっている銀時は深い溜息をついた。

「はア……ったく、オメエ1人でどうにかなるもんなら、俺達が命を賭けて戦う必要なんてなかっただろーが」

「そ、ですけどツ……ちょ、とくらいは……かえ、られると思っただ、のにッ」

泣きじゃくりながら訴える夏霧に、保科としての姿しか知らない將軍や土方達は目を丸くしていた。

「あのなあ、夏霧。俺が来たからって、氣イ緩めすぎだぞオ？」

「こゝめんなさいいゝいゝ！」

銀時に抱きついて号泣する夏霧を、どうやってなだめたものかと銀時が思案しだした時だった。不意に氣配を頭上に感じて視線を上にと、天井から春霞が降って来た。

「いい加減にしなさいッ！！銀時様が困っているでしょうがッッ！！」

春霞は一体どこに持っていたのか、大きなハリセンで小気味のいい音をたてて夏霧の頭を思いつきりはたいた。

「いゝッ！？ゝゝッッ！」

その衝撃で泣きやんだ夏霧は、そのまま頭を押さえて蹲つまずった。

「あゝ・・・いや、春霞？ちょい、やり過ぎじゃねエかと俺は思ったりするんだが」

「これくらいしなければ泣きやみませんよ、コイツは」

銀時が苦笑しながら訊ねれば、フン、と鼻を鳴らしながら春霞が答える。

昔から変わらないこの2人の力関係に、ただただ感心するばかりである。

「おーい、大丈夫かあ？夏霧」

「うっ……痛い、です」

泣き腫らした目で銀時を見上げ、夏霧は唸る。

「まったく、いつまで経っても泣き虫で。それでよく幕府の高官など勤まりますね」

「……それとこれとは別だろ!？」

「別にできるお前がすごいと思いますよ!」

「まーまー……とりあえず落ち着け。そして、ここがどこか思い出せ」

言い合いを始めてしまった2人を押さえて銀時が告げれば、春霞も夏霧もハツとなって周りを見回した。

最初は驚いていた將軍は畳に撃沈して爆笑しているし、真選組の4人は何とも言えない微妙な表情をうかべているし、万事屋のお子様ーズはこんな騒ぎは慣れていると言わんばかりに呆れた様子でこちらを見ていて。

「(穴があつたら入りたい……!)」

銀時がいることで思考が昔に戻っていたらしい。2人共に顔を真っ赤にしてうつむく。

「すみませんねエ、上様。ウチの泣き虫を重用してくださっていて、感謝してますよ」

「くっくっくっ……いや、実際に保科はよくやってくれている。天導衆とのやり取りもなかなかのもので、余の願いを叶えんがために上手く取り引きをしてくれているぞ」

「そーですか。上様のお役に立ってるようで何よりです」

「……それ以上に、そなたのためにコツコツと周りの者達を説得して回っていたのも保科だ。ようやく形になって来たからそなたを呼ぶことにしたのだ」

「……じゃあ早速なんです、幕府にとっちゃ危険人物以外の何者でもない“白夜叉”を、こうして城に上げる危険を冒してまで呼んだ理由をお教え願えますかねエ？」

そう問いかけた銀時に、將軍は姿勢を正した。

「ああ、心して聞いてくれ……保科が養父の後を継いで3年間、必死になって説得して回ったその成果を」

夏霧に視線を向ければ力強く頷いてくる。

(ああ……成長したな)

8・会稽（かいけい）の恥を雪（すす）げ

「まずは、預かっていたコレをお返しします」

そう言つて夏霧なつきりが差し出したモノを見て銀時は目を細めた。

「……………大事に、持っていてくれたみてエだな」

「もちろんです。父の形見と偽つて養父に頼みこんで手入れもして
いましたから」

「……………そうか」

「はい……………銀時様の刀“雪月花”せつげつか 確かにお返しいたします」

促されるままに手に取り、銀時はほう、と息をついた。

「……………俺の手に戻つて来る運命だったのかねエ」

手に馴染んだ重みは昔のままです。

「なあ、抜いても良いか？」

銀時が將軍に訊ねると、にこやかに彼は頷いた。

「構わないぞ。余も見てみたい」

「悪いね、御前で抜刀なんて本来なら切腹モンなんだろうが」

そう言いながら、銀時は將軍に切っ先を向けないように静かに抜刀した。

戦時中に何百、何千と敵を屠^{ほふ}った愛刀“雪月花”は、夏霧に渡した時は血で曇り刃こぼれも酷かった。

だが、再びこの手に戻った愛刀はしつかりと手入れされて曇り一つない美しい刀身を己に見せていた。

「・・・“雪月花”は銀時様が持つに相応しい刀です。貴方が持つてこそその美しさが際立つ」

銀時の銀髪を映したその刀身は美しく輝く。

「戦時中、銀時様は白一色の装いだっただため、その輝きは敵さえも魅せてしまうような美しさでした」

夏霧の言葉を補足するかのようにそう春霞^{しゅんか}が呟けば、將軍がなるほどと頷いた。

「確かに・・・そなたが手に取るのを待ち望んでいたかのようだな」

「そうですかねエ・・・これは、多くの天人を斬ってきた刀だ・・・俺が持てば、また血で曇るかもしれねーってのに」

銀時はそう言いながらもじつとその愛刀を見つめる。

そんな銀時を見やりながら、夏霧はわずかに緊張した面持ちで口を開いた。

「それから・・・これは話すかどうかずっと悩んでおりました。春霞や氷柱つゆ、水澄みずみとも話し合って、やはりお伝えした方が良いと判断しました」

「・・・随分ともつたいぶるじゃねエか。どうしたよ?」

銀時は先を促すようにそう訊ねた。

「私は、一度だけ“ヤツ”の顔を見たことがあります。銀時様に無理を言っについて行った戦場で・・・あの顔だけは忘れられません、それに、あの時の銀時様や高杉さんはとても恐ろしかった」

夏霧の言葉に銀時は目を細めた。一体何の情報を伝えようとしているのか、なんとなくわかってしまったからだ。

「・・・なるほどな、オメーらが言い渋るのはそういうワケかよ。確かに俺やヅラ、晋助しんすけにや喉の奥に刺さった魚の骨みてーなモンだ・・・だが、ヤツの居場所の調べがついたんなら包み隠さず話せ。大人しく聞いてやるから」

美しい刀身を鞘に収めドカツとその場に座り、銀時は夏霧を見つめる。

息を吞んでその様子を見ていた真選組の4人は、わずかに銀時から漏れる鋭い殺気に背中に冷たい汗が流れるのを感じていた。

「（・・・チンピラ攘夷浪士共の殺気なんざ比べもんにならねエ・・・）」

ゴクリ、と喉を鳴らして土方は隣にいる沖田にチラリと視線を送る。彼は反射的に柄に手をかけて緊張した表情をうかべていた。

近藤も本能で恐怖を感じているのか表情を強張らせており、山崎に至っては全力で逃げようとする己の身体を何とかその場に縫い付けているような有様だった。

それなりの修羅場をくぐり抜けて来ている自分達でさえこうなのだ。余程の鈍感でなければこの殺気には気づいている。

そう思つて万事屋の子ども達の様子を窺えば、わずかに表情は曇っているものさほど怯えていないのがわかった。もしかしたら初めてではないのかもしれないと思ひ至る。

「……天導衆の私兵団、そのまとめ役がヤツです。この3年間奴らに近付いて引き出した情報によると数年前からこの私兵団は……萩に向向しているようです」

「……萩？」「」「」

思わず洩れた疑問の声に、夏霧と春霞は困ったように顔を見合合わせた。

「……俺の、俺達の故郷だよ」

答えたのは銀時だった。やたらと感情を抑えたその声にゾツと背すじに悪寒を感じながら土方は眉間にしわを寄せた。

「なんでまたテメエらの故郷に……」

「探してるんです……」

今度は夏霧が答える。

「探す、ですか？」

近藤が首を捻ると夏霧は頷く。

「そう、探している……“白夜叉”を」

ハツとしてその場の全員が銀時を見つめる。

「ま、そうだなーな。あの時ヤツに唯一、一太刀浴びせた俺を探してるんだろーよ……逆に戦場じゃ晋助の顔に一太刀くれやがったが」

「……じゃあ、あの高杉さんの左目の包帯って」

「あー、そうそう。ヤツが斬りつけたんだよ。バカ強エヤツでなア……俺と晋助2人がかりでも倒せなかった」

その言葉に驚いたのは真選組だった。今でも強い銀時の全盛期の頃に高杉と2人がかりで倒せなかった相手ともなれば驚かない方がおかしい。

「……銀時様」

不安そうな表情をつかべた春霞が、手ぬぐいを懐から取り出して銀時に差し出す。

そこでようやく他の者も気付いた。

銀時の右手が白くなるほどに握り締められて、爪が食い込んだ所から血がにじんでいたのだ。

「……ワリいな……春霞」

銀時は手ぬぐいを受け取るとそれを右手に巻いて握り締める。

「いえ……嫌なことを思い出させてしまい申し訳ございません」

「そうじゃねエんだよ。ただ……ヤツだけは、この手で……そう思ってるだけだ」

ギリ、と歯を食いしぼる銀時の赤い瞳がギラリと剣呑な光をおびる。

「……ヤツは萩の探索を終えて、明後日、江戸入りをするそうです」

夏霧の言葉に、ピクリと銀時は肩を揺らす。

「……他の連中には知らせたのか？」

そう問いかける銀時に、夏霧は首を振った。

「いえ、まずは銀時様にお知らせして指示を仰ぐつもりでした」

「そうか……懸命だな。晋助に知られた日にゃ萩まで突っ込んで行きかねエ」

「だと思ったので氷柱にも話していません・・・知らないものは話せないのです」

春霞の言葉に今度こそ銀時は苦笑した。

「まったく・・・晋ちゃんったら、わつかりやすい性格してっからなア。オメエらにまで氣イ使わせて、仕方ねエ奴」

当人の目の前で晋ちゃんなんて呼んだら斬られるだろうな、なんてことを思いながら春霞は目の前で苦笑をうかべている銀時を見てホツと息を吐いた。

「良かった・・・このまま銀時様の怒りが治まらなかったらどうしようかと思いました」

「・・・だーから、大丈夫だツつってんだろ?・・・まだ、な」

これで当人と会ったりしたら落ち着いていられる自信はないが、そう簡単に決壊してしまうようなやわな精神はしていない。

銀時の言葉に頷いて夏霧は將軍に視線を向ける。將軍はその視線を受けて銀時をじっと見つめて口を開いた。

「・・・坂田に帯刀を許可する。それから“ヤツ”とやらの件について一任しよう」

「!?!」

ギョツとする真選組に視線を向け、將軍は尚も続けた。

「今後真選組は坂田に協力を求められた場合は惜しむことなく力を貸すのだ。桂、高杉に関しても坂田の指示に従い、罪人として捕らえる等の手出しはまかりならぬ」

「……上様、 안타……」

目を瞠る銀時に笑みを見せ、將軍は力強く頷いた。

「思う存分にやるが良いぞ」

（そのための体制は全て整っているのだ。）

9・累卵（るいらん）の危（あや）うき

「・・・夏霧、どづいづことだ？」

銀時は妙な予感を感じた。

「銀時様が心配されることはありませんから」

ニコリと笑って夏霧は誤魔化す。

「春霞」

「何も問題はありませんよ？」

春霞も話すつもりはないらしい。銀時は眉間にしわを寄せせる。

「・・・情報戦に特化したオメエらが全力で隠そうとする情報を得るには、それ相当の情報網が必要ってことか」

「銀時様は、雑事に惑わされず“ヤツ”に集中してください」

春霞は雑事と言い捨てたが、それがこの国の根幹を揺るがしかねない事態だということに銀時は気づいていた。

「・・・まさかとは思つが」

「銀時様！・・・“ヤツ”の件、他の方々にもお知らせした方が良
いと思います！」

夏霧が無理矢理話題を変える。

「……ったく。わーったよ、アイツらに連絡してくれ。ただし“ヤツ”のことは言うな、俺から話す」

ガシガシと頭を掻きながら銀時が言えば、春霞と夏霧はホツとしたように表情を緩め頷いた。

「「はい！」」

「……でさあ、なんか食いモンない？真選組マクニウが急がせたせいで朝食食べられなくて、ウチのガキ共が腹減らしてんだわ」

銀時の言葉に一瞬目を丸くし、夏霧は破顔した。

「すぐに用意します」

たんまりとお菓子を食べ、更にはお土産まで貰って城を後にした銀時達は真選組の屯所に来ていた。

「……良かったのか？」

「何が？」

土方が問えば、銀時はそちらを見るでもなく応じる。

「保科様は・・・何か隠してるみてエだった」

「そりゃあな・・・アイツの立場を考えればなア」

「・・・違エだろ！テメエだつて気づいたはずだ！！」

「・・・あー、落ち着けて多串君」

「土方だ！！」

叫ぶ土方に、銀時は苦笑した。

「しょうがねエだろ。アイツらの考えは何となくわかってるが、止めると言って止める連中じゃねエし。・・・それに、俺もこう見えて結構いっぱいいっぱいなんだよね」

師の仇の情報を手に入れて、ふと気が緩んだ瞬間に心の奥深くに封じた凶暴な獣が暴れ出しそうになる。

「“ヤツ”ってのは一体何者なんだ？」

「ん〜、まあ、オメーらも巻き込むんだし知ってた方が良いか・・・“ヤツ”ってのはな、俺達にとつちや、師の仇だ」

銀時はサラリと言ったが、“ヤツ”の話聞いた時の銀時の殺気は尋常ではなかった。

「・・・仇、か」

「そ。桂が爆発魔になったのも、高杉が超過激派になったのも、ぜいんぶ師が“ヤツ”に殺されたから……ってコト」

お前はどうかんだ、と土方は問いかけようとしてやめた。いっばい
いっばいだと本人が言うように、確かに今の銀時には余裕がないよ
うに見えたからだ。

「……そう、か」

だから、そう返事をするだけで精一杯だった。

10・類(るい)は友を呼(よ)ぶ？

特に何をしてもなく真選組の屯所の庭を見つめてボーっとしていた銀時が、ふと顔を門の方へ向ける。

「万事屋？」

近藤が首を傾げると銀時は振り返ってニツと笑う。

「連絡ついたみてーだ。……と言ってもテロリストの方じゃねーよ？」

一瞬ざわめいた真選組の面々に銀時は苦笑を浮かべる。

「あ、ああ」

近藤が頷くのを確認すると、銀時は門に向かって叫んだ。

「おーい、辰馬ア、入って来いや」

「え？坂本さん？」

「黒もじゃアルか？」

「おー、まっこと久しぶりじゃのー、金時い、っだ！！」

「金じゃねエから、銀だから」

坂本が“金時”と言った瞬間に銀時はその頭にゲンコツを落とした。

「痛いやかゝ・・・きん、銀時い」

「今、金って言おうとしたよね、つか、言ったよねえ？」

にこやかにバキボキと指を鳴らす銀時に、坂本は口元を引き攣らせる。

「ま、待て、き、銀時・・・」

「・・・問答無用!!」

「ぎゃあああああ!!!!」

「・・・と、いうわけで、元攘夷志士で現在は星間貿易業“快援隊”の社長、坂本辰馬だ」

「アツハツハツハ！よろしゅうな」

ボロボロにした者もされた者も、平然と何事もなかったかのように振舞う。

慣れていない真選組は引き気味だが、神楽と新八は慣れたものでそれぞれに挨拶をしている。

「黒もじゃ、久しぶりネ」

「こんにちは、坂本さん」

「おー、神楽ちゃんに新八君かあ、久しぶりじゃのう」

「」「！」「！」

「めっずらしー、辰馬がまともに名前呼んでんじゃねエか・・・俺は金時とか呼んだくせに」

「あ、いやいや・・・他意はないぜよ、つい、癖で」

「余計悪いわああああッ！！！」

再び振り下ろされたゲンコツ。が、今度はガツチリと掴む。

「待ってっていうがやき、銀時」

「・・・いつになく真面目じゃねエか、辰馬」

「まあのお・・・さすがに今回は冗談てんげんの言える状況がやないじゃろ
う」

「・・・まあな」

坂本はサングラスの奥で目を細め、声を低めて囁くように告げる。

銀時は坂本から視線を逸らし、空を見上げた。

「なあ、辰馬……」

「なんじゃ？」

「ツラや晋助が暴走したら、一緒に止めてくれな？」

「……もちろんじゃ、おんしが暴走してもツラや高杉と一緒に止めちやるから安心せえ」

「はは……そりゃ、心強えなあ」

銀時は苦笑をうかべて坂本を振り返る。

「……なんちゃーがやないながやきか？」

「あ？ああ……大丈夫だよ、今んトコはな……」

心配する坂本に銀時は肩を竦める。

まだ、自分の感情を制御できる今は良い。だが、“ヤツ”視界に入れた瞬間の自分の感情を制御できる自信がなかった。

だから、今のところと言い置いた。

「……そうか」

それに気付かない坂本ではないが指摘するでもなく頷き、真選組の面々に向き直った。

「これから世話になるきに、よろしゅうお願いするがよ」

「あ、ああ・・・こちらこそ」

深々と頭を下げた坂本に、近藤が慌てて頭を下げる。

「ヤツらが暴れたち、わしが必ずとめる。やき、安心してくれえ」

ヤツらというのは桂や高杉のことだと気付いた土方は思わず眉間にしわを寄せた。

必ず止めるとは言っているが、坂本の實力を知らない土方は、この男一人で大丈夫なのかと不安になったのだ。

「あゝ・・・辰馬ア、オメエ誰からこのこと聞いた？」

不意に思いだして銀時が訊くと、坂本は振り返って答えた。

「ん？春霞じゃ」

「やっぱ、ツラントコには水澄で、高杉のトコには氷柱か・・・」

「あ、高杉んトコに氷柱がおるが・・・苦労しちよるじゃろうなあ」

「それが、そうでもなさそうなんだよねえ・・・」

「ほゝ、ということとは、やっぱりおんしのコトが気になっちゆうんじゃの〜」

坂本がうんうんと頷きながら言えば、銀時は目を丸くした。

「はあ！？おまえ、何言っちゃってんそ！？」

「あっはっは、銀時い、なまっちゅうぞ〜」

「ッ」

思わず出た故郷の言葉に、銀時は口を手で塞いだ。

「へ〜、それが、旦那のお国言葉なんですかイ？」

沖田が興味津々に訊ねてくるので、銀時は苦笑いをうかべた。

「まあな・・・昔のこと思い出したら、つい、出ちまった」

「ほうじゃほうじゃ、銀時はなまるとヅラや高杉までなまって、わしにはわからんようになるぜよ〜」

「オメエほどじゃねえっつの！」

銀時は軽く坂本の頭を叩く。

「銀時イ・・・痛いぜよ〜」

「ウルセエ！・・・つか、携帯貸せ。携帯」

「何に使うんじゃ？」

「いーから、貸せ！」

渋々取り出した携帯電話を奪い取り、銀時はアドレス帳を開いた。

「・・・やっぱり、アイツの連絡先知ってたんだな」

「ん？ああ、一応なア・・・でも、使ったことはないきに」

示された番号を見た坂本はそう言って頭をガシガシと掻いた。

「ふーん、じゃあ、かけてみつかあ」

銀時はそう言って、通話ボタンを押した。

11・たまには行雲流水（にじつじゅんりゅうすい）のじやく

一方、夏霧からの知らせを受けた氷柱は、高杉の前に緊張した面持ちで立っていた。

「・・・夏霧からの知らせだア？」

気だるげにこちらを見る高杉の前で、氷柱はコクリと頷いた。

「はい、晋助様・・・ようやく、準備が整ったので」

「氷柱先輩、夏霧つてのは誰ツスか」

また子が不思議そうに首を傾げると、氷柱は苦笑をうかべた。

「えっと・・・幕府の高官・・・かしら」

「ばっ・・・幕府の高官ツスか!？」

素っ頓狂な声をあげてまた子が立ちあがる。

「・・・で、幕府の高官になった夏霧の知らせってのはなんだ？」

そんなまた子を視線で抑えると、高杉は氷柱に問うた。

「・・・それは」

氷柱がどこまで説明したらいいのかと言葉を詰まらせた時、高杉の

携帯電話が着信を告げた。

「……なんだア？」

鬼兵隊の幹部以外で高杉の携帯電話の番号を知る者はいなかったはず。そして、幹部はここに全員揃っている。

高杉は不審げに携帯電話の画面を見ると、心底嫌そうな表情になった。

「そついや、一度だけアイツに連絡入れた事があつたか……」

画面には“坂本辰馬”の名が表示されていた。

出るのを一瞬ためらったが、夏霧の件が頭を過り、高杉は仕方なしに通話ボタンを押した。

「何の用だア、辰馬ア」

『あ、晋ちゃん？俺だよ俺、元氣イ？』

「……何の冗談だア？銀時イ」

眉間のしわを深くして問いかけた高杉の言葉に氷柱がハッと顔をあげた。

『別に冗談じゃないんだけどさア、ちよつと江戸まで来てくんない？』

「はア？……何言つてやがる。テメエ等とは袂を分かつたハズだ

ぜエ？それに次に会ったら全力でたたっ斬るなんつってやがったのは、どこの誰だ？」

『あーハイハイ、俺達ですわ、わかってるっつ。でも……
・晋助、先生の仇の情報、知りたくねえか？』

ふざけた調子で応じていた銀時の声が不意に真剣なものに変わった。

「情報……？」

『夏霧が知らせて来た。……氷柱には詳しくは教えてねエらしい。
・アイツはテメエの性格良く知ってっからな』

銀時が嘘をついているとは思わなかった。声音だけでもわかる。これは完全に怒りを押し殺している時の声だ。

「……どこに行きやあ良い？」

『紅桜の件の時の……あの港に今晚だ。ツラも辰馬も来る。ああ、ついでに真選組もな……夏霧が上層部を上手く丸め込んだらしい、テメエ等の指名手配は解かれてっから』

「……相変わらずだな【六花】は。テメエのためなら世の理すら変えるか。愛されてんじゃねエか」

『知るかよ……』

わずかに戸惑ったような銀時の声に、高杉はクツリと笑った。

「銀時イ、テメエに魅せられた連中は他にもたくさんいるんだぜエ

「？」

『はア？何ソレ？』

高杉が鬼兵隊を再結成する時に参加を固辞した者達の多くが、銀時の不在を理由としていた。

今ならば、耳を貸すかもしれない。

「クク、楽しみにしとけよ、銀時イ……懐かしい面々を揃えといてやるぜエ」

『あー、ハイハイ、余計な事しなくてイイから、果てしなくせんないから。 temeエがやる気出してイイ事あった例がねエから』

「せんないだア？ふざけんちや、クソ天パ……ッ！」

銀時につられてつい口にしたのは、懐かしい故郷の言葉だった。

『ププツ、なまり伝染ってやんの〜』

「るせエ！」

プチツと怒りに任せて通話を切ると、こちらを凝視していた氷柱と視線があった。

「……江戸に行くぞ」

「はいー！」

返事をした氷柱に同意するように万斎やまた子、武市も頷くのを見て、高杉は口の端を吊り上げた。

「チツ・・・チビ助のヤツ、マジで切りやがった」

舌打ちする銀時に、坂本は苦笑をつかべた。

「ありゃあおんしがわりいぞ。高杉をからかったらああなるがは、わかりきつちよるじゃろつに」

「えゝ、あの程度で怒んのゝ？晋ちゃんってば、ちよつと心が狭くなり過ぎじゃね？」

「あつはつはつは・・・アレは昔からじゃろゝ？びっしりおんしらじゅうしちがケンカしとつたがを見ちゆうぞ」

「そうかア？」

あの頃は、ケンカと遊びの境目がわからない程にお互いの存在が近かったのだ。

隣を見れば高杉や桂、坂本が。

後ろを見れば、己を慕う【六花】が。

更にその後ろには、大勢の同志達が。

だからこそ、あの状況下で己は笑えていたのだと思う。

「大丈夫なんですか・・・銀さん」

新八が心配そうに訊ねてくる。それも仕方のないことだろうと銀時は苦笑をうかべた。

「まあ、お前等は紅桜ン時の高杉しか知らねエもんなア・・・たぶん、大丈夫だよ」

高杉の優先順位が変わっていなければ、今ここでこちらにケンカをふっかけてくるわけが無いと銀時は告げる。

「高杉の優先順位？」

土方が首を傾げる。

「アイツがこの世界を壊そうって思ったのは、先生を殺されたからだ。まあ、幕府に裏切られて大勢の仲間を失ったつてもそれに拍車をかけてるんだろぅが・・・だから、先生の仇の情報を得ようと思うなら、俺達とは一時的にでも停戦するってことだよ」

「ナルホド、な・・・その先生つてのは、テメエ等にとっちゃそれだけ影響力があるってコトか」

「・・・まあな・・・」

土方から視線を逸らし、銀時は頷いた。

「先生とやらのことはわしも話を聞いただけじゃが、銀時は先生に拾われたちやな。最初は先生にしか懐かえくつておおごとじゃったっていつちよったきに」

「余計な事は話さなくて良いんだよ・・・てか、それ誰に聞いた？」

「ん、たしか、ヅラじゃったかえ。ほれとも高杉？・・・あゝいやいや、久坂くさかじゃったか？」

「「久坂？」」

新八と神楽が首を傾げた。

銀時の昔の仲間の事はほぼ聞いたと思っていたのに、また別の名前が出て来たのだから当然と言えた。

「銀時らと同じ村塾出身の仲間ちや、久坂は戦争後はどっかで医者をやっちゅうって話じゃが」

「あゝ、玄ちゃんの名前久しぶりに聞いたかも・・・なっつかし」

「なーんだ。連絡をとったががやないのか」

「とつてねーよ・・・第一、俺は攘夷戦争後、アイツらと一切連絡絶ってたもん」

銀時が言えば、坂本は目を丸くした。

「なんじゃ、てつきり、【六花】を通して連絡取り合っちよるものやと思っと思ったぞ」

「・・・あのねえ・・・アイツらと再会したのもつい最近よ？えーと、確か・・・桂と再会した直後くらい？」

「じゃあ、本当について最近なんですねエ・・・」

新八がぼそりと呟く。

桂と会った時は本当に大変だったと思っだし、苦笑いをうかべた。

12・困った時の友人こそが本当の友人

「これで高杉とは連絡がついたことになるが、後は桂か？」

土方が話を戻すと、銀時は深い溜息をついた。

「ツラかぁ・・・めんどくせエなァ・・・アイツ、頭かてーんだもん。高杉と仲良くしろとか言ったら絶対小言の一つや二つや三つや四つ・・・」

「あっはっは・・・こっぴり絞られそうじゃのう」

「俺のせいじゃねーのに・・・」

顔を引き攣らせて笑う坂本とガツクリと肩を落とす銀時。

その様子を見て、桂という人物の認識を改めなければならぬか、と真選組の面々は考える。

「・・・そういや、桂と面と向かって話すのは初めてなんですネイ」

「あゝ、そうなるか」

沖田の言葉に、土方が考えながら頷く。

「まあ、会えば追いかけてこだもんなァ、真選組とツラはオメーら」

銀時が苦笑すれば、それにつられるかのように沖田も笑う。

「仕方ないでさア、ヤローは指名手配されてたんですぜイ？穩健派に鞍替くわがえしたとはいえ、攘夷浪士共の中心的存在には変わりねーですからねイ」

「不思議なのは、いつの間に穩健派になったか、だな」

土方が言えば、万事屋の子ども達がキョトン、とした。

「あれ？気付いてなかったんですね」

「とつくの昔に気付いてたと思ってたアルヨ」

「あ？」

土方がギロリと子ども達を睨むと、新八は引き攣った声をあげ、神楽は睨みかえしてくる。

「まあまあ、トシ・・・それより、どういうことだ？」

近藤は土方を宥め、子ども達に問う。

「銀さんと桂さんの関係には気付いてたみたいだから、その事も勘付いてると思ってたんですけど・・・桂さんを穩健派にしたのは銀さんですよ」

「銀ちゃんがツラの誘い断って、説得したネ」

「いやいや、神楽ちゃん。説得はしてないからね？面倒なコトが嫌だから断っただけだからね？」

銀時が嫌そうに首を振る。すると頭上から影が降りた。

「む？・・・アレは説得ではなかったのか？俺はそう感じたが・・・俺は、お前が・・・一番この世界を憎んでいるハズの銀時が我慢しているのに、俺達がとやかく言えることではないと思ったのだ」

声が聞こえる前から“こいつ”がいることには気付いていた。だから、そう言われるのが嫌で否定したというのに、相変わらず“電波”らしい。

目の前にいる真選組の面々が目を丸くしているのを無感動に見ながら、銀時は背後にいる人物に対して溜息をついた。

「別に、我慢なんてしてないし・・・というか、どっから入って来たんだよ、ツラア」

「ツラじゃない、桂だ。・・・普通に門から入って来たぞ」

「ふーん、あつそう。・・・でさ、もーそれ聞き飽きたんだけど。いい加減認めちゃえよ、ツラだってこと」

「ツラじゃない、桂だ！そしてこれは地毛だ！！」

「お、落ち着くんじゃ、ツラ」

「何度も言わせるな！坂本！！俺は桂だあああ！！」

力一杯にゲンコツを振り下ろして坂本を床に沈めると、桂は銀時の肩を掴んだ。

「・・・銀時、話は水澄から聞いた。“ヤツ”の動向について調べがかったらしいな」

「・・・つたく、あのおしゃべりが」

「水澄を責めてやるな。お前を心配してのことだ」

ガシガシと頭を掻く銀時に、桂は眉根を寄せる。

「わーってるよ・・・で、お前がここに姿を表したってコトは、指名手配が解かれてるってのは聞いたんだな？」

「ああ、大体のコトは訊いた。それで、これからどうするのだ？」

「ん〜、高杉と合流してエ、“ヤツ”をたたつ斬る。それだけだろ？」

あっけらかんと告げた銀時に、桂は心配そうな眼差しを向けた。

「銀時、お前・・・大丈夫か？」

「つたく、相変わらず心配性だなア・・・お前は俺の母ちゃんかつの」

「母ちゃんではない、桂だ！・・・というか、茶化すな銀時！」

グイ、と顔を自分の方へ向かせると、桂はジッと銀時の表情を見つめた。

いつもなら死んだ魚のようなその瞳が、今はゆらゆらと様々な感情を映しこんで揺れている。

「……あまり無理をするな、このたわけが」

何も感じないわけが無い。銀時の目の前で“あの人”は“ヤツ”に殺されたのだ。

燃え上がる炎の前で悲痛な叫びをあげた銀時を、今でも鮮明に思い出せる。

「……無理なんかしてねエよ」

ばしん、と桂の手を叩き、銀時は顔を背けた。

それが無理をしているというのだ、と言い募ろうとした桂は、ふと万事屋の子ども達の心配そうな顔が視界に入って、その口を閉ざした。

「桂さん」

「ツラ」

この子等の心配を煽ってしまったかと反省した桂は、フツと肩から力を抜いた。

「……キツかったらちゃんとと言っただぞ、銀時」

「……ふえ〜い」

何ともやる気の無さそうな返事だが、それでも言葉が返ってきたことに満足し、桂は改めて真選組に視線を向けた。

「こうして相對するのは初めてだな・・・土方」

「・・・ああ」

頷く土方に対し、桂は目を細めた。

「ふっ・・・意外と柔軟な頭だったらしい」

「・・・上様からの勅命とあっちゃ、逆らうわけにはいかねえからな」

フイ、と顔を背けた土方に笑みを深め、桂は近藤に視線を移した。

「近藤・・・貴様とは浅からぬ縁だな」

「あゝ・・・まあ、そうだなア・・・」

チャットで意気投合しそうになったり“猫”と“ゴリラ”になったりと、様々縁がある2人だが、ここまで落ち着いた状況で会うのは初めてだと思つと何やら感慨深いものがある。

「近藤さん？」

「どついつ縁でさア？」

「・・・あー、いや、気にするな」

土方や沖田が不思議そうにしているが、説明しようにも出来ない近藤は口を閉ざす。

「偶然の出会いが多い、ということだ。・・・まあ、今回に限っては必然のようだがな」

見兼ねた桂が近藤のフォローをすると、土方や沖田、それに山崎がギョツとしたように視線を向けて来た。

「・・・なんだ？」

「いや、その・・・」

「・・・何でもねエですぜイ」

「まさか、アンタが局長をフォローするとは思ってなかったんです
よ」

「「山崎!?!」」

余計な事を、と睨んでくる2人の視線から逃れるように顔を背けた山崎に、桂はクツリと笑った。

「まあ、お前達は銀時の“お気に入り”だから・・・追われる心配が無くなったのなら、敵視する理由はない」

「はー、お互いに素直じゃないねエ・・・」

「銀時・・・お前にだけは言われたくないセリフだな」

「……え、銀さんは自分に正直に生きてるもんね。」

絶対に弱っているコトを認めるつもりはないらしい銀時に溜息をついた桂を見て、真選組の面々は思わず同情の視線を桂に向けた。

13・真の友は最大の財産であり、最も得がたき人（前書き）

オリキャラ追加です。

松下村塾の四天王をモデルとしたキャラです。

久坂玄火 元ネタ（久坂玄瑞）

入江十一 元ネタ（入江九一）

古田稔磨 元ネタ（吉田稔磨）

よくありそうなネタで・・・（汗）

13 真の友は最大の財産であり、最も得がたき人

その夜、一行は紅桜の事件の際に鬼兵隊の船が停泊していた港にいた。

「……ここで、初めてアイツに会ったネ」

神楽が銀時の袖を握り、呟く。

「……そうか。確か、ツラを探して乗り込んだんだっけか？」

「うん」

頷く神楽は、わずかではあるが怯えているようなそぶりを見せた。

「……神楽、高杉が怖かったら、銀さんの後ろに隠れてな」

「……大丈夫ネ……いざという時のために、銀ちゃんの傍にいろアル」

銀時の袖から手を放し、神楽はギュツと愛用の傘を握り締めた。

そんな神楽の様子に、桂や坂本は目を細める。

「リーダーが護衛とは、心強いじゃないか銀時」

「せんばんと可愛い護衛じゃの〜」

「るせエ・・・オメエら、氣イ抜いてんじゃねえぞ。これは賭けなんだからな」

高杉が味方となるか、銀時達が集まっているのをこれ幸いと殲滅しにかかってくるか。

たぶん大丈夫とは思いつつも、高杉の心中を全て理解しているわけではないのだから絶対とは言い切れない。

真選組も念の為幹部以外は至る所に潜ませ、奇襲に備えた。

「間もなく、月が登りきるぞ」

土方が囁くように言う。

その言葉につられるように丁度真上に来た月を全員が見上げた時だった。

「船じゃ」

坂本が最初にそれを見つけた。

「・・・アレは間違いなく鬼兵隊のものだ」

桂が双眼鏡を覗き込んで確認する。

「さアて・・・アイツはどう出てくるかねエ」

銀時は腰に佩いた愛刀“雪月花”の柄に手をかけた。

丁度銀時達のいる真上まで来た鬼兵隊の船は静かに港に停泊し、その中から幹部達が姿を現した。

「……アレが」

「高杉、晋助」

近藤や土方、沖田に山崎がその派手な出で立ちに視線を奪われていた。

「よオ、銀時イ……ツラも坂本も久しぶりだなア」

ニイ、と笑い高杉は、やや間合いを取って銀時の前に立った。その後ろには万斎やまた子、武市の姿がある。

「……氷柱は？」

銀時が短く訊ねると、高杉は肩を竦めた。

「途中で降ろした。行くところがあるんだとよ」

「高杉……貴様のしたことは忘れてはおらん……が、今回は事が事だ。今までの事は一時措いておくことにする」

桂が言えば、高杉はクツリと笑う。

「ヘエ……随分と心が広くなったじゃねエか、ツラ」

「あつはつはつ！仲良くやろうやか、ここでいがみあっていてもなんも始まらんのやき」

坂本がいつもの調子で言えば、高杉は目を細めた。

「あア・・・そうだなア」

ゆらり、と高杉の身体が揺れた。その瞬間、銀時は横にいた神楽を後ろに突き飛ばし愛刀を抜いた。

高杉の持つ刀が銀時の胸を狙うように振られ、銀時は“雪月花”を縦に構える。

ギーン！

刀が交わる音が辺りに響き、周りにいた者達が気色ばむ。

「“雪月花” 久々に見たぜエ？どこに隠してた？・・・紅桜ン時は使ってなかったなア？」

「・・・夏霧に預けてたんだよ」

「へエ・・・それで、こつちにあの木刀を寄越したワケか」

「・・・まアな。つか、テメエが氷柱に甘味を所望したんだろつが」

「ククツ・・・そうだったなア」

クツリと笑った高杉を、銀時はジッと見つめる。

「・・・晋助、テメエの答えは」

我に返つたまた子が、慌てて高杉に暴行を加えていた者を押さえた。

「お、落ち着くっス！つか、晋助様に暴行とか有り得ないっス！！」
双銃をぶつ放さないのは、それが高杉の友人であり以前から仲間
引き入れたいと願っていた人物であるからだ。

「放してくれ、また子ちゃん！もっと殴る蹴るの暴行を加えないと
ダメだつて、天のお告げが！！」

「天のお告げつて何スか！ダメッス、これ以上は晋助様が危ないッ
ス！！」

「……痛エ……これが医者のことかよ、玄」

ボロボロにされた高杉がむくりと起きあがり、腹の辺りを押さえて
呻く。

「煩い！バカ晋ツ！手加減してやっただろうが！……とにかく、
銀に謝れ！！！」

“彼”はビシッと銀時を指さし、高杉に命じた。

高杉はチラリと銀時を見上げ、口をへの字に曲げた。

「……冗談でも刃を向けて……悪かった」

そう言うと、高杉はフイツと銀時から顔を背けた。

銀時は一瞬目を丸くし、それからホツとして泣き笑いのような表情

になる。その場にいた高杉以外の全員がその表情を視界に入れ、思わず見惚れる。

次の瞬間。

「……まぎらわしいんだよツツ！このチビ助！！」

銀時はそう叫び、高杉の頭を思いっきり叩いた。

「いッ！！……てめツ、こんな力一杯叩かなくてもいいだろうが！！」

頭を押さえて立ちあがった高杉が、銀時に詰め寄る。

「フン、テメエが最初に刀抜いたんだろうが！！このチビッ！」

「チビ言うな！クソ天パ！」

「天パ馬鹿にすんな！！」

ガルガルと威嚇し合う銀時と高杉。

こんな高杉を見たことがない鬼兵隊の幹部達は目を丸くし、真選組の幹部達も高杉のイメージがガラガラと崩れていくのを感じていた。

「……よしっ、そこまでー」

ガシツと銀時と高杉の頭を押さえて間に割り込んだ“彼”が二カりと笑った。

「・・・玄」

「玄ちゃん・・・」

「ケンカするほど仲が良いってな・・・まあ、先生はケンカを好ま
れなかったが」

「「・・・」」

“彼”が苦笑すると、銀時と高杉は言葉を詰まらせて俯いた。

「久坂！」

その時、ようやく我に返った桂がその傍に走り寄った。

「ああ、久しぶりだな。小太郎」

そう言って爽やかな笑顔をうかべた“彼”くさかげんか久坂玄火。自分達と同じ
村塾で学んだ学友の登場に、桂はいささか戸惑っていた。

「どういう、ことだ？鬼兵隊と共に来るなんて」

「ん？ああ・・・元々、鬼兵隊に参加しろって散々声はかけられて
たんだが、晋や小太郎だけでなく俺まで参戦したら、銀はどう思う
だろうってずーっと渋ってたんだ。そうしたら、銀と一緒に先生の
仇を討つことになったって話を聞いてな、銀に会うきっかけになる
と思って・・・着いてきちゃったんだ」

「着いてきちゃったんだって・・・お前、文さんは・・・」

「うん、文ちゃんは行って来いって言うてくれたから」

桂の出した名前に、高杉や銀時がギクリと身体を揺らし、久坂は苦笑いをうかべた。

「……文さんって？」

新八が傍にいた坂本に訊ねる。

「うん？……ああ、アイツらの先生の妹で、久坂の嫁じゃったかえ」

「妹！？」

「嫁！？」

近藤や土方が目丸くする。

その時、鬼兵隊の船からひよこつと2人の男性が顔をのぞかせた。

「……おい、俺等はいつ出れば良いんだよ？」

「そもそも、隠れている必要があったのか？」

2人連れ立って鬼兵隊の船から出てくるのを見て、桂や銀時、坂本はギョツとした。

「十一！？」

「麿ちゃん！？」

「おんしらまで来とつたがか!？」

困ったように笑っているのは入江十一いりえ といち、機嫌悪そうに眉間にしわを寄せているのが古田稔磨ふるた としまろ。久坂と同じく銀時達の学友だった。

「・・・晋助、懐かしい面々を揃えといてやるって・・・こいつ等のことだったのか？」

銀時が訊ねると、高杉はコクリと頷いた。

「ああ・・・ずっと鬼兵隊に参加しろって声はかけてたんだが、銀も参加してねエのに自分達が参加できるわけが無いって断られてたんだ。・・・だから、今回は耳を貸すかもしれねエって声をかけた」揃いも揃って銀時バカだからな、と高杉が言えば、久坂達3人がニヤリと笑う。

「1番の銀時バカが何言ってるの」

「全くだよ。子どもの時分から銀にはっかりちよっかい出して」

「相変わらず素直ではないな」

「・・・フン」

幼馴染達の言葉に、高杉は言い返すでもなくキセルを啜えた。

14・傾蓋(けいがい)旧(きゅう)の如(ごと)し

「えーと・・・とりあえず、すっごい置いてきぼりな気がする」

「ぱつつあん、意見が合うネ・・・私もそう思うヨ」

賑やかな集団を遠巻きに眺めながら、新八と神楽が悔しそうな表情を浮かべる。

あの独特の空気感の中に入っていけない。万事屋の従業員として家族以上の濃密な時間を過ごしてきた2人でさえも、だ。

「攘夷戦争の後半はそりゃひでエモンだったって話だ。そんな中で同じ釜の飯を食って文字通り命懸けで戦ってた仲間なら・・・しようがねエだろ」

土方がそんな子ども達を慰めるように言葉をかける。

「それは、そうですね」

「銀ちゃんは、仲間外れはしないって言ったアル・・・」

ムスツとしている2人の様子に気付いたらしい銀時が視線をこちらに向けて来た。

「新八、神楽」

忘れてないよと言うように微笑み手招く銀時に、途端に2人の機嫌が良くなる。

「銀ちゃん、紹介するアル！」

「仲間外れは無しですよ！銀さん！！！」

そう言いながら嬉しそうに手招く銀時に駆け寄る2人。

「……まア、あの2人の機嫌の良し悪しは銀時万事屋にかかってるってコトで」

「ですねィ」

近藤と沖田が苦笑する。

「はぁ……ったく、ガキ共の扱いなんて野郎はちやーんと心得てるってコトか」

慰めがまったく意味をなさなかった土方は思わず深い溜息をついたのだった。

新八と神楽を幼馴染達に紹介し終えた銀時は、次に近藤達の前に彼等連れて来て簡単に紹介をする。

「でエ、こつちが武装警察真選組の局長のゴリラと、副長のニコ中マヨと、一番隊隊長のドS王子と監察の死ザキの呪文ジミーね」

「」「」「ヒドッ！」「」「」

さすがにその紹介はないんじゃないかと思う。

近藤達が恨めしげな視線を銀時に向けた時だった。

「あゝ、未だにそういう紹介の仕方するんだ」

クツクツと笑いながら、入江が懐かしそうに言う。

「……塾生達にも妙なあだ名をつけて回っていたものだが、戦争時にも新しく部隊を組まれる度にやっていた気がするぞ」

それに対して呆れた様子で溜息をつく古田。

「そう言えば最初に小太郎のコト、ツラって言い出したのって銀だったか？」

そして、久坂が首を捻れば桂がハッと息を呑み、銀時を睨んだ。

「そつだ！銀時！そもそもお前がツラとか言い出さなければ……！……！」

「……しまいにや、先生までツラ呼びだったしな」

桂が銀時の胸ぐらを掴んだその時、高杉がトドメとばかりにボソリと呟いた。

「それを言うなああああッ！」

桂が最も思い出したくない黒歴史である。

松陽が面白がって銀時と高杉と共にツラツラと言って来た日には、さしもの桂もツッコミ返すことすらも出来ずに撃沈した。

「へー、先生がな〜」

「まあ、あの人もお茶目な所があったからねエ」

入江と久坂が訳知り顔で頷けば、古田が渋い顔をする。

「お茶目で済まない時もあつたけどな」

クソが付くくらい真面目な桂と古田は、反応が面白いと良く皆からからかわれていた。

だからだろう。幼馴染達のまとめ役というか、ツッコミ役というか、いつもそんなポジションにっていた。

そんな2人を松陽もたまに面白がってからかうことがあつた。

本人は手を抜いているつもりでも、“大好きな先生”にからかわれた日には立ち直れないんじゃないかと子どもながらに思ったものだ。

「まあ、それは措いとして・・・銀がそういう紹介をするってコトは・・・」

「ああ、奴らは銀時の“お気に入り”だ」

久坂が視線で問えば、桂が重々しく頷いた。

銀時の“お気に入り”というのは、周りが思う以上に、銀時バカの集団である幼馴染達には重きを置く言葉なのだ。

「そーかあ・・・じゃあ、晋助って銀時の“お気に入り”に手エ出しちゃったんだア〜」

入江の言葉に、高杉がギクリと身体を強張らせた。

「聞いたぞ、晋助。真選組の内乱を煽ったそうだな」

冷たい視線を古田が向けてくる。

「・・・俺ア、ヤツの背を押したただけだ。立派な牙が見えたからなア」

フィと顔を彼等から背けた高杉が言えば、真選組の4人が顔をわずかに曇らせた。

「・・・晋ちゃん、源外のじーさんの時もそんなコト言ってたア？あゝ、そーいやあの時も俺に殺気をバリバリと向けてくれたような気がするんですけどオ」

「うっ」

銀時がゆるく笑いながら告げれば、高杉が小さく呻いた。

「まあ、謝れって言ったって謝りやしないんだろっけどな・・・コイツ等の神経を逆撫ですんのはやめるよ？せっかく協力してくれるってんだから」

「・・・フン」

顔を背けたままの高杉に、銀時は苦笑をうかべる。

「あの〜旦那、源外のじーさんって・・・例のカラクリ技師ですかイ？」

この微妙な空気を読んでか、沖田が銀時に訊ねる。

「ん？ああ・・・まあ、今となつちゃ未遂だし、高杉が許されてんだからイイか」

「あのじーさん、なんかやろうとしてたんですかイ？」

「うん、カラクリ使つて將軍の暗殺？」

「へエ・・・そうなんですかイ」

銀時はあっさりと答え、沖田はそれをサラリと流した。

「・・・って、納得したらダメだろ！！」

思わずツッコミを入れた土方に、沖田はニヤリと笑った。

「イイじゃねーですかイ。そもそも、俺達は高杉達を見逃せつて將軍直々に命じられてるんですぜイ。それに未遂なうえに高杉が煽つたつてコトなら、その命令に含まれてるつてことでやしよっ？」

「そ、それはそうだが・・・」

「あゝ、安心しなって、もうじーさんは微塵もそんなコト考えてねーよ」

渋る土方に、銀時があと一押しと言葉を重ねる。

「それなら、不問ってコトで良いよな。な？トシ」

「……………近藤さんがそう言うなら」

懇願するような近藤の言葉で、渋々頷いた土方に、銀時は苦笑をうかべた。

「ワリいな、土方」

「……………明日は槍でも降ってくるのか？テメエが俺をまともに呼ぶ日が来るなんざ思ってもみなかったな」

「あゝ、悪かったねエ。多串君って呼ばれる方が良かったア？」

「うぐっ」

気にするなと言つ代わりにからかったつもりが、からかい返されて、土方は言葉を詰まらせた。

「へゝ、君、“あだ名持ち”なんだあゝ」

「銀が相当気に入っている証拠だねエ」

「……………まあ、わからなくもないな……………晋助と同類の匂いがする」

「磨ちゃん・・・同類って。イヤイヤ、無いってソレ。だって、テロリストと警察よ？まったく正反対じゃん」

「正反対ということとは、裏と表ということだろう？」

「あゝ、そういうこと？・・・まあ、確かに晋助は先生の為にこんな超が付くほどの過激派テロリストになっちゃって？多串君はゴリラの為ならえらく高ぁーいプライドとか放り投げて命懸けになっちゃうしねー、似てるっちゃ似てるかア」

「似てるといえば、お前にも似ている気がするな」

銀時が古田の言葉に納得したその脇で、何事かを考えていた桂が不意に口を開いた。

「えゝ、そうかア？」

「ああ、似ている」

「小太郎がそう思うなら、そゝなんじゃん？小太郎って昔から人の特性を見分けるの得意だったしゝ」

「んゝ似てるかア？」

高杉と土方という組み合わせはまだ納得がいったものの、己と土方となるとまったく納得がいかない。

「・・・似ているぞ、特に汚れ役を買って出るトコロなどは、な？」

「……………あゝ」「……………」

今度は両陣営から納得の声があがった。

「え、納得しちゃうのオオオ!？」

「おいコラ、総悟ッ!近藤さんも、山崎までなんで納得してやがる
!?!」

「……………だつてエ・・・ねエ?」「……………」

「ナニ!?!お前達、何なの!?!なんでいきなり息が合っちゃってん
の?!?!」

2人が慌てる姿を見えますますこれはと頷きあつ面々に、土方は肩
を落とし、銀時は深い溜息をついたのだった。

15・後の喧嘩(けんか)先でする

「それで?・・・“ヤツ”の情報ってのは?」

ひとしきり銀時と土方をからかった後、高杉が話を戻した。

「・・・あゝ・・・えーと、テメーら落ち着いて聞けよ?つか、誰か晋助押さえといて。キレて暴れ出さないように」

「あゝあゝ?」

「あ、じゃあ、俺が押さえておくよ」

銀時の言葉に眉間にしわを寄せた高杉を、久坂が羽交い絞めにした。

「テメツ、玄!何しやがるツ!」

「いや、銀が言い渋る情報ってだけでも危なそうなのに“ヤツ”絡みじゃ、絶対に晋は暴れるだろうと思って」

「多分、玄ちゃんの押さえ方は正解かも・・・」

「・・・実はな、夏霧の調査で“ヤツ”の所在が判明したのだ」

苦笑する銀時の横で、桂が口を開く。

高杉は暴れるのを止め、桂を凝視した。

「テメエは知ってたのかよ、ツラ」

「ヅラじゃない桂だ。・・・知っていたというか、ウチにいる銀時の部下に喋らせた」

「・・・銀時の部下？誰だ」

「水澄だ」

「・・・ああ、アイツか」

水澄の名前を聞いただけで納得した高杉に、新八と神楽が首を傾げた。

「銀さんも口が軽いつて言ってみましたけど、そんなに有名なんですか？」

「名前聞いただけで納得つて、どんだけネ」

「いやあ、本人にはそのつもりが無くても、うっかり喋っちゃまうんだよなア」

「その度に落ち込んでいたな」

銀時と桂が答えると、幼馴染の面々もうんうんと同意するように頷く。

「腕は確かなんだけどね」

「猪突猛進型というか・・・潜入にはむかんな」

「逆に、氷柱ちゃんとかは女の子ってコトもあるけど、潜入は得意だよねえ。なにせ、すんなりと鬼兵隊に馴染んじゃってたし」

入江や古田、久坂が揃って高杉に視線を向ける。

「六花の成り立ちを考えれば、銀時と未だに繋がってるだろうとは思ってたぜエ？・・・ただ、最近まで一切他と連絡を取り合う姿を見せなかったのは見事だったなア」

「連絡を取り合う姿を見せなかったっていうより、取ってなかったんだよ。俺にだってつい最近まで連絡はなかったしな。ヅラが俺を勧誘し始めた頃から春霞が直接会いにくるようになったんだけどオ」

「じゃあ、水澄のうつかりのせいか」

「あ、やっぱヅラに俺の居場所教えたのアイツか!!」

「責めてやるなよ？それでなくともかなり落ち込んでいたのだ。蒸し返すと慰めるのが面倒だと思う位にな」

桂が若干ウンザリと言えば、銀時は溜息をついた。

「何？アイツ、お前等の隠れ家の敷地にきのこでも生やした？」

「きのこどころではない。アレは腐海だ」

「わオ」

「・・・おい、そこまででいいだろ・・・“ヤツ”の居場所とやらを早く教える」

イラだちを隠そうともせず高杉が言えば、銀時と桂は顔を見合わせる肩を竦めた。

「ったく、晋ちゃんは余裕がねエなア・・・まあ、わからなくはねエけど」

「・・・“ヤツ”は萩に出向していた。天導衆の私兵団としてな」

「「「「！」「」」」

幼馴染4人がギョツとする。

「ん？萩ちゆうコトは、おんしらの故郷かア？」

坂本が訊ねれば、桂が頷く。

「ああ」

「・・・どうやら“白夜叉”を探してるみたいなんだけどオ、明後日江戸に帰ってくるんだと」

「じゃあ、今すぐ萩にッ！」

銀時の言葉に高杉が過剰に反応した。が、久坂が押さえていたために自由に動けず恨めしげな視線を彼に向けた。

「待て、晋。まだ銀の話の途中だ」

「そーそ。話は最後まで聞こうな？晋助・・・一応、六花は六花で

作戦があるみたいなワケだよ。で、俺達が先生の仇をとってる間に
アイツらは城の方で何かをやらかすつもりらしいんだわ」

「・・・つまり、俺達が派手にヤツを相手にしなければならぬワ
ケか」

古田が言えば、入江がポンと手を打った。

「ああ、ナルホド。・・・俺達は陽動なワケね」

「まあ、仇を討たせて貰えるだけマシだよ。しかも、上様公認って
コトはお咎め無しなんだろう？」

久坂がのんびりと銀時に訊ねれば、苦笑が帰って来た。

「そーいうことだろうなア・・・六花の作戦は俺にも秘密らしいし
？大人しくアイツらの作戦に乗っておこうかな と俺は思うんだけ
ど。オメーらはどう思う？」

「・・・銀時に同意」

桂、坂本、久坂、入江、古田の5人が口を揃えて答えた。唯一無言
だった高杉に全員の視線が向く。

不機嫌そうに眉を寄せていた高杉は、その視線に耐えかね軽く息を
吐いた。

「俺も・・・先生の仇さえ討てりゃ、後はどうでも良い」

「よし、決まりだな・・・真選組も問題ねーだろ？」

高杉の答えにニカリと笑い、銀時は真選組の4人を振り返る。

「ああ。一応、保科様に依頼された一部隊は城に向かわせることになつてゐるが、俺達幹部と残りの連中はオメーらに従えつて言われてつからな」

土方が答えると、銀時は満足げに頷く。そして、子ども達に優しくげな眼差しを向けた。

「……新八も、神楽も大丈夫な？」

「ハイ！」

「大丈夫ネ！」

元氣の良い返事が返つて来て、その場の空気がその瞬間だけ和む^{なご}。

「……じゃあ、わしはいつぺん快援隊の船に戻るぜよ」

坂本が言えば、すかさず入江が手を上げた。

「はいはい、俺、短刀がたくさんあると助かる。あと、長巻^{ながまき}！」

「……俺には刀を一振り用意してくれ。それで充分だ」

古田も短く要求する。

廃刀令のご時世だ。一般人として暮らしていた者は刀など、とうに手放している。

それがわかっていて坂本が帰ると言い出したのに2人は気付いたのだ。

「久坂はどうするがか？」

「ん、俺はイイよ。晋に預けておいたから」

久坂が答えれば、銀時と桂が目を瞠った。

「ふーん。やっぱア、玄ちゃんには無理強いとかできねーんだ。晋助は」

「識の高杉、才の久坂・・・だからな。知識は優っていても口では勝てぬだろう」

「フン・・・ただ、武器を預かっただけだ」

実際に、何度も口説きに行って断られているなどは口が裂けても言えない高杉である。

久坂も苦笑するものの、その事に言及はしない。

「他に、必要なものは有るがか？」

坂本が問えば、銀時がそろりと手を上げた。

「なんじゃ、銀時？」

「・・・糖分」

いかにも銀時らしい要求に、その場の全員が思わず噴き出して笑った。

「笑うなアツ！銀さん糖分ないと死んじゃうの！力出ないわけ！ポパイだってハウレンソウないと力出ないじゃん！！」

「こんな時に甘味なんてねだるんじゃないヨ、銀ちゃん。だからマダオって言われるネ。第一、ポパイって何ヨ？」

「そうですよー逆ギレはみっともないですからね、銀さん。というか、ハウレンソウで力出るんですかそのポパイって人」

「あれ〜？もしかしなくても、これはジエネレーションギャップ？ねエ！これ、メジャーじゃねーのおお！？つか、年齢バレちゃう的なヤツうううッ！？」

夜の港に、銀時の声が悲しく響いた。

16・愛と憎しみは紙一重（前書き）

“ 黒夜叉 ” については、白夜叉降誕の設定 + してあります。全くのオリジナルじゃありませんが、ほぼオリジナル感覚で読んで頂ければ。。。

16・愛と憎しみは紙一重

萩

「・・・夕焼け、か」

「どうなさいましたか？」

空を見上げた男はクツリと笑う。それを見た部下の1人が首を傾げた。

「いや・・・15年前の事を思い出しただけだ」

「15年前と言いますと、吉田松陽の暗殺を命じられた時の？」

「ああ、あの炎上した屋敷の跡地を見て来たせいかな、いささか感傷的になったか。・・・吉田松陽、アレも面白い男だとは思ったが、それ以上に興味をそそられたのはあの白い子鬼だ」

「子鬼、ですか？」

「俺の肩に刀傷があるだろう？アレは吉田松陽にやられたものではない。・・・あの子鬼にやられたのよ」

「・・・貴方が、子どもに？」

声音でわかる。部下は心底驚いている。

男はますます愉快だと笑い、目を細めた。

「ただの子どもではない。そう、あの時からアレは片鱗を見せていた。その証拠に攘夷戦争末期では白夜叉などと大層な名で呼ばれていたからな」

「白夜叉!?!?・・・あの伝説の?」

「そうだ。戦争時にまみえたが・・・疲労や空腹故か子どももの時分よりも力が落ちていたように思ったな」

至極残念そうに言う男に、部下は頷く。

「末期ではほとんど幕府からの支給は無かったですから。・・・むしろ邪魔にすら思われていたんですよ、ヤツ等は」

「クク・・・国を想って戦っていた若者を切り捨てたのだからな。今の幕府に縋るものなど有りはせぬ。あの裏切りは幕府が我等へ従属したという証であり、二度と幕府のために命を賭けようなどと力ある者に思わせぬためのものだ」

將軍は傀儡となり、幕府の力などあつてないようなもの。

城下でも天人が幅を利かせ、民は支配されることに慣れ切つてしま
い、一部の力ある者は幕府を見限り討幕を声高に叫ぶ。超過激派攘
夷浪士となつた高杉がいい例だ。

「真選組は?」

「あの狗どもは、侍でありたかつたのだろう。だから、どんな屈辱を受けても我等に従うしかない。・・・幕府のために動いているように見せてはいるが、真実、己のために動いているのよ」

「ああ、それでいつも反抗的な目を向けてくるのですね」

「プライドが無いわけではないだろうからな。・・・しかし、萩にもあの子鬼はいなかったか・・・」

部下は男の言葉に目を瞠った。

攘夷浪士を多く出したこの地の調査をするという名目で萩に来たものの、若者はごっそりと消えていて、いるのは老人のみ。攘夷浪士の家族も離散して、萩に残っている者はいない。

何の進展もなく三月も過ぎようとしていたこの時に、ようやく上司の目的を聞いたのだから無理もない。

「・・・白夜叉を探していたのですか」

「上の方々のご命令でもあるからな。どうしても死体を目にしなければ安心できないらしい」

「ある意味、高杉や桂以上に影響力のある男ですからね」

「そう、アレが動けば今まで大人しくしていた攘夷戦争参加者が立ちあがる可能性すらもある。悪い芽は早めに摘んでおかねばな」

「今更、天に唾を吐くような真似をするでしょうか？」

「・・・さて、わずかなきっかけでも、子鬼の神経を逆撫ですれば動くだろう。・・・そうそう、どうやら春雨とやりあったという銀髪侍が俺の探す子鬼ではないかという情報が届いた」

「春雨と、ですか。ではもう白夜叉は・・・」

「いや、それが春雨はその侍を取り逃がしたらしい。しかも犠牲が多かったのは春雨の方だったそうだ。・・・桂とその侍、たった二人にあの春雨が翻弄されるとは・・・クク、実際に見たら、さぞ愉快だったろうな」

「笑い事ではないように思いますが・・・」

「さて、子鬼は大人しくしておるかな？それとも、俺と再びみえた時のためにその牙をせっせと磨いでいるやもしれんな」

夕陽を見つめながら男が口の端をあげる。

「“ 黑夜叉 ” 様・・・」

「そう・・・俺と同じく夜叉の名を冠する子鬼。攘夷戦争で伝説となるほどに天人を斬った男。俺はアレと会つのを楽しみにしているのだ・・・もう、亡き師の年齢を超えたころか。どのような男に育つたのか早く会いたいものよ」

「江戸に・・・いるでしょうか？」

「いるだろう。江戸で春雨とやりあったようだしな・・・クク、灯台もと暗しとはこのことだ」

「萩まで来たというのに、結局、江戸ですか。……意図的にだとしたら、白夜又は相当のキレ者ということですね」

「……まあ、師を失った地で平然と暮らすことが出来なかったのやもしれんがな」

低く笑った男に、部下は溜息をついた。

「江戸と言っても広いですよ？しかも人は多いし特徴が銀髪だけでは……」

「名なら知っている」

「え？」

「白夜又は呼ばれた、あの子鬼の名……吉田松陽はアレをこう呼んでいた……銀時、と」

忘れるものか。

そう男は呟く。

あの時、吉田松陽が己の身を呈して庇い、尋常ならざる殺気を放ち己に向かってきた子鬼。

朋友を斬られ、怒りをあらわに斬りかかって来た“白夜叉”。

その名を男は一度たりとも忘れた事はなかった。

「さて、江戸で会ったならば名を呼んでやろうか」

そつ、癡しい者を呼ぶに優しく、體をかきたてるに
わしく。

17・鼓琴（こきん）の悲しみを垣間（かいま）見る

高杉達との再会の後、銀時達は一度解散して翌日の朝を迎えていた。

「あ、おはようございます！銀さん」

「おはようネ、銀ちゃん」

「・・・おー、おはよ」

家には戻らず万事屋に泊まった新八と、いつになく早く起きていた神楽に元気よく挨拶をされて一瞬驚いたように目を瞪るが、銀時は緩く笑って返事をした。

「朝ご飯出来てますからさっさと食べてくださいね。今日は明日の打ち合わせを吉原桃源郷でやるんでしょう？」

「あー・・・随分と張り切ってんじゃないのオ、新八君もオトコノコだったわけかア」

「足手まといになりたくないですから・・・自分の出来る限りの事をやるつもりです」

「ん、そっか」

目を細めた銀時に、神楽が抱きつく。

「銀ちゃん、ワタシも頑張るネ！」

「おう、期待してるぞ、神楽」

笑みをうかべて神楽の頭をひと撫ですると、銀時は食事が用意されている机の前に座った。

「よし！飯だ飯イ！」

食事を終えた銀時達が万事屋の外に出ると、そこには既にそれぞれ私服に身を包んだ真選組の4人の姿があった。

「あゝ、おはよ。ごくるーさん」

何とも言いようのない気まずさに、とりあえず銀時は挨拶をした。

「おはようー！」

「・・・おう」

「・・・おはよーござえやす」

「・・・どうも、旦那」

ニカリと笑って挨拶を返してきた近藤以外は、やはり気まずいと言わんばかりの微妙な表情をうかべている。

「えーと、これから吉原に行きたいと思いまーす」

「気まずいままに銀時が言えば、子ども達がおく、とわざとらしく声をあげた。」

「つつきー達に会うの、久しぶりネ」

「あー、そついやそつだな・・・日輪や晴太も元気かねエ」

「無理言ってお座敷貸して貰うんですし、お土産とか持って行った方が良いですかね？」

「そら、辰馬が用意するだろ。アイツ、宇宙土産とか沢山持つてくるって言ってたし・・・そんなからアイツらに選ばせればイイじゃねエか」

「宇宙土産とか・・・まともなもの、有るんですかね？」

「ちよつとは、まともなものも有るだろ・・・たぶん・・・」

「そつ言っておきながら、だんだん自信がなくなってくる銀時。」

「・・・一応、買っていきませんか？お菓子でも何でも・・・ほら、要は気持ちですから」

「だな」

「だから、新八が提案すれば、あっさりと頷いた。」

「吉原って……一体、テメエはどこまで顔を広げてんだ？」

そんな銀時を呆れたように見やり、土方が溜息をつく。

「あ？……そんなん、わかるわけねーじゃん。どこの誰までが俺のコトを知ってるかなんて」

「……いや、フツーわかるだろ……」

土方が思わずツツコミを入れれば、銀時はムツとした表情をうかべた。

「だって、マジでわかんねーもん。万事屋なんて商売してつと依頼人は山のようにいるし、仕事によっちゃ敵対する人間もいるし……攘夷戦争に係白夜文してたヤツなら、俺のことを容姿くらいまでなら知ってるだろーし……」

「あ……聞いた俺が悪かった……」

くどくどと呟く銀時に、土方は諦めたように謝罪した。

「土方さーん、ちったア考えてから発言してくだせエ。旦那の顔が広いのは今に始まったことだねエでしょうが」

沖田が言えば、土方はムツツリとして視線を逸らす。

わかつてはいたのだ。銀時の事を知る人間がどれ程いるのかは。なぜなら、山崎に散々銀時の事を探らせたのは土方自身だったからだ。

その時に知ったのは、彼の事を知る人間の多さ。そして、まったく

見えてこない過去。万事屋としての銀時は知っていても、それ以前の銀時を知る人間がほとんどいなかったのだ。

「・・・まさか、伝説にまでなった白夜叉だったとはな」

ボソリと呟いた声が耳に届いたのか、銀時がきよとりと目を瞬かせた。

「何？」

「いや・・・テメエの過去を探らせた時には、それを知る人間がほとんどいなかったが・・・白夜叉として探れば、知ってる人間は山のようにいたからな・・・」

「まあ、あの時はとにかく生きることだけに精一杯で周りを見る余裕もなかったから・・・自分が何と呼ばれようと気にならなかったし、幹部になった幼馴染連中と辰馬だけが俺を名前で呼んで、それで充分だっと思ってたんだよ」

「それで“坂田銀時”の名は広まらなかったわけか」

「ん・・・じゃないのオ？後は、故意にその名を消されたか・・・幕府にとつても攘夷志士にとつても“白夜叉”は“もろ刃の剣”だったからねエ」

幕府は天導衆に憎まれている白夜叉の存在ごと抹消したいと願い、攘夷志士達は白夜叉を神格化することで希望の灯火としたかった。

だから“坂田銀時”の名をもみ消して幕府は知らぬ存ぜぬを貫き通し、攘夷志士は“英雄”だ“軍神”だと祭り上げたのだ。

「……酷い……銀さんだって、1人の人間なのに」

新八が苦々しげに呟く。

「ま、おかげで指名手配とかはされなかったけどねエ……それに、当時はこの名を気安く呼ばれたくはなかったんだよ」

銀時の言葉に、子ども達や真選組の面々は首を傾げた。

「……理由、聞いても良いですかイ？」

沖田が問えば、銀時は頷く。

「……銀時って名前は、松陽先生が最期に口にした言葉だったんだ」

「それは……」

つまり彼等の師である吉田松陽は、銀時の目の前で死んだということになる。

桂や高杉達がやけに銀時の事を気にしていたのは、こういう理由だったのかと納得した。

「先生は、俺を庇って死んだんだ。アイツに、背中を袈裟懸けに斬られて……事切れるその瞬間まで俺を気遣ってた」

淡々と告げているようにも見えるが、それは銀時自身の古傷を抉るようなものだと気づいた土方は、その背を思いつき叩いた。

「いッ！・・・何すんだ、ゴルア！！」

「フン・・・さっさと行くぞ。土産も買うなら急がなけりやならねエだろうが」

タバコの煙を銀時の顔に向けて吐きかけると、土方はそう言って銀時に背を向けた。

「（素直じゃねー奴。でも、アリガトな）・・・多串君、煙いんですけどオ」

土方の気遣いに感謝しつつも、眉間にしわを寄せて銀時はその背から視線を逸らした。

「土方のヤロー・・・気に食わねエですねィ・・・この場で抹殺しちゃいましょうかねィ」

「バカ言つなヨ、サドヤロー。ヤツ等との戦いの時にドサクサに紛れてやった方が、後腐れないネ」

「ああ、ナルホドねィ・・・確かに、後腐れがないにこしたこたアねエな」

そんな2人のやり取りを面白く思っていなかったらしい沖田と神楽がコソコソと相談を始める。

「ちよつと、そこオ！！なに危ない事計画してんのオオオ！！」

それを偶然耳に入れてしまった新八は即座にツツコミを入れる。

今日も、ツツコミキャラはフルスロットルで健在だった。

18・同舟(どづしゅう)(相救)あいすく(うは誰が為?)

「いらっしゃい、銀さん」

「おう、邪魔するな、日輪」

「邪魔だなんて・・・吉原の救世主が、何言ってるの。貴方達ならいつだって大歓迎よ」

救世主とはまたデカイ話になってるもんだと真選組の面々が思わず口元を引き攣らせる。

「まったく・・・今度は誰を相手にしようというんじゃ?」

「あ、つつきー!久しぶりネ!」

神楽が満面の笑みをうかべて月詠に抱きつく。

「おはようございます、つつきーさん」

新八も嬉しそうに挨拶をし、月詠もわずかに笑みをうかべて頷く。

「・・・月詠、その後変わりはねエか?」

「ああ、何事もなく。春雨からも一向に誰かが送られてくる気配もないしな」

銀時の問いに、月詠は目を細めて答える。

「……ということは、神威の気まぐれは未だ続いてるってワケか」
その名を聞けば、月詠に抱きついていた神楽の表情が曇った。

「……ありがたいことだわ。彼がどうして吉原（こし）を放っておいてくれているのはわからないけれど、こうして自由に過（こ）せていられるのは彼の無関心のおかげね」

「アイツはそんなタマじゃないネ……絶対に何かを企（く）んでるアルヨ！」

日輪の感謝にも似た言葉に、神楽が猛烈に反発した。

「神楽ちゃん……」

新八が心配そうな表情をうかべる。

「まーまー、神楽。アイツの事はほっとけほっとけ。……何かしてきたら対処すりゃイイ話だ。……な？」

「……アイツが万が一何かしてきたらすぐに言うアル！私が絶対に止めて見せるネ！」

「ええ、その時はお願いね？……貴方達がこの吉原を鳳仙の支配から解き放ってくれたのも。また何とかしてくれるって信じてる」

「だが、そう何度も悪いことが起こってたまるか、という気持ちじや。……師匠の時も随分と迷惑をかけてしまった……まったく、

ぬしは本当に面倒事を背負いこむ男だな、銀時」

「あゝ……そういう運命なのかねエ……」

へらりと笑う銀時に、月詠は呆れたように溜息をついた。

「何か困りごとがあったならわっち等に話せ。出来る限りの協力はする。借りは返させてくれ」

秘かに座敷を貸してほしいなどと言われれば何かあると思って当然だ。銀時がまた厄介事に巻き込まれているのだと直感した月詠はそう告げる。

「いや……あゝ……今回は遠慮しとくわ」

「どうしてじゃ！わっち等の腕が信用ならんと言っのか！！」

「あゝ、違う違う……そうじゃなくてエ……今回は鬼兵隊とかと一緒に動くわけだよ。アイツら春雨と関係持つてるみてエだし、あんまり、オメエらが首突っ込むのも……な？」

「鬼兵隊！？……そんな連中と手を組んで大丈夫なの？」

日輪が驚いたように訊ねれば、銀時は苦笑した。

「まあ、一応……あそこの頭領は俺の幼馴染なもんで」

「頭領って……あの、高杉晋助がぬしの幼馴染！？」

月詠が声をひっくり返らせる。

「あゝ……そりゃ驚くよなア……晋ちゃん有名人だからねエ」

思わず遠い目をしてしまった銀時に、月詠は眉を顰めた。

「本当に……主は何者なんじゃ？」

「えゝ、しがない万事屋ですう……」

つい、と視線を月詠から逸らし、銀時はふざけた調子でそう言った。

「……ぬしに、借りを作ったままでいると言うのか、銀時」

今にも怒りだすか泣き出す一歩手前の表情で、月詠は銀時に訊ねる。

「……諦めろってエ……オメエら吉原の女全員、悪い男に引つかかったと思つてよオ」

「ふふつ……そうだよ、月詠。銀さん達に任せとけば全部うまくいったじゃないか。いつか、銀さん達が助けを求めたら、その時に全力で借りを返せばいい」

「あゝ……今日だってタダで座敷貸してくれて頼んだのはこっちだ。借りを返すなんて考えなくていいんだよ」

日輪の援護に力を得て、銀時は月詠に笑みを向けた。

「……ぬしは酷い男じゃ……」

銀時の笑顔に負け、とうとう引き下がった月詠が頬をわずかに赤ら

めて視線を落とす。

「そうそう、俺は酷い男なの・・・わかったら、ホレ、土産だ」

銀時は月詠の手をとり、紙袋を手渡す。かなりの重さに一瞬取り落としそうになる。

何かと中を覗けば、かぶき町名物と銘打った菓子がたくさん詰まっていた。

「何買ったら良いかわかんなくてよ、適当に買ってきたから・・・日輪と晴太と一緒に食ってくれ」

ガシガシと頭を掻きながらそう告げる銀時に、月詠はようやく目元を緩め、笑みをつかべた。

「・・・ああ、ありがとう・・・」

秘かに用意して貰った座敷に案内されると、銀時は苦笑いをつかべた。

「うわア・・・日輪さん、スゴイ部屋用意してくれましたね」

「いや、こりゃ、月詠の入れ知恵だろ・・・」

新八の言葉に、銀時は訂正を入れる。

おそらく鳳仙が作らせたであろう、密談用の完全防音設備が整っている座敷。

銀時がわざわざ頼むくらいのものであるから、と月詠が口を出したのだろう。

「さすが、つつきーネ」

「まったく、余計な氣い回しやがって・・・」

「だ、大丈夫なのか、銀時」

近藤がオロオロと問う。

「大丈夫って、ああ、金？・・・大丈夫だよ、タダで貸してくれるってさ」

本当は坂本にでも出させようと思っていたのだが、タダで良いと言いつ張った日輪の言葉に甘えたのだ。

「一体どんなコトすりゃ、救世主なんて呼ばれたり、座敷をタダ借りしたりできんだ？」

土方が呆れたように聞けば、神楽が胸を張った。

「銀ちゃんは吉原を鳳仙ってヤローの支配から救ったアル、だから、吉原の皆が銀ちゃんを救世主だって言うアル！」

「鳳仙って・・・マジかよ・・・」

「・・・ま、俺だけの力じゃないんだけどねえ」

その名は聞いたことがあったのか、真選組の面々がギョツとする。銀時はそんな4人を見つめて肩を竦めた。

「・・・鳳仙ねエ、どうりで付け狙われるわけだ」

クツクツと笑いながら呟かれた言葉に、銀時はホツと息を吐いた。

「高杉、ちゃんと来たな」

「・・・表で坂田銀時の名前で予約してるつつたら、スゲー顔でガン見されたぞ」

「そりやそうだろ。晋ちゃん有名人だし、銀さんもここじゃ有名なだし」

「・・・晋ちゃんは止める」

「え、じゃあ、チビ助？」

「・・・斬られてエのか？」

気まずさを隠すためか銀時が茶化すと、高杉の眉間のしわが深まる。

「まったく、顔合わせるたびにコレか？晋も銀もいい加減にしとけよ」

「あ・・・すみません」

「・・・フン」

高杉と共に来ていたらしい久坂が割って入るように声をかけると、銀時はバツの悪そうな表情をうかべて謝り、高杉はわずかに安堵の表情をうかべて鼻を鳴らした。

「妖刀紅桜、だっけ？・・・お前等、その時何があつたんだよ」

「桂に聞いても、ヤツにしては珍しく曖昧な答えしか返ってこないんだが、そこまでごじれるようなことをしたのか？」

同じく部屋の中に入って来た入江と古田も不思議そうに問うてくる。

「それは・・・そのー・・・えーっと・・・」

「・・・春雨と手を組んで、銀時とヅラを殺そうとしたただけだ」

「「「！」「」」

あらん限りに目を見開き、3人が絶句する。

「バカ晋！おまえ、正直に言っただろうよ！」

「ウルセエ！コイツ等に嘘言っただけで勝手にバレんだろうが！」

小声で銀時が言えば、高杉も小声で言い返す。

「せつかくヅラが誤魔化したってのに・・・！」

銀時がなおも文句を言おうとした時、凄まじい殺気に後ろを振り向いてギョツとした。

「晋・・・そこになおれ」

すらり、と抜刀した久坂が鬼の形相で高杉を睨む。

「げ、玄ちゃん？ス、ストップ！早まったらダメだってエ！」

「銀時こそ、ストップ」

「止めるな、銀時」

「ちよ、何言ってるのおまえ等！放せて！！」

慌てて久坂を押さえた銀時だったが、入江と古田に逆に押さえつけられた。

「晋、銀を殺そうとしたって、本当なんだな？」

「・・・ああ」

「違う違う！！春雨と手を組むために俺とツラの首を差し出すって言っただけで！！」

「余計ダメじゃ〜ん」

「ああ、ダメだな」

入江と古田の目が殺気を帯びる。

「うあああ！何で言ってるんだ俺エ！！余計に悪化してるううううう！！」

銀時は止めてくれるように頼もうと、視線を傍観者になっていた面子に向け、一瞬で諦めた。

神楽や新八はそもそも止める気はないようで冷静な表情をうかべており、真選組の面々はこの騒ぎ自体に呆然として（沖田だけは面白そうに）見ていたからだ。

「た、辰馬！！こ、この際ヅラでもイイから、早く来てコイツ等止めてええええ！！」

「……この際などと言うな、というかヅラじゃない桂だ」

「……あっはっはっ、なんじゃ、入った途端に殺伐とした空気じやの〜」

銀時の祈りが通じたのか、桂と坂本が座敷に入って来る。が、イマイチ状況がわかっていないようだった。

「久坂、何事だ？」

「……小太郎……晋は銀とおまえを殺そうとしたんだな？」

「なんだ、バレたのか……直接ではないが、春雨の連中に俺達の首を差し出すと約束はしたらしい」

桂の言葉に、久坂達の殺気がいや増す。

「……が、ヤツ等程度に俺達がやられるワケが無いとそう思っていたのではないか？高杉」

「……ヤツ等にやられるようなら、そこまでの人間だったっただけの事だ。それになア、俺ア前にも言ったが……先生を奪ったこの世界でヘラヘラと笑って暮らしてる連中が許せねエんだよ」

「「「「「「「「」」」」」」」」」

幼馴染達はその言葉に沈黙した。

高杉の世界の中心は、今でも松陽なのだと思い知らされたからだ。

「……あんまり、晋助を責めないでやってくれや。先生の事を大事に思い過ぎて暴走してるだけだからさ……」

とどめとばかりに銀時が言えば、久坂は溜息をついて刀を鞘に収め、入江と古田は銀時を押さえつけていた腕を放した。

「まったく、宇宙海賊なんぞと手を組むなんて……春雨は天導衆とも通じているとの噂だぞ？討幕なんて言ったら、逆に潰されるんじゃないか？」

呆れて久坂が高杉を見れば、高杉は肩を竦める。

「……春雨にや酔狂なヤローもいるんだよ。それに……春雨にいれば“ヤツ”の情報が入るかもしれねエと思った」

高杉はそう言うってから眉間にしわを寄せて続けた。

「まあ、それよりも早くに銀時の部下が掴んじまったけどな」

「まあ、幕府のど真ん中に入り込んでるからねえ、ウチの夏霧は」

「二へう、と銀時が笑う。」

「チツ、俺も幕府側に偵察を入れておけばよかったぜ」

「あー、言つとくけどお、俺は命じたわけじゃねえよ？実家に帰しただけで・・・後はアイツらが勝手に動いた結果がコレなだけだから」

「フン、相変わらず優秀なこつた。【六花】をここまで育て上げたのは teme だからな、今更命じてねえとか言ってもアイツらは teme のために命懸けで動くんだらうよ」

高杉の言うことは当たっていた。きっと【六花】の面々は銀時の心の平穩を守るために、命懸けで今回の作戦を遂行するのだらう。

「・・・・・・・・かもな」

言葉少なに返し、銀時は座敷の中央に座った。

会話が途切れると、桂はその場にいる者達の顔を見回して口を開いた。

「さて、主要な面子は集まったわけだが・・・そろそろ作戦会議を始めることにしよう」

その言葉に、皆の顔が真剣なものに変わった。

19・三つ子の魂百まではフォローになっていない

「さて、情報を持っている量の都合上、俺がこの会を仕切らせてもらうが構わんか？」

「異議なし」

桂の確認に、入江が場の空気を和ませるためか明るく声をあげた。

他の面子も反論は無いとばかりに頷く。

「……それで、“ヤツ”は萩から帰ってくるのだと言ったな？」

古田が桂に視線を向ける。

「ああ、船を停めるためにターミナルに寄るはずだが……いかにせん、そこでは一般人も多すぎる」

「つまり、ターミナルに着く前に航路を予測して叩くしかねエってことだろ？」

土方が言えば、桂は満足げに頷く。

「その通りだ。さすがは真選組の頭脳だな」

「……いつもテメエには逃げられてたけどな」

「はっはっは、俺は逃げの小太郎だからな！」

「……なんじゃそら」

胸を張って高笑いする桂に、土方はガツクリと肩を落とす。

「萩から江戸までの航路か……經由地を考えれば、様々に考えられるが……」

久坂が言えば、それもそうだと頭脳派を自負する面々が唸り声をあげた。

「……ヤツが使うのは最短距離だろ」

そこに、ポツリと銀時が眩きを落とす。

「銀？」

「どうして、そう思うんじゃ？ 銀時」

高杉と坂本が首を捻る。

「……春雨から天導衆に桂と銀髪の侍の話が行って、天導衆がヤツにそれを知らせたらしいぜ。それで江戸に帰ってくることになつたみたいだし」

それは、夏霧からの情報だった。城から帰る際に貰った土産の中に紛れ込ませてあったために、見つけるのが遅くなってしまったのだ。

おそらく、城の中で口に出して言うには憚りははかがあったのだろう。

「じゃあ・・・ヤツが萩から江戸に戻って来るのは・・・」

「そ、向こうも俺を目的にして帰って来るってワケ」

「~~~~ツ!!なんでそれを早く言わねエんだ!!」

銀時が軽い調子で言えば、畳を叩いて高杉が叫んだ。

「・・・晋助？」

キョトリ、と目を瞬かせ銀時が首を傾げると、高杉はその胸ぐらを掴んだ。

「どうして、テメエはいつもそうなんだ!!それが一番重要じゃねエか!!ヤツはテメエを殺^ヤるつもりで来てるんだぞ!!なんでそんないつも通りみてエなツラしてんだ!!」

「あ、そうかア・・・向こうも準備万端なわけだ。奇襲ってわけにやいかねエか」

激昂する高杉を死んだ魚のような目で見つめ、銀時はのんびりと呟いた。

「そうじゃねエッ!!!!」

「まあまあ、落ち着けて〜晋助」

地団太踏みそんな勢いの高杉を、入江が銀時から引き離す。

「十一^{じゅういち}、けどなアッ!」

「わかってるってエ〜・・・でも、銀時に言っても見当外れな答えが返ってくるだけだぞ〜？今みたいに」

「そうだな、もう長い付き合いだ。お前だってわかっているだろう？」

「稔磨ツ・・・・・・・・チツ」

幼馴染みに諭されて、高杉は舌打ちした。

三つ子の魂百までとは言いが、いくら言っても自分の身を大切にしない銀時を腹立たしく思う。

松陽が亡くなって、唯一と言っても良い高杉の泣き所、それが銀時なのだ。

今回のことだって銀時が言い出したのでなければ、いくら六花の作戦があるうとも鬼兵隊だけを動かしていただろう。

銀時をナメているわけではない、銀時が強いことは充分わかっている。だが、心配なのだ。なにせ、相手は春雨の雑魚などではなく、あの男なのだから。

「え？ナニナニ？揃って銀さんはおバカさん発言ですかア？」

「・・・あはは、そ〜ゆ〜反応返ってくると思った〜。予想通り過ぎて腹立つ」

「まったく、昔から変わらんな、お前は・・・いい加減に俺も堪忍

袋の緒が切れそうだ」

「晋が怒るわけだな・・・そこに座れ銀、説教の時間だ」

「あつはつはつ！まっことに、変わっておらんのオ・・・ちつくとばあ殴らせてくれえ」

「・・・ハア、いくら言ってもわからんヤツだな。俺は止めんぞ」

幼馴染み＋の言葉に、銀時は口元を引き攣らせた。

「え・・・あの、ちょ・・・なんで皆そんなに殺気立ってんの!？」

「わかります、すつごくわかりますソレ。つか、僕にも殴らせるや、天パ」

「つたく、しよーがねー天パアル。手加減0%でぶん殴るのと全力100%でぶん殴るのどっちが良いアルか？」

「エエツ、新八くと神楽ちゃんまでツ!？・・・つか、神楽ちゃん!？それどっちも手加減なしだからね!!銀さんの選択権無しですか!？」

更には子ども達までそんなことを言い出して、銀時は焦ったように周りを見回す。

「旦那ア、愛されてやすねイ」

視線があつた沖田に、ニヤリと笑われる。

「どこが!？」

「・・・ハア、自覚なしかよ。俺より質がワリイな」

「あゝ、副長は自覚があつたんですね」

「トシも大概無茶をするが、銀時ほどじゃないよなア」

未だになぜ皆が怒っているのかわからない様子の銀時に、土方は溜息をつき、山崎は苦笑いをうかべる。そして、近藤から呆れた視線を向けられた。

「ちよ、誰か説明して・・・!」

そこで、一番最初に怒りだした高杉に銀時の視線が戻る。

「・・・心配してるこっちの身にもなりやがれ、このクソ天パ。攘夷戦争の時から自分を大切にしろって耳にたこができるくらいに言われてんだろが。何でもかんでも1人で背負いこみやがって」

いつだって仲間を守るために率先して先陣を切って行く銀時に、時には鉄拳を振るいながら幼馴染みが言い聞かせて来たというのにまったく理解されていないとはいかがなものか。

「あ・・・」

ようやく思い至ったのか、銀時はへにやりと力無い笑みをうかべた。

「銀、皆にごめんなさいは?」

久坂が苦笑をうかべながら言うと、銀時は困ったように眉を寄せながらも頭を下げた。

「ワリイ……つい、癖で」

「……癖かよ」

「悪癖ってのは治りにくいみたいだね」

謝る銀時に高杉が溜息交じりにツッコミを入れ、入江が呆れたように肩を竦めたのだった。

20・一計を案じる

「……あゝ、でさあ、最短距離でって言ったんだけどオ、それもちよつとしぼりにくいなアなんて思ったりしてるんだよね」

話を戻す銀時に生暖かい視線が向けられるが、銀時は死んだ魚のような目でそれらを受けとめ、曖昧な笑みをうかべた。

「……はア、ま、銀の言う通り、最短距離もいくつかのルートがあるな」

溜息をつきつつ久坂が告げる。

「全てに配置するだけの戦力は無い……いくつかに絞るしかないが……」

桂がそれに応じて持って来ていた地図を広げた。

「でしょ……だからさあ……ちよつとワナを仕掛けない？」

その言葉で幼馴染達はピンと来た。攘夷戦争中も何度も使ってきた手だったからだ。

舌の根も乾かぬうちに何という無茶を言い出すのか、コイツは。

そう言いたかったが、事実その手が一番有効であることは間違いなかった。

「・・・じゃあ、俺の出番ってワケだなア？」

くるり、とキセルを回し口に啜えながら高杉が問う。

「そ。春雨と“一応”協力関係にある鬼兵隊から情報を流して貰う」

「・・・まア、あのアホならともかく、ヤツなら上手くやるだろ」

「アホ？」

「ヤツ？」

一斉に首を傾げた幼馴染達に、高杉は一瞬戸惑った表情をうかべた。

「・・・春雨の元提督と、提督に嵌められそうになって返り討ちにしたガキのことだ」

ぼそり、と答えるものの、あまり突っ込んで聞かれない部分であるために視線は落とされている。

「ガキ・・・それって、夜兔アルカ？」

春雨「神威のイメージがある神楽がスツと視線を高杉に向けた。

その目を見て、高杉はパカリと口を開けた。

滅多にないというより、子どもの頃に何度か見たきりのそんな表情に、幼馴染達がどよめく。

「うっわ、晋助のあの顔、めっずらし〜」

「……明日は雪か？」

「相当驚いてるな、晋は」

「高杉？……どうした？」

桂が問いかけると、高杉は銀時に視線を向けた。

「……おい、この夜兔の娘……春雨第7師団の神威の肉親か？」

「……ってことは、晋助は第7師団とお付き合いしてる真っ最中
ってトコか。ますます吉原の姐ちゃん達は関わらせられねエな」

「おい！」

高杉が眉間に深くしわを寄せると、銀時は神楽に視線を向けた。

「……神楽」

「……大丈夫アル。片目……神威は私の実の兄貴ネ」

「ヤツは……」

そこまで言って、高杉は口を噤んだ。

彼が命を狙っている“侍”が銀時であることを知っている。が、それを先送りに行っているのは銀時の本来の力があんなものではないということに気付いているからだ。

だが、この戦いで銀時は本来の力を取り戻す。“雪月花”がその手に戻り、過去の愁いが一つ晴れたなら、宇宙最強の戦闘種族・夜鬼と1対1になっても良いトコロまで持ち込めるだろう。

そうなればきつと・・・そこまで考えて高杉は溜息を漏らした。

「まったく、テメエの気に入らねエ連中の売ったケン力をあちこちで安く買いやがって・・・」

「え、何ソレ。俺に言ってる？」

「たりめエだ、このクソ天パ・・・自覚あんだろっが」

「あゝ・・・いや、別に安くは買ってねエっていうか・・・逆に吉原みてエに得しちゃってる時もあったりとか・・・」

銀時がゴニヨゴニヨと言い訳めいたものを口にしていて、その隣にいた神楽が必死な様子で高杉を見つめた。

「・・・片目、神威は・・・」

「・・・そうそう簡単には死なねエだろ、テメエの兄貴は」

「べ、別に、心配してるわけじゃないネ!!どうせなら私の手であるのクソ兄貴に落とし前つけさせてやりたいだけヨ!!」

神楽が慌ててそう言えば、高杉はクツクツと笑った。

「ああ、そうかよ・・・じゃあ、テメエの兄貴にやそう伝えとくぜエ?」

「し、心配じゃないネ！それだけは勘違いすんなヨ！！」

「ああ、わかってる」

「・・・晋助、神威のこと気に入ってんだな」

ポツリ、と銀時が呟く。

「なんじゃあ、銀時？」

坂本がその呟きを耳で拾い問いかけると、いつもの曖昧な笑みをうかべて銀時は首を振る。

神威ともう一度巡り会った時、望もうが望むまいが命のやり取りになるであろうと神威と神楽の父である星海坊主からも言われていた。

「（ますます、やりにくいじゃねエか・・・つたく）」

「・・・あのー、俺達は話についてけてないんだけど・・・」

恐る恐るといった風に近藤が口を開くと、桂がああ、と声をあげた。

「すまん、戦争時は天人共相手によく使った手でな・・・つまり囮作戦だ」

「囮って・・・万事屋をか？」

じろり、と土方が銀時に視線を向ける。

つい先ほど怒られたばかりではなかったか、と。

「実際、囷にするわけではないからな・・・後は、高杉が春雨に情報を書き、春雨から天導衆、ヤツといった具合に流れれば御の字だ」

「そんなにうまく行くもんか？」

「・・・神威は俺に借りがある。訝しんでもそれなりには手を貸すだろうよ」

高杉が土方の戸惑うような視線を受けて答えると、沖田が目を細めた。

「へえ・・・チャイナの兄貴を随分と信用してるみてエじゃねエですかい・・・一体、どんなヤツなんでイ？」

「・・・ただの戦闘狂だ。まあ、多少はポリシーがあるみてエだがな」

短く答えると、高杉は立ち上がる。

「高杉・・・」

桂が名を呼ぶと、高杉はガシガシと頭を掻きながら答えた。

「・・・船に戻る。あっちと連絡がついたらツラに報告すればいいな？」

「ああ・・・というか、ツラじゃない。桂だ！」

お決まりのセリフにクツリと笑い、高杉はその場を後にする。

「晋助、やっぱり変わったな〜・・・昔はああじゃなかったんだけど〜」

「しょうがないさ・・・戦争終了後、残党狩りで一番酷い目に遭ったのが晋の鬼兵隊だからな・・・」

入江と久坂が高杉の背中を見送りながらそう言えば、銀時は視線を落とした。

「・・・アイツの中じゃ、未だに幕府への怨嗟の念が消えねえんだ。先生を邪魔者扱いしたのも、俺達を見捨て残党狩りなんてのをやりだしたのも、天導衆に膝を折った幕府の連中だからな」

もし、幕府が松陽の先見の明を認めていたなら、今頃は天人に支配されるのではなく対等な関係を築けたのではないかと今更ながらに思う。

「なあ、銀時」

「ん？なんだよ、局長さん」

「・・・保科様達の方は放っておいていいのか？昨日屯所に帰ったら、向こうに付かせた隊士達がやたらと血気盛んになってなア・・・」

「・・・へ、へエ〜」

たたり、と頬を汗が伝う。暑いわけではない。嫌な予感がヒシヒシとするのだ。

「そうですぜい、旦那ア。ヤツ等・・・保科様に何を吹き込まれたんだか、今にも人を斬り殺しそうなくれエに殺気立ってやしたぜい」

「二言目には“旦那のため”だ。・・・テメエの部下はウチの部下に何を吹き込みやがったんだ？」

近藤に続いて沖田や土方までそんなことを言うので、それが夏霧の仕業であると確信した銀時は、苦笑をうかべて頭を下げた。

「あー、悪かった。つか、アイツは人の心を操るのが上手いんだよ。4人の中じゃ剣の腕も口も断トツで達者でさあ・・・アイツと春霞が組んじまつたら俺でも手エ付けられねエし・・・まあ、悪い様にはしねエよ、多分」

「多分て何だ、多分てエツ!!!」

「えー、銀さんわかんない」

「わかんない・・・じゃねええええええ!!!」

思いつきり誤魔化そうとした銀時に土方が掴みかかり、その場は再び賑やかになる。

「ふふっ・・・真選組の副長さんって、ホントに銀時に気に入られてんだねエ」

「本人にとってはハタ迷惑だろうけどな」

入江と古田の言葉に、他の真選組の面子は思わず苦笑をつかべたの
だった。

21・言わぬは言つに優る(前書き)

久々の投稿です。

待っていて下さった方、投降しなかった間にも感想を下さった方、本当にありがとうございます！

21・言わぬは言ひに優る

「・・・そう、ありがとう。また、動きがあつたら教えて」

相手からは、と返ってくると、氷柱は携帯電話を閉じた。

「どうだった？」

「うん、銀時様の方は上手くいってるみたい。晋助様が春雨に情報を流して上手くヤツをおびき寄せられるみたいよ」

訊ねた水澄みすみに答えると、氷柱は視線を落とす。

「氷柱？」

「・・・銀時様に怒られるわね、きつと・・・」

「あゝ・・・だろつなア」

いくら銀時のためとはいえ、彼に黙ってこんな大規模な作戦を行うのは初めてだ。全てが終わった後、きつと銀時はすごく怒るだろうとわかっているからこそ気が重い。

「2人とも、こんなところにいたのか」

そこに、軽装に着替えた夏霧なつきりがやって来る。

「春霞しゅんかは？」

水澄の問いに、夏霧は肩を竦めた。

「情報収集。石橋を叩いて渡るくらいに慎重にいかないとな」

「そうか、そうだよな・・・相手は“天導衆”だもんなあ」

「・・・ねえ、夏霧・・・絶対に死人は出ないわよね？」

「ああ・・・出すわけにはいかない。銀時様の心の安寧のために犠牲を出すなど本末転倒だ。・・・万が一にでも犠牲が出たらあの方にはご自分を責めてしまう」

ちやらんぼらんなようできて、いろいろと自分の中に抱え込む癖のある銀時のことを熟知しているからこそその夏霧の言葉に、水澄と氷柱はコクリと頷いた。

「ようやく、銀時様にご恩返しのお機会がやって来たんだ。・・・絶対に勝つ」

「ああ！」

「もちろんよ！」

3人ともに決意を新たに頷きあつたのだが、一つ忘れていたことがあつた。

「・・・3人とも、私を除け者にするとはいい度胸じゃありませんか」

ちょうど戻って来た春霞にジロリと睨まれて、3人は竦み上がった。

「しゅ、春霞……ちょ、違っつて……」

水澄が慌てて言えば、春霞は目を細めて口元だけに笑みをうかべた。

「何が違うんです？言い訳は結構ですよ、どうせ私はあなた方にとつてはその程度の存在なのでしょう」

「うぁ……でた……ブラック春霞……」

ネガティブで皮肉たっぷりな春霞の言葉に、水澄は思わず身震いする。

「ほらほら春霞、そう拗ねないで……今回の作戦は春霞がいなければ成り立たないんだからな」

「……わかってるじゃないですか」

なだめにかかった夏霧に春霞は恨めしげな視線を向ける。

「当然。俺は今回の総大将だからな……真選組の面々もだいたい使えるようだし、やっぱり実践向きの腕を持った人間がいると楽だな」

「確かにそうね、真選組は幕府側に残された唯一の“侍”という存在なのかも」

夏霧の言葉に氷柱が頷く。

「“侍”か・・・そうだな。銀時様がお気に召されるわけだよな」
クツリ、と春霞が笑う。

ようやく機嫌を直してくれたらしい春霞にホツとしながら、六花の面々は今後の作戦について詰め作業に入った。

「で、真選組は表向きの部分で動いてもらうんだろう?」

水澄が問えば、夏霧は頷く。

「ああ、彼らに責任を取らされるようなコトをさせるわけにはいかないからな」

「真選組は目立つしね」

「確かに」。でも、一番目立つ3人が銀時様の方にいるんだったら、そんなに目立たないんじゃない?」

「何言ってるんだ、水澄。あの3人が居なくなっただって目立つだろうが」

「・・・春霞の言う通りね。あの人達、風体が目立つのよ。あの揃いの制服といい、ハチャメチャな行動といい・・・トップが“ああ”だからそうなるのかは知らないけれど・・・でも、陽動ようどうにはもってこいよね」

「そう言うことだ。・・・その間に、俺達は“天導衆”を討つ」

「銀時様の愁いが、それで晴れるんだよな?」

夏霧に水澄が問う。

疑問というよりも確認に近いそれに、夏霧は頷いた。

「・・・ああ。大きな顔で道のど真ん中を闊歩かつぽする天人共も“天導衆”がいなくなれば少しは大人しくなるだろう。・・・何よりも“白夜叉”をつけ狙うヤツ等が居なくなる」

それが、重要なのだと夏霧は呟くように言う。

「やっと、銀時様が得た“家族”に手を出させるわけにはいかないしな」

「・・・神楽ちゃんと新八君か。きっと銀時様の心の支えになってるんだろうな」

「私達には無理ね。・・・あの戦いの記憶をよみがえらせてしまうのが関の山・・・あの子達が羨ましいわ」

「まあ、いいさ。俺達が望むのはあの方の幸せだけ。・・・そのためなら、どんなことだってするのが【六花】だろ？」

決して、銀時にそれを告げることは無いけれど。

「そういうことね」

氷柱が苦笑して頷く。夏霧の考えそうなことは良くわかっているのだろう。

【六花】の名を頂く自分達は運命共同体のようなものだった。銀時に拾われてからは同じ釜の飯を喰らい、何をする時だって一緒だった。

だから、お互いにどんなことを考えているのか言わなくてもわかる。

銀時はそんな自分達を村塾時代の己達に重ねている節があつて、時々懐かしそうな、それでいて寂しそうな表情で見ることがあつた。

そんな時は決まって高杉が絡んで、その安っぽいケンカを銀時が買って、桂がそれ以上の剣幕で収めようとして、村塾時代からの仲間達が煽ったり止めたり……。

戦いの中のわずかなひと時だったけれど、確かに楽しかったと言える思い出がある。

自分達にはそれだけで充分だった。

万事屋の子ども達のような関係を望んでいなかったわけではない。

だが、それは叶わない夢だと知っているから、その思い出だけを胸に秘めて銀時の幸せの邪魔をする者を斬り捨てる。

【六花】にはそれしかできないから。

「……さて、じゃあ計画を真選組の面々に伝えてくるとしよう。
・城内は上様と松平殿が押さえてくれているから安心して任せられるし」

「行こう、これで全てを終わらせるんだ」

「「「ああ（ええ）！」」」

全ては、あの方のために。

22・寄（よ）らば大樹（たいじゅ）の陰（かげ）っていつじゃねエか

「・・・まったく・・・久々に帰って来てみりゃ、またあのあんちやんは厄介事を抱え込んでやがるのか」

呆れてものが言えないと言わんばかりの男の声音に、女は思わず苦笑した。

「しょうがないじゃないか、それがアイツなんだよ」

「だからってよオ・・・まったく、借りっぱなしってのは性に合わねエんだよ、お前からあんちゃんに言ってやれよ。たまには頼れって」

「と言って頼って来る程素直な奴なら最初から苦労はしないさね」

「・・・アイツは知ってんのか？」

「さてねエ。でも情報は入って来てるんじゃないかい？」

女が肩を竦めた時だった。

ガラリと戸が開く音がして、ガツクリと肩を落とした娘が入ってくる。

「おう、どうだった？」

「・・・アニキ達は留守でした・・・っていうか、お隣さん

に聞いたら、今朝方、真選組と一緒にどこかに行ったって……」

「タイミングが悪かったな……そんなしよげるなよ、平子」

「オヤジ……」

銀時に関わって更生（？）した人間というのは、どうしてこうも人が変わったかのようになってしまうのか。

殺し合いをしている時ですら笑顔を崩さなかった平子が、しよぼくれた表情をうかべている。

「……まったく、銀時のヤツ。アタシらに何の相談も無しに妙なことばかり背負いこみやがって」

「まあ、あのあんちゃんらしいじゃねエか」

溜息交じりにぼやいたお登勢に、次郎長はクツリと笑う。

「そりゃそうなんだろうけどねエ……アイツを心配する連中が煩くて敵わないよ」

かくいうお登勢自身も銀時のことが心配でたまらないといったようすを隠しきれていない。

そんなお登勢の顔を見やり、次郎長は席を立った。

「……さて、じゃああんちゃんを探しに行ってくるかねエ……騒ぎのあるトコにゃ、大体あのあんちゃんがいるだろ」

「クク・・・違くないねエ」

「じゃあ、行くぜ。・・・達者でな」

「ああ、アンタもね・・・また、娘連れてきな。安酒で良けりゃた
んまり飲ませてやるよ」

「・・・そりゃ、楽しみだ」

素直じゃない大人達の別れの言葉を黙って聞いていた平子は、お登
勢に軽く会釈をして次郎長の後に続いて店を出た。

「・・・で、オヤジ・・・どうやってアニキ達を探すんですか？」

「そうだな・・・まずは、ヤツのトコに行ってみるか」

それが誰を指すのかなんとなくわかってしまった平子は、思わず苦
笑をうかべた。

かまっ娘倶楽部

開店前、店のドアの開かれる音に振り返った西郷は、スウ、と目を
細める。

「・・・あらん、久しぶりじゃないの」

「おう、元気そうだな」

平子を伴って店の中に入って来た次郎長に、西郷はクツリと笑う。

「まあね・・・娘とは仲良くやってるの？」

「まあな」

「そう・・・で、ウチには何の用？お酒を飲みたいならまだ開店前よ、出直して来て頂戴」

西郷の言葉に、次郎長は口の端をあげる。

「わかってんだろ？オイラがここに来た理由くれエよ？」

「・・・パー子のことね？」

西郷は溜息をつく。

「残念だけど、何かが起こっているってことくらいはわからないわ。・・・ああ、でも・・・幕府の動きがきな臭いわね。どうも真選組を動かして妙な事をしているのよ」

「妙な事？」

「ええ、何でも対テロ対策だとかで、ターミナルを一時停止させるとか何とか・・・」

「・・・テロ、ねエ？」

「でも、昔の知り合いとかに聞いても、そんな犯行予告を出した連中はいないそうよ」

「テメエのトコでもそれじゃあ、ウチの連中もろくに知らねえと見て良さそうだな」

次郎長が言えば、西郷は目を軽く瞞った。

「アンタ、自分の組に顔出してないのかい？」

「・・・もう、引退した身で全部勝男に任せてんだ。今更のこのことオヤジ面して顔出せねえだろ」

「まあ、そうだろうけどねえ・・・ああ、そうだ。パー子のことならヅラ子に聞くのが良いかもしれないわね」

「ヅラ子だア？」

「知らない？・・・桂小太郎」

「・・・ああ、今じゃすっかり大人しいようだが、一時は爆破テロなんかをよく企てていた、後輩じゃねエか」

「なんだか、パー子とヅラ子は仲良いらしくてねエ・・・同じ戦場で戦っていたからかしらねエ」

「そういや、“狂乱の貴公子”桂と“鬼兵隊”の高杉と今や“快援隊”の社長である坂本ってのは、“白夜叉”と同じ戦場にいたって話だったな」

「……“白夜叉”ねえ……そんな大層な二つ名付くようなヤツに見えないんだけど」

「まあ、普段の様子を見りやな……だが、一度剣を抜きゃあ、ありや化けモンだぞ」

「……アンタに言われたくないだろうけどねエ」

華陀率いる辰羅族の部隊を2人であっさりと片付けたと聞いた時は、笑いが止まらなかった。心配したこっちがバカだった、と。

「オイラももう歳だ。……若い連中の体力には付いてけねエよ」

「よく言うよ、まったく……で、パー子のことを調べてどうするつもり？」

「……借りを返す。それだけだ」

「ナルホドね……まあ、ワタシもパー子には借りがあるし……一緒にツラ子のところに行ってあげても良いわよ」

ニヤリと笑った西郷に、次郎長もニヤリと笑う。

「……おう、頼むぜ」

「……………」（アニキに借り返すって顔じゃないです）

思わず心の内でぼやいた平子は、今頃くしゃみでもしてるんじゃないかろつかと苦笑いをうかべた。

吉原桃源郷

「ぶえつくし!!」

「・・・大丈夫か？銀時」

大きなくしゃみをした銀時に、桂は眉を顰める。

「風邪などひいてはおるまいな？作戦は明日なのだぞ？」

「うう・・・風邪なんてひいてねえよ・・・こりゃ、アレだ。噂だ
噂」

「噂？」

「そうそう・・・なんかゾクツときたし」

「いや、それは風邪の初期症状ではないのか？」

「だから風邪じゃねえって」

「おい、久坂、銀時を診てやってくれ」

幼馴染が医者で良かったと思う瞬間だ。しかも、久坂は銀時の扱いに慣れている。

「あいよ・・・ほおら、銀。口をおーきく開けてえ？」

「だからイイって・・・ちょ・・・まつ・・・んが！」

じりじりとにじり寄った久坂に押さえつけられ、銀時は顎を掴まれ
て無理矢理口を開かされた。

「・・・ん、銀の言う通り風邪じゃないな。喉も綺麗なモンだし
・・・心当たりでもあるのか？」

「いやあ・・・ありすぎるくらい？」

てへツと笑う銀時に、久坂は苦笑する。

「昔のお前はどつちかかっていうと俺達とばかりつるんで、他の連中
とは一線引いてた節があつたんだがなア」

「今や逆だもんねエ、・・・やっぱり、大人になつたんだよね、
俺達って」

なんでもかんでも抱え込んで困る。そう六花の面子に言われるくら
いに人との関わりを断とうとしない銀時に、安心するのと同時に困
惑する。

幼い頃は人嫌いな面があり松陽にしか懐かず、自分達と仲良くなっ
てからも、本当に自分が信頼するに値すると認められた者以外には徹底
して警戒心を崩さなかった。

そんな銀時が誰も彼もを抱え込んで面倒をみているなどと聞かされ
ても、幼馴染達にはピンとこない。

「あー、思春期だったんだってエ・・・」

へらへらと笑う銀時に、幼馴染達は何とも言えない表情をつかべた。

23・武士は相身(あいみ)互(たが)い

「・・・ね、銀ちゃん・・・そろそろかぶき町に帰ろうヨ？」

神楽が銀時の傍に寄って来てべったりとひつつく。

どうやら、幼馴染とばかり話す銀時が面白くないらしい。

「あ？ああ・・・そうだな・・・ババアにもしばらく家を空けることを言っとかなきゃならねーしな」

「あ、そうだ。姉上にも言っておかなきゃ・・・」

お登勢のことで思い出したのか、新八が呟く。

「そうか、妙にも言っとかなきゃならねえか・・・あー、でもなー」
毎度毎度、騒ぎが起こる度に心配をさせているが、今回は事が事だけになかなか言い難い。

「・・・言っておいた方が良さぞ。後から知られて怒られるよりはマシだろう？」

桂が言えば、銀時は口元を引き攣らせた。

「あー・・・まあ、そうだよなア。アイツ、後が怖エんだよなア」

紅桜の件の時のことを思い出し身震いする銀時に、神楽と新八は苦

笑する。

その時、桂の携帯電話が着信を告げる。

「ん……なんだ？」

電話に出ると、部下が焦ったように事情を告げる。

なんだか、部下の背後も騒がしい。

「……………そうか、わかった。すぐに戻る」

桂は大体の事情を聞くとすぐに通話を終えた。

「銀時……招かれざる客が来たようだ……」

「招かれざる客？」

この状況で桂を訊ねてくる客などいるのだろうか？と、その場にいる面々を見回す銀時。

「……………西郷殿と他に2人、親子連れの客だそうだ」

「西郷オ？……なんでアイツが……ん？親子？」

なんだかその組み合わせ、どっかで聞いたことないだろうか。

「……あのオカマの知り合いの親子って、なんか嫌々な記憶と共に思い浮かぶアル」

「奇遇だなア、神楽。俺もだ・・・」

「僕もです」

「・・・なんだっけ、ホラ、アレだよアレ、ちんぴら〜的な？」

「・・・ていうか、お花、頭に咲いてんじゃね？的なヤツですよね？」

「「「・・・」」」

もう、3人の頭の中にはある人物の顔がハッキリと思い浮かべられていた。

「・・・どうしたのだ？」

桂が不思議そうに問うてくるが、説明するのも面倒なほどに厄介な事件だったため3人は黙って首を振った。

「・・・では、行くぞ？」

「じゃ、俺等も一緒に行くか。な？」

「そうだな、銀がここまで動揺する客っていうのも見てみたいしな」

「確かに」

「・・・くそ、オメエら他人事だと思って・・・！」

悔しそうに呟く銀時を引き摺りながら、桂達が部屋を出て行く。

「・・・俺達も帰るか」

「ですねイ」

「・・・山崎、アイツら追え」

「え！・・・わ、わかりました・・・副長」

真選組もそれぞれに動き出し、作戦会議はグダグダな感じで終わったのだった。

桂一派のアジト

「あ！アニキ！！！」

ブンブンと己を視界に入れると満面の笑みで手を振る若い女。

「よう、あんちゃん。また妙なことに首を突っ込んでるらしいな」

ニヤリと笑いながら、こちらを流し見る壮年の男。

「・・・あー・・・なんで、こんな時に限って面倒事が一気にやって来るかねエ」

ぼやかずにはいられない心境で思わず溜息交じりに漏らし、銀時は桂に視線を向けた。

「ワリイ、俺の知り合いだわ」

「・・・だろうとは思ってたがな。というか、有名人ではないか」

「うん、ちょー有名人。つか、かぶき町に出入りした人間なら、大体は知ってるようなジジイだしな」

泥水次郎長といえば、かぶき町ではかなりの有名人だ。なにせ、かぶき町四天王とまで言われた男なのだから。

「で・・・おたくら、何の用？俺達ちょーっと忙しいんだよねえ？」

とりあえず巻き込むわけにはいくまいと銀時が口を開けば、次郎長や平子、西郷にギロリと睨まれた。

「アニキ、酷いです・・・恩返しもさせてくれないんですかあ？」

「あんちゃん、今、首突っ込んでるヤマは、オイラ達にも少しは関係あるんじゃないかねエのかい？」

「パー子、ツラ子、水臭い真似すんじゃないよ」

「うわ・・・なんか知ってるっぽい？」

「さすがに、耳が早いな・・・」

銀時と桂が思わず口元を引き攣らせると、その背後から久坂がその間に割り込んで2人の肩を抱いた。

「イイじゃないか、銀、小太郎・・・手伝ってもらおう。攘夷の大先輩達に、な？」

バチリ、と不器用にウインクした久坂にはどうやら考えがあるようで、銀時と桂は渋々ながら頷いた。

「よし、じゃあ・・・まるっと吐いて貰うぜエ？あんちゃん」

「ちゃっちゃと吐きなさい、パー子、ツラ子」

手助けというよりも、最早脅迫に近いのではなからうか。

そんなことを思いながらも、銀時と桂は洗いざらい白状させられる。

「チツ、そういうことだったのか・・・じゃあ、同じ部隊にバカ強エのが揃ってたのも、偶然じゃねエつつうことか・・・」

「アンタも大層な理由持って、攘夷戦争に参加してたのねエ」

眉根を寄せる次郎長と、しみじみと呟く西郷。

「・・・つたく、無理矢理吐かせるとか・・・このクソジジイ」

「こ、怖かった・・・むしろ、西郷殿のどアップが怖かった！！」

少々顔色が悪い2人に苦笑を浮かべつつ、久坂が次郎長と西郷の前に立つ。

「……まあ、事情もわかってもらつたところで……先輩方には別部隊を手伝ってもらいましょうかね？」

「「？」」

「そそ、本隊の方は結構人数足りちゃってるんですよ」

「先輩方のお気持ちは嬉しいが、これ以上の人員は逆に混乱の元となりかねない」

「……というわけで、別部隊の方へ連絡をとりましたから、よろしく願いますねー？」

何というか、さすが“オの久坂”と言われるだけはあるな、と思いました。……あれ、作文？

「……玄ちゃん、いつの間に」

「まあ、お前等が白状してる間に……今、迎えが来ると思うよ？」

ニコニコと答えてくれる幼馴染が、ちょっと怖いな、と思つた銀時だった。

ほどなくして、アジトに六花が一人、水澄がやって来た。

「銀時様！」

銀時の顔を見るなり表情を輝かせた水澄に、銀時は苦笑をうかべた。

「まったく、オメエは本当に“もぐり”は任せられねエなあ・・・
こつも表情に出ちまうんじゃ」

「あ、す、すいません！」

「まあ、いいさ・・・どうせ、今回で“ケリ”はつくんだろ？」

銀時の問いに、水澄はギクリと肩を跳ね上げさせた。

「・・・水澄」

「す、すみません！！えっと、こちらの方達を俺達の部隊に組み込
めばいいんですよね！！」

桂が問い質そうとした時、水澄は慌てて次郎長や平子、西郷の傍に
走り寄る。

「えっと、とりあえず詳しい説明は、あちらで・・・！」

余程、春霞と夏霧に脅されてきたらしいと悟ると、六花を知るメン
バーは思わず苦笑をうかべた。

「まったく、アイツらも容赦ねエからな・・・」

それもこれも、銀時の影響を受けまくったせいなのだが、当人には
その自覚は無いらしい。

「……ま、銀時を手本にしてるからね」

「は？それどーいう意味だよ、十一？」

「ん〜、まあ、銀時はわかんなくていいと思うよ〜？」

自覚された日には、ますます銀時色に染められる連中が出てきそう
で怖い。

「……先生も、怒ったら怖かったもんな〜」

銀時の目的を達成するためには手段を選ばないやり方は、間違いな
く松陽直伝のものだ。

つまりは、もとをただ糺せば、元凶は自分達の師である松陽だ。

「まあ、先生の話はともかくとして、銀にもそれなりの素質があっ
たんだろ」

「……結構、いじられてた記憶があるな、主に晋助が」

「ああ、そうだな……よく、自分から絡まれに行っていたな、主
に晋助が」

「晋は、銀が大好きだからなあ」

「それ、本人達に言ったらブツ飛ばされるよ〜」

話をその一言でまとめた久坂に、入江が苦笑をうかべながらツッコ

ミを入れたのだった。

24・韓信の股くぐり(前書き)

今回は短いです。。。

24・韓信の股くぐり

「・・・無差別テロ？」

暗い議場の真ん中に立ち、夏霧は問いかけてきた男に頷いて見せた。

「はい。狙いは皆様方とターミナルであるかと・・・今現在、真選組を警護につけさせておりますが、それだけでは心許ないと思いついて、こうして報告を・・・」

「ほう・・・殊勝な言葉じゃな、保科。己の無力さを良くわかっておる。人間とはかくも弱きものゆえなあ？」

「・・・は。皆様の御加護があつてこそその我等と心得ております」

深々と頭を垂れ、夏霧はそう告げる。

「しかし、ターミナルの一時停止とは・・・また、随分と思いきつた真似をするな。根回しは済んでおるのか？」

「はい。各大使館には既に伝達済みです。・・・ですが、最終判断は皆様方にお許しを頂いてからと思ひまして」

「ククク・・・そうかそうか。やはり幕府のコトはお主に任せて正解だったなあ、保科。これからも、ワシらに尽くせよ」

「もちろんでございます・・・天導衆の皆様方には衷心より忠誠をお誓い申し上げます」

頭を下げたままそう告げる夏霧に、天導衆は機嫌良く頷いた。

「よしよし、よかるう。お主の好きにすればよい。……幕府の威信をかけて、ターミナルと我等を守るのだぞ」

「かしこまりました、ございます」

今のうちに、支配している気分には浸っていればよい。その首が繋がっている間は、気持ち良くいさせてやる。

そうして油断を誘う。それが夏霧の当初からの計画だった。

この程度の屈辱、あの方の苦しみと絶望に比べればなんてことはない。

笑顔の裏に本心を隠し、来るべき日を待つ。

次に会う時は、貴様等の表情を恐怖一色に染め上げてやるう。

機は熟した。

25. なぶれば兎も食いつくつてのは彼等の口ト

水澄に案内されて次郎長達がやって来たのは、城にほど近い豪華な屋敷だった。

「……はわく……おつきいです」

平子が思わず感想を漏らすと、水澄はクツリと笑った。

「まあ、幕僚の屋敷ですからね……あ、こっちですよ」

フラフラと庭の方へと行こうとした平子の手をとって逆の方向を指す。

「そちらにはいかないください。血気盛んな真選組の皆さんの拠点を作つてあるので」

「……あ、え？そんなんですか？お庭も見てみたのに」
手を引かれながら残念そうに平子が呟く。

「全てが終わつたら、好きなだけご覧になってください。銀時様のお知り合いなら、いつでも大歓迎ですよ」

ちらりと平子に視線をやつた水澄は、ニコリと笑つてそう告げる。

「……悪いねエ、ウチの娘がワガママ言つて」

次郎長が苦笑する。

「いえ、気になさらないください。愛でるための庭なんですから、家人だけで楽しむなんてもつたないでしょう？」

真選組の拠点を庭の見える部屋に作ったのは、ただ単にそこが一番広い部屋だったからだ。

「真選組は一部隊借りているので、広い部屋が必要だったんですよ。・・・お3人はこちらの部屋で待機して頂けますか？」

水澄が案内したのは、屋敷の奥の座敷。

「・・・す、すごいわねエ・・・」

さすがの西郷も息を呑む。

座敷に置かれた数々の調度品は素人目にも高価なものだとわかる。

「ああ、それは天導衆からの貰いものですね。タダでくれるならっ
て受け取ってきたは良いですけど、気分が悪くなるから自分の部屋
に置く気にはならないって夏霧が・・・」

「そ、相当嫌ってるのねエ、天導衆のコト」

「ええ、大ツツツツ嫌いです。銀時様の命を付け狙うなんて・・・
しかも、存在自体が危険だと認定するなんて、許せません。銀時様
はただ、静かに暮らしたいだけなのに」

水澄の目に憎悪の色がうかぶ。

命を救われたからだけではない、生きる意味を、術を、自分達に与えてくれた銀時を心の底から想っているからこそ、天導衆が憎いだ。

「・・・水澄、帰ったの？」

「あ、氷柱・・・って、ナニその格好？」

ひよこりと廊下から顔をのぞかせた氷柱を見て、水澄は首を傾げた。

「え？遊女？」

「・・・なんで疑問形？」

「なんか、夏霧にこれに着替えろって言われて・・・っていうか、吉原の人達を春霞が連れて来て・・・」

「ええ！？・・・銀時様が関わらせないようにしてたのに!？」

「そうなの・・・でも、危険な目には遭わせられないわよね？銀時様の大切な方々だもの」

「そりゃそうだよ！春霞も夏霧も、ナニ考えてんだよ!!」

「ナニ考えてるって言われましてもね・・・」

氷柱と水澄が頭を抱えていると、そこに春霞がやってくる。

「春霞！・・・おまえなア！」

「銀時様に世話になってるから、どうしても手伝いたいって・・・
そう言われましてね、ちょっとしたお手伝いを頼もうと思ったんで
すよ。・・・少々、危険ではありますが・・・氷柱がいれば大丈夫
でしょう?」

笑顔でそう告げる春霞は確信犯である。

「・・・そう言われたら、頑張らなくちゃって思うじゃない。・・・
もう!」

ぷくつと頬を膨らませ、氷柱はくるりと向きを変えた。

「氷柱」

「わかってます!・・・貴方の計画に文句はないわ。それに、潜入
は私が一番得意とするところだもの」

俗に言う“色”の仕事。銀時は嫌がったが、相手が一番油断する方
法なのは確かだ。

戦時中も幼いながらも整った顔をしていた氷柱はそうやって相手の
油断を誘い、眠り薬入りの酒を飲ませて相手を始末することなど
しょっちゅうだった。

「・・・氷柱を使うってコトは、相手は・・・」

「天導衆に決まっているでしょう?・・・引きこもっている間の余
興として吉原の女を呼んだと言えば、簡単に信じますよ」

それが奴等の信頼の厚い夏霧の紹介であるならば確実に。

「でも、眠り薬は危険だぞ？味の变化に気付くヤツもいるだろうし」

水澄の言葉に、春霞は頷く。

「もちろん、いくら無味無臭でも高級な酒に混ぜればすぐにバレてしまいますからね。もっと別の方法でいきますよ」

ニイ、と口の端をあげて笑う春霞に水澄は肩を竦めた。

「お前のその顔すっごい久しぶりに見るな・・・天導衆もホント、バカだよなア・・・銀時様に目をつけたりしなければ、楽に死ねたものを」

「まったくだな」

「そうね」

水澄の言葉に平然と、顔色一つ変えずに頷く春霞と氷柱。

「・・・おいおい・・・あんちゃんの部下はやたらと過激だな」

「ホント・・・まだアタシ等なんて可愛げのある方じゃないの・・・」

攘夷戦争末期を戦いきった者というのは、初期の乱戦とはまた違った苦勞があったのだろう。

幕府から見放されて何のために戦っているのかすらわからない。拳
句の果てには廃刀令で武器も取り上げられ、残党狩りまでされたの
だ。

そんな中で命を預けられる指令官がいたならば、確かにここまで入
れ込むのもわからなくもない。

が、それだけではない何かが彼等からは感じられる。

銀時が己の恩師の為に刀を取って戦ったと告げた、その目と同じ魂
をもった目。

「アニキは愛されていますね・・・」

平子の言葉に、次郎長と西郷はああ、と声をあげた。

「そうか、愛情・・・か」

「忠誠、信頼・・・どれも当てはまらないと思ってたけど、愛情ね。
ナルホド、そういうことか」

愛情、その一言に尽きる。

それも、命を捧げんばかりに銀時^{かれ}だけに向けられた深い愛情だ。

家族のそれとも恋人のそれとも違う、別次元の愛情。

時にそれは重すぎると相手をも呑み込んでしまいかねないが、銀時
自身もまた恩師に深い愛情を捧げているからこそわかるのだろう。

「六花は……銀時様のためだけに作られた部隊です」

いつの間にか氷柱が目の前に来ていたことに気付いて、次郎長は背筋に冷たいものが走るのを感じた。

目の前にいるというのに気配が全く感じられないのだ。

「この嬢ちゃんデキる。」

「銀時様の心をお守りするためだけに六花は存在します。戦時中、銀時様は1人の部下も持たず、攘夷志士達の先陣を切って敵に斬り込んで行った。あの方の背に着いて行きさえすれば自分達は勝てる。そう皆に思わせる何かがあった。……ではあの方の心は誰が支えるのでしょうか?」

氷柱の言葉に、西郷はハッとする。

先陣を切る者の役目は、後から付いてくる者達を怯ませないことだ。一度がむしやらに突っ込んで行けば怯んで相手に斬られるという確率がぐんと減る。

戦略の1つでもあるそれは、実力のある者が選ばれる。先陣を切る者がアツサリとやられたら本末転倒だからだ。

ならば、その者の心は誰が支えるのか。

「銀時様には幼馴染の方々がいらっしやいました。でも……あの方々もまた、心のどこかで銀時様を支えにしていたのです」

幼い頃からその強さを目にしていたからこそ尚更に。勝って当然、

強くて当然。そんな気持ちが銀時に向けられていた。

静かに告げる春霞に、次郎長達は頷く。

「だから、俺達が・・・適度に銀時様の足を引っ張ってふと立ち止まる時間を作っていたんです」

じゃないと、銀時は心を殺してただ真っ直ぐに敵陣に斬り込んで行く“道具”と化していただろうから。

桂もそれを心配して、六花を作る際に根気よく銀時を説得してくれた。

拾ってきたのならば最後まで面倒を見る、と。

その時から、六花は銀時のためだけにあっただ。

「・・・天導衆は、銀時様をただ殺そうとしているわけではありませんせん」

背後からの声に、次郎長達はハツとして振り返る。

「夏霧」

氷柱が心配そうにその蒼白の顔を見つめる。

「・・・もう少して、刀を抜くところだった」

告げる夏霧の手が白くなるほどに握られているのに気付いて、氷柱はその手をとる。

「何が、あつたの？」

「いつものことだ。天導衆に忠誠を誓うと頭を下げただけだよ。・
・ただ、少し・・・我慢するのが辛い」

銀時のためを思いこれだけの人間が動いてくれるという心強さ。もう少して天導衆に引導を渡せるといふ思いから気持ち逸り、怒りに任せて叩き斬ってしまいそうだった。

「夏霧・・・少し部屋で休んで来いよ。この方達には俺達から説明しておくから」

見兼ねた水澄が言えば、夏霧はコクリと頷いた。

「・・・ああ・・・頼む。すみません、本当は私が説明しなければならぬのですが、今は冷静に説明できる自信がないので・・・」

「あ、ああ・・・構わねエよ」

頷く次郎長に微笑して見せ、夏霧は氷柱に付き添われてその場から去る。

「・・・大丈夫なの？」

「氷柱がついてますから、大丈夫ですよ・・・天導衆の一番近くに侍っているので、ストレスも多いんです」

西郷が心配そうに見送ると、春霞が苦笑する。

「そうかい・・・じゃあ、聞かせてもらおうか。あんちゃん達が動く後ろで、オメエさん達が何をしようとしているのか、な?」

次郎長の鋭い眼光もやんわりと受け流し、春霞はニコリと笑った。

「・・・・・・・・大したことじゃ、ありませんよ」

26・過去――夏霧

今でこそ思い出として語れるが、当時はその日を生きるだけで精一杯だった。

天人の軍勢が集落を、村を、どんどんと侵略し略奪しペンペン草も生えないほどに荒らしていく。

人心は荒れ、田畑を耕す気力さえも失い、ただ、死による安寧^{あんない}を望む者さえいた。

集落を治めていた父。集落の者達から慕われていた母。若様と呼ばれていた自分。

天人はそれらすべてを奪い去り、己一人がその集落に残された。

頼れる親戚は江戸にいるが、子どもも足でこの戦乱続く世に旅をするなどとんでもないことだった。

わずかに残る食料と水。それらで命を長らえさせながらも、なぜ自分は生きているのだろうと自問する。

徐々に蓄えは無くなり、腹が減れば草の根すらも口にし、喉が乾けば雨水を溜めた碗を乾す。いつそ死ねれば楽だろうと思いつながらも“生”にしがみつくの止められない。

“あの人”達に会ったのはそんな生活を始めて一月ほどたったころだった。

「・・・酷いものだ」

集落の跡地を見まわし溜息をつく彼。まだ、元服して数年という年頃だろうか、丸みが残る顔立ちには疲れが見えていた。

「どこに行つてもこの有様・・・奴等を追いかけるだけではダメだな。先回りをして狙われそうな集落を防衛するという方法に変えよう」

「だな・・・と言っても、幕府もだいぶ腰が引けてるらしいからな。それに見てよ、この長巻き・・・ぼろっぼろ」

「磨ぐ暇なんてねエからな」

「ホント、最近なんて斬るじゃなくて叩くって感じだもん。後は突き刺すとか。痛いと思うよコレ。切れ味悪いから余計に」

「文句言ってる場合か。そろそろ行くぞ・・・本隊から連絡のある経由地まではまだまだ遠いんだからな」

「わくってるって・・・先輩達にどやされるのも勘弁願いたいし」

ワイワイと話している少年達の目には気力がみなぎり、まだ諦めていないということがわかった。

だが、噂に聞く限りでは“攘夷志士”も立場が危ういらしく天人と同じように略奪に走る者達もいるらしい。もう何も失うものはないが、戯れに殺されないと限らない。

息を潜めて隠れていると、不意にキラキラとしたものが目に映った。

「生きてる・・・？」

それは話しかけてきた少年の髪だった。珍しい銀髪、血の色に似た赤い瞳、息を詰まらせてそれを見ていたが、少年が手を伸ばしてきた瞬間にその手を薙ぎ払っていた。

「・・・っ」

「銀!？」

慌てて駆け寄ってきたのは、彼等の中でも一番年嵩に見える少年。

「だいじょぶ？銀時・・・って、この子・・・この集落の生き残り？」

「警戒しているな」

「十一・・・磨ちゃん・・・殺気消して。余計怖がる」

キョトリとした少年と眉間にしわを寄せた少年に、銀髪の少年が告げる。

「こんな目に遭ったんだ。警戒して当然だろう？・・・むやみやたらに手を伸ばした銀が悪い」

「ん、玄ちゃんの言う通り。ごめんね？・・・殴られるかと思った？」

少しだけ距離をとってしゃがみ込み、こちらに話しかけてくる銀髪

の少年に戸惑う。

「おい、答えるよ」

ギロリ、と短気そうな少年が威嚇するように促すと、その頭を女顔の少年が叩いた。

「たわけ者！！余計に怯えさせてどうするんだ！高杉！」

「ウルセエなア、ツラは。ったく・・・思いつきり叩かなくたっていいじゃねエか」

「ツラじゃない！桂だ！！」

彼等のやり取りで名前と力関係がなんとなくわかる。だが、まだ警戒を解くわけにはいかない。

「なあ、お前・・・名前は？」

根気よく銀髪の少年が声をかけてくる。

「止めとけよ銀時。コイツ、口がきけねエんだよ。それか口をきく気がねエか。どっちにしたってここで俺達が何出来んだよ」

戦場にも連れてくつもりか。

そう言われれば、銀髪の少年は困ったように眉根を寄せた。

「晋助・・・でも・・・せめて、人がいる所に」

「バカだな、今じゃ自分と家族が生きてくだけでも精一杯って奴らばかりなんだぞ？そんな所にガキを連れてったって、邪険にされるに決まってるんだろ」

言い返されれば何とも言えず、銀髪の少年は俯いてしまう。

「晋、言い過ぎだぞ」

「フン・・・俺達は攘夷戦争に参加してるんだぜ？それに、犬猫を捨てるのはわけが違う」

「そりゃそうだが・・・」

彼等の話の半分も理解はできなかったが、おそらくは自分の処遇について話しているのだろうということはわかった。

ついでに、あの短気そうな少年には毛嫌いされているということも。

「・・・夏之介」

「え？」

「保科夏之介！！俺の名前だ！お前ら攘夷志士だろ！？もうここには食べ物なんて残ってない！俺のことなんてほっとけよ！どっか行け！」

威嚇して毛を逆立たせている猫のような子どもに、少年達は呆然と視線を向けた。

「攘夷志士が食べ物を略奪してるって話は聞いたことはあるけど・・・」

・まさか、そんな連中と同じにされるとはな」

深い溜息をつき眉間にしわを寄せる少年。

「まあ、でもそんなもんじゃないの？ 攘夷志士のイメージってさ」

軽い調子でそう言った少年に女顔の少年がくっついてかかる。

「バカ言え、俺達は国の為を思ってたな！」

「ハイハイ、耳にタコ。……こんなガキに何言ったってわかんね
エよ」

短気そうな少年にそう言われ、女顔の少年はムツとする。

「なあ、なつのすけって、字はどう書くんのだ？」

そんな少年たちをまるっと無視して銀髪の少年が問いかけてくる。

「え……と、夏・之・介」

武家の子としてある程度の知識は叩き込まれていたため、自分の名前くらいは書ける。ぐりぐりと拙い字で地面に名前を書いて見せると、銀髪の少年は破顔した。

「そっか……良い名前だな」

銀髪の少年の笑顔を見た瞬間、警戒していた心が緩む。

「お前の名前……」

呼ばれているから音はわかる。だが、字が知りたかった。

「ん？俺か？俺は・・・銀・時っていうんだ」

彼はちゃんと地面に字を書きながら、自分の名前を告げた。

「銀時・・・」

ビビツときた、とはこういうことをいうのだろう。夏之介はキラキラとした目を銀時に向けた。

「ん？」

ことり、と首を傾げた銀時に、夏之介はしがみつくように言った。

「俺も連れて行って！父上も母上も、みんな、天人に殺された！俺・・・俺、みんなの仇を討ちたい！！」

「え、ちょ・・・」

戸惑った様子の銀時に、高杉は呆れたように溜息をついた。

「ほらな・・・余計なことするからだぞ」

「刀なら扱える！・・・まだ、小太刀しか使えないけど・・・俺だって武家の子だ！」

武家、という言葉に少年達は目を丸くした。

薄汚れた子どもは、どう見たってそこらの農民の子のように見えたのだ。

だが、よくよく思い返してみれば、名字を告げていたということはそれなりに身分のある家の子どもということであり、それに着物も汚れてはいるが上等な作りとわかる。

「待てよ、保科っていったら幕府の高官の名前じゃねエか」

高杉が呟く。

幕府にも繋がりを持っていた父の話を聞いていて、幕府の役人の名前はよく聞いていた。その中でも上の方に位置している者の中に保科という名の人物がいたのを思い出したのだ。

「幕府高官の保科は、俺の父の又従兄で……」

「へエ、そうなのか」

高杉の興味はそこまでだったようで、夏之介の言葉を最後まで聞くことなく相槌を打ってフイ、と顔を逸らした。

「なあ、夏之介……仇を討ちたいって言ったな」

銀時が真剣な表情で問う。

「うん、討ちたい」

「……そうか」

銀時は少し考え込み、それから手を差し出した。

「付いて来い。もし、遅れるようなら置いて行く・・・良いな？」

「・・・はい！」

勢い良く頷いた夏之介に銀時は頷き、他の少年達は止めるでもなくしょうがないといった雰囲気苦笑をうかべた。

27・過去――春霞

春井道場は近辺の武家の子ども達に剣術を教える父の道場だった。母は幼い頃に亡くなり、5つ上の姉が1人。

裕福、とは言い難いがそれなりに扶持ふちを貰って暮らしていたので、衣食住に困ることはなかった。

そんな生活が一変したのが天人の襲来から約8年後。攘夷戦争も末期という頃、突如天人の軍勢が春井道場のある村を襲った。

成威族　　犬頭人身の天人。女は凌辱され、男は喉を裂かれて殺された。

姉も、父も・・・仲の良かった村の子ども達も、みんな死んでいった。

なぜ、自分が生き残れたのか。

姉が懸命に自分だけはと床下の貯蔵庫に隠してくれたことだけは覚えていて・・・その後のことは耳を塞いでただじつとしていたからわからなかった。

おびただしい血の海が床上に広がっていたのを見れば、どんなことがあったのかは想像できるが、想像したくないというのが本音だ。

さすがの成威族コンコも、むせかえる血のにおいの中で己のにおいを嗅ぎわけることは出来なかったようで、床下まで荒らされなかったのが

不幸中の幸いといえた。

しかし、ただ1人残されてこの先どうしたらいいのか、途方に暮れてしまった。

とにかく、父や姉の分まで生きるのだと決めて、後ろ髪引かれる思いを振りきって村を後にした。

「そういえば・・・アイツは無事だろうか」

近くの集落から道場に通って来ていた同じ年の少年のことを思い出す。

少々泣き虫なのが玉に瑕^{きず}だが、それでも彼とは気が合ったので、いつも組を作る時は一緒になって剣術の稽古に励んだ。

楽しかった思い出ばかりが脳裏を過り、辛い現実を受け止めきれないのだとどこか冷静に判断する自分がいる。

攘夷戦争も末期となり戦火は広がるばかり。見たこともないような大きな武器で侍達を圧倒した天人に、幕府も及び腰になっていると聞いた。

「この国は、どうなってしまうんだろう・・・」

溜息交じりに呟きながら、生きるための術を探す旅を続ける。

何日が過ぎただろうか。村や集落が点在していたハズのこの地域だが、1つとして無事な場所はなかった。

「そんな……ここもだなんて……」

自分の知る限り探しまわったが、どの村や集落でも生存者は見つからなかった。

愕然とする。世界中で人間は自分たった1人になってしまったかのような感覚。希望が打ち砕かれていく。あの時、姉と共に死ねていたらならばと生を呪う。

呆然とたたずむ己の周りに気配が集まって来る。

胡乱うごん気に視線を向ければ、そこには牛型の天人の軍勢がいた。

もうどうにでもなれという気分だった。ぼろきれのようにされようが、五体バラバラにされようが、何の感情も湧かないだろうと思っ

た。
(痛い、くらいは感じるかな)

姉達はもつと辛い思いをしたのだろう。髑なぶられた村の女の死体を見ることがあるため、姉がどうなったか想像に難くない。

それに比べれば、男である自分はただ殺されるだけなのだからマシだとさえ思えた。

(殺せばいい。どうせ、私には何も残っていない)

諦めの表情で目を閉じた　　が、痛みは来なかった。

「がっ！」

「ぐあっ」

「な、何だ、貴様ら!!」

天人達が騒ぎ出す。

何事かと目を開き、瞠目した。

「・・・な」

まるで剣舞を舞うような戦い方をする少年だった。

ひらりひらりと身軽に天人達の攻撃を交わし、相手の武器を奪いながら次々と自分の倍はあるのではないかという天人達を斬り倒していく。

綺麗だ、と思った。

剣術は型が美しいことが好ましいと父は何度も言っていた。型にこだわる父は、少しでも狂うと厳しくそれを指導した。

だが、彼の少年の剣に型はなかった。滅茶苦茶に振り回しているようにも見えるのに、それを綺麗だと感じたのだ。

呆然とその戦いを見ていたが、いつしか天人達は動かなくなっていた。

「・・・強い」

思わず感嘆の声が漏れた。

次の瞬間、ゴチンという音と共に頭に衝撃が来た。

「バカ野郎！何やってんだオマエ！死ぬ気か！！」

「~~~~つたあ・・・」

思いの外強く殴られて、頭を抱えてしゃがみ込む。

「こんなの比較にならないくらいに痛い思いをして死ぬとこだったんだぞ！！」

少年の叱責に、痛みで潤んだ目を閉じる。

「死ぬ・・・つもりだったんだ・・・だって、もう、何も・・・残ってないから」

生きる気力すら残っていなかった。

「お前つ・・・」

「・・・っ良太郎！」

少年が怒りの声をあげる直前に、聞き覚えのある声が耳に届く。

「え・・・夏之・・・介？」

共に剣を学んだ朋友ともの姿に、良太郎は目を丸くした。

「村、見たよ・・・お前、もう死んだと思ってた・・・！」

抱きついてきた夏之介は号泣していた。わんわんと恥ずかしげもなく泣ける夏之介が今は羨ましかった。

自分も泣いて思いを昇華出来れば良いのと思った。

ゴチン！

「痛っ」

また少年に殴られた。

「泣けよ！辛かったら泣け！嬉しかったら泣け！生きる！お前はただ生きているんだ。生きてくても生きることの出来なかった人達に分まで、その生を大事にしろ！それが・・・それが生き残った者の義務だ！」

心からの叫びだった。その目には深い悲しみが映しだされていた。

（この人も・・・大切な誰かを失ったんだ）

良太郎はそう感じた。そう感じたら涙が溢れてきた。

もう　　涙が止まらなくなっていた。

「あーあ、銀時つたらまた拾っちゃうんだろうな」

「全く・・・他の陣にも子ども2人囲ってんのに・・・」

「まあ、先輩方も何も言わないのだから・・・良いだろう」

「というか、あの2人とこの2人は違うだろ」

「まあ、玄人と素人の差はあるだろうが・・・武家の子ならば問題ないだろう」

銀時達を遠巻きに見つめながら、幼馴染達は再び諦めの表情で言葉を交わす。

銀時が拾ってくる子どもはどこか銀時自身に似ている境遇の子どもばかりだ。警戒心が強く、少し厭世的えんせいてきで、戦争孤児。

放っておけないのだろうと思った。

師である松陽も、銀時を拾ってきた時に言っていた。

『ほっとけなかつたんですよえ・・・懐かせてみたいと思っただです』

ほけほけと笑いながら告げた師に、子ども心にそんなんで良いのかと思っただのは一生心の中にしまっておこう。そう決めた。

28・過去――氷柱 Attention:性的表現R-12くらい? (前書

軽い性的表現あります。

苦手な人は読み飛ばしてください。

見目が良い事は武器だった。“色”に最適の人材。

そう言われながら、その手の知識を叩き込まれて育った。

忍の家に生まれた自分は、親に言われるがままその技術を磨き、感情の無い人形のように与えられた課題をこなしていた。

初任務は5歳の時。

“そういう趣味”の男が対象だったため、己に任務の依頼が来た。

まるでお姫様のように着飾り、その男の元へと連れて行かれた。酒を注ぐ手つきも座敷での所作も全て完璧だった。

一枚一枚肌蹴はだけられていく着物を見ても、直接肌をすべる手を見ても、何とも思わなかった。

自分のあられもない姿に夢中になっている男を、仲間が背後からバツサリと斬り捨ててもただ無感動に動かなくなった男を眺めていた。

「帰るぞ、お冬ふゆ」

生まれた季節が冬だったから、お冬。そんな適当な命名にも腹は立たなかった。

しかし、お冬にも感情を出せる相手はいた。里長の子の秋汰だ。しゅうた

おつちよこちよいで口が軽い。忍には向かないのではと次期長ともいえる秋汰に不安の声があちこちから囁かれた。

「・・・ばつかみたい」

皆、秋汰のことを良く知らないだけだ。お冬は思う。

同じ年でありながら、組み手をすれば一回りも年上の子にも負けな
い強さを持っていた。ほんの少しの欠点のために見過ごしていい才
能ではなかった。

里長もそのことはわかっていたのか、周囲の蔭口に惑わされること
なく彼の才能を伸ばすことに専念していた。

そのせいで、おつちよこちよいも、口の軽さも治らなかったのだが。

「なあ、冬」

「なに？」

「お前、嫌じゃないか？・・・知らない男に触られるの」

「わかんない」

生まれたその時から自分は“色”専任の忍になるのだと決められていたのだから、嫌も何もないだろう。

「・・・でも、綺麗な着物を着れて、お化粧品もしてもらって、美味しいものを食べれて・・・他の子からは羨ましいって言われる」

「ばっかじゃないの・・・自分達もやってみろっつんだよ。くノ一は大体そんな任務になることが多いんだから、後でその大変さを知ることになるんだ」

秋汰は自分のことのように怒る。感情に素直なのだ。だから口が軽いと言われる。

一度だけ秋汰と組まされて任務をしたことがあった。戦闘だけならば秋汰は同年代やその少し上の世代と比べても断トツで優れていた。だからお冬に引っかけた男を始末する役目を仰せ付かったわけだ。

結果はその男を含め、周りで睨はり立てた連中全てを皆殺し。それも一瞬の出来事だった。

秋汰の武器は千本と呼ばれるもの。それに毒をぬって相手を絶命させる。正確な投擲と技術は大人も顔負けだった。

「あんなの、慣れちゃいけない。・・・俺が長になったら、絶対にそんな任務受けさせないから」

「でも、それしか私には出来ないよ？」

そう教育されたのだから、しょうがない。

そうお冬が言えば、秋汰は怒ったように肩を怒らせてお冬を睨んだ。
「今からでも全然遅くないだろ！他の同い年の連中なんか、まだのんびりと修行してんだぞ！」

「それは・・・そうだけど・・・でも、使えるものは使った方が良
いと思うの」

のんびりと告げるお冬に、秋汰はガツクリと肩を落とした。

「も・・・なんでお冬はそんなに従順になれるんだよ」

「・・・だって、母様も父様も褒めてくれる」

「っ・・・そうかよ！」

スクツと立ち上がった秋汰をのんびりと見上げ、お冬は首を傾げた。

「秋汰？」

「お冬のバカ！アホ！間抜け！！」

思いつく限りの悪口を口にして秋汰はその場を後にした。

「・・・・・・なによう・・・だって、仕方ないじゃない・・・」

両親が喜ぶ顔が刷り込まれている。良い子だと頭を撫でてくれるその暖かい手、自慢の娘だと胸を張る父。私の誇りだと称^{ほこ}える母^た。

それらは全て、お冬が“色”の任務をきちんとなしているから与

えられるものなのだ。

美しいと評される顔を歪ませ、お冬は膝に顔を突っ伏した。

そんなお冬達の生活を一変させたのは攘夷の動きだった。依頼は徐々に戦争への参加ばかりになり、対人間の依頼はほとんど無くなった。

父も母も戦争に駆り出されることが多くなった。

秋汰もその戦闘能力を買われ、齢9つで戦争に参加していた。お冬は・・・皆の無事を祈るしか出来なかった。

何回目かの戦争への忍の派遣。

第一陣で出撃した父と母は帰らぬ人となった。遺体は戦場に置いてくるしかなかったと聞けば、そうかと頷くしかなかった。

忍は常に命の危険にさらされる仕事だ。両親の死は覚悟していたことだった。

ただ、秋汰がその遺髪を持ちかえた時、お冬は一筋の涙をこぼした。忍は涙を流してはいけない。その決まりを破ったただ一度の涙だった。

お冬に出陣の命が出たのはその数日後だった。

里の働き手は少しずつ減り、もう、子どもであろうとも任務に出さないわけにはいかなくなっていたのだ。

「お前には“色”の才能がある・・・天人といえど、お前の最大の武器を駆使すれば引つかからないわけがない」

そう言われれば、お冬は素直に頷いた。

秋汰と組まされるのはこれが2回目だった。お互いに次はないかもしれないと思いつながら任地へと向かった。

そこには天人達が陣を張っており、お冬はそこに酒を届ける設定だった。

辰羅族　人間によく似た容姿の天人。とがった長い耳が特徴と言える。彼等は傭兵三大家族の1つであり、戦闘能力は人間の遙か上をいく存在なのだという。

そんな辰羅族に子供2人が勝てるはずはない。だが、その部隊はどこかに援軍を派遣した後らしく、陣に残っていたのは数人の部下だけだった。

「・・・あ、あのう」

「なんだ・・・」

不機嫌そうだがすぐに殺気立たないのは傭兵部族としての誇りか。

「ち、近くの村に住んでるんですが・・・こ、ここに酒を届けろって言われて・・・」

オドオドとした様子で話すお冬に、辰羅族は首を傾げた。

「おまえ頼んだか？」

「いや？・・・俺は頼んでないぞ」

「俺も知らない」

「・・・もしかしたら、隊長達か？」

「ヒマ潰しにと置いて行っただか・・・なかなか隊長達も気を使ってくれているんだな」

お冬が何も言わなくても自分達の良いように解釈してくれる辰羅族に、ひとまずホツとする。

「あ、あの・・・お酒、置いておきますから・・・」

「ん？・・・おい、おまえ・・・よく見れば綺麗な顔をしてるじゃないか。酌をしる。出来るだろう？」

「よせよせ、まだ子どもだぞ」

「これだけの素材だ、大人になればもっと楽しめるぞ」

「そついうものか？」

天人にも自分の見目は美しく見えるらしい。お冬は言われるままに酒を注ぎ、懸命に隙を作ろうとするが、やはりそこは傭兵部族であるからか常に警戒を怠ることはない。

辰羅族たちがほろ酔い気分になった頃、いい加減に焦れてきたお冬

は眠り薬をそつと酒に混ぜらせる。

「おい！」

「きゃ！」

「お前、今何を入れた」

見られていたと気付いた時には遅かった。酔っていても辰羅族は傭兵部族。考えるまでもなく翻られておしまいだ。

はじめて任務で死の恐怖を感じた。

目を閉じ、お冬は全てを受け入れる覚悟をした。

「させるか！！」

千本とクナイの嵐。辰羅族が怯んだ瞬間に手を引かれていた。

「秋汰！」

「何でもかんでも受け入れるんじゃない！！こんな任務、俺達には荷が勝ちすぎる・・・」

懸命に走るが、大人と子どもでは足の長さが違う。すぐに追いつかれ、お冬と秋汰は辰羅族に囲まれてしまっていた。

「このガキ・・・ただのガキじゃねエな」

「聞いたことがあるぞ、地球には侍の他に忍という生き物がいると。」

侍は刀を振り回す連中ばかりだが、忍はあらゆる手を使って敵を倒すらしい」

「ほう……お前達は、忍か？」

「そうだ！」

ギツと相手を睨み据え、秋汰は叫ぶ。

「良い目をしているが……邪魔なことには変わりはないな」

陣を狙ってきた以上は始末せねばなるまい。辰羅族は次々と武器を手に包囲網を狭くしていく。

「秋汰……」

恐怖で身体が震える。

そんなお冬を庇いながら、秋汰はクナイを構えた。

「伏せろ!!」

どこからか聞こえてきた声に、お冬と秋汰はとっさに従った。

煙幕が張られた後に多くの足音が聞こえ、剣戟の音があちこちから聞こえる。

「大丈夫か!？」

ガシツと掴まれた手にビクリと身体を震わせた。手を掴んだのは、

銀髪の少年だった。

「大丈夫だ、俺達の陣に行こう。……お前達と同じ里の忍もいるから……」

その言葉にホッと息をつき、お冬は秋汰に視線を向けた。

「……行こう、冬。ここじゃ俺達は足手まといだ」

「……うん」

未だに剣戟の音が響く戦場を抜け出し、彼等の陣へと走った。

途中遅れそうになったお冬を見て銀髪の少年は困ったように笑い、一言謝ったかと思っただらひょいと抱えあげて走りだした。

「お前は、大丈夫か？」

訊ねられて秋汰は頷いた。

「は、はい！行けます！」

秋汰とて忍のはしくれ。大人についていけなければ任務で生き残ることは難しかった。

「うん、良い返事だな」

ニツと笑った少年は、秋汰を気にすることなく速度をあげた。

がむしゃらに少年に付いて走っていた秋汰だったが、殺気を感じて足を止めた。

「良い感度だ・・・さすが忍だな」

少年もまた立ち止まり、お冬を己に預けるとすらりと刀を抜いた。

角が2本生えた馬面の天人達が3人を囲んでいた。

白銀の刃が赤く染まったのはその一瞬の後だった。動体視力は良い

方だと自負していた秋汰ですら、全てを見切れることは出来なかった。

「す、げえ……」

思わず漏れた感嘆の言葉に、少年はニヤリと笑った。

「忍に褒められんのは悪い気はしねえな」

こんな子どもなのに一人前の忍として扱ってくれた。そのことが秋汰は嬉しかった。

少年は再びお冬を担ぎあげると自陣へと走り出す。

秋汰は遅れないようにについて行くのが精一杯だったが、秋汰の出せるギリギリのスピードで彼が走ってくれていたことに後から気付いた。

彼等の陣に着いてからは更に大変だった。

里が壊滅し、生き残りはお冬と自分を含めて5人だということを知り、この後はこの攘夷第5部隊と共に動くことに決まった。

お冬と秋汰は子どもということもあり、まだ歳若い者達が集まる別働部隊に配置された。

「俺は桂小太郎だ。よろしくな」

一見すると女のような少年が手を差し伸べてくる。

「あ、はい」

ガツチリと握手を交わしながら頷けば、その脇に立つ少年が秋汰を上から下まで眺めまわした。

「忍つてのは、こんな小さなうちから任務に放り込むのか？」

単純に気になっただけらしく、声音は平坦だ。

「人員も少なくなってきたので・・・」

お冬が答えれば、彼はそうかと短く呟いてフツと笑った。

「高杉晋助だ。よろしく頼む」

「はいはい、俺は入江十一ね？よろしくー！」

「古田稔磨だ」

「俺は久坂玄火・・・で、こつちが」

「坂田銀時・・・よろしく」

小さく笑い自己紹介をした彼を見て秋汰は口を開いた。

「攘夷志士として戦うなら、忍としてではなく侍として戦いたい。・・・忍の名を捨てる・・・だから、俺に名前をください！」

ギョツとする銀時に、幼馴染達がニツと笑った。

「」使命だぜエ、銀時イ」

「お前が拾って来たようなものだ・・・お前が責任を取れ」

「ちょ、晋助、小太郎！」

「ま、小太郎の言う通りだな。・・・先輩方に進言してこっちの部隊に入れさせたのは銀だしな」

「玄ちゃん!？」

「ま、面倒は皆で見るけど、基本的に銀時が責任持つのは当然だよな」

「同意だ」

「ええつ、十一に磨ちゃんまで・・・なんで・・・俺、人の面倒なんて見れねエよ！」

慌てる銀時だが、幼馴染達は銀時が断れないのを知っているからこそ取り合わない。

「ほら、待ってんじゃねエか」

「うつつ、そ、そんなコト言われても・・・」

期待に満ちた目を向けてくる秋汰をチラリと見て、銀時は更に呻く。

「名前なんて・・・責任重大すぎるってエ・・・」

渋る銀時を幼馴染達は容赦なく秋汰達の方へと押しやった。

「俺達いるとまともに考えられなさそーだし、ちょっと出てるから」

「ちゃんと考えてやれよ」

「逃げてくるのは許さんぞ、銀時」

「えっ！？ええっつっ！！」

ゾロゾロと出ていってしまった幼馴染達を心の中で盛大に罵倒しながら、銀時はぎこちなく彼等に向き直った。

「……えつと、じゃあ……その、名前をつけるとして、忍としての名前を聞きたいんだけど」

「……秋汰です」

「冬」

「……えつと、冬も、名前つけんの？」

確認すればこっくりと頷かれて銀時は口元を引き攣らせた。

「ふ……2人分……」

責任重大だ。名前なんてこれからずっと名乗っていくものを自分で自分に託すんだと不思議になる。

「な、なんで、俺？」

「俺を忍と認めてくれたのは貴方だった。だから、侍としても認めて欲しいんだ」

真っ直ぐな視線に、銀時はくらりとめまいを覚えた。あんなにも真っ直ぐな視線を向けられたのは久しぶりだ。

自分が同じ年頃だった時よりもずっと大人だと思う。

「そっか・・・」

彼等の必死さに松陽といた頃の自分を思い出す。あの人に認めて欲しかった。あの人役に立ちたかった。

あの人に拾われたから、幼馴染達がいたから、今の自分がある。

「迷惑だっってわかってます。でも・・・！」

言い募る秋汰に銀時は苦笑した。

「わかった・・・でも、気に入らないって怒るなよ」

「そんなこと、しません！」

秋汰が嬉しそうに言えば、お冬もコクコクと頷く。

「・・・じゃあ、ちょっと時間くれよな。すぐになんて無理だぞ」

「わかってますー！」

ご機嫌な秋汰とお冬に、フツと笑みをこぼし銀時は優しいまなざしを向けた。

「約束する・・・お前達が誇って名乗れる名前を考える」

思えば既にその時から決めていたのだ。

この人に付いて行く、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1018r/>

銀色の真実と【六花】

2011年12月11日22時52分発行